

と思つてゐた。この滑稽な考は、みんな莫迦な間違ひであつた。「ル・レエ」の侯爵よりもつと以上であつた譯者云。Le Legs は一七三六年に出たマリヴォオ Muri'aux の一幕喜劇の名。ラルナアジ。夫人は、相かはらずいろいろと嬌態をして見せたり、優しい言葉をかけたりした。私よりもつと聰明(反意的)にな者でも、これを眞面目に取る氣づかひのないやうなものであつた。彼女が然うすればするほど、尙私の間違つた考を確めるやうになつた。實際自分は彼女に戀をしてゐる。斯の考は自分に切ない思ひをさせた。私はをりをり自分にも、又彼女にも、

「ああ！ 何爲是が事實にならないんだらう？ すれば私は世の中で一番幸福な男になれるものを。」

と嘆息しながら言つた。思ふに、私の坊ちやんらしい、仇氣ないところが彼女の好奇心を動かさせる原因になつた。それを彼女が利用する氣であつたのであらう。

ロマンへ來た時に、吾儕は、コロンビエ夫人の一行と別れた。迹はラルナアジ。夫人と、トリニアン侯爵と、私と三人で、故らに緩乎と、世にも愉快な旅をつづけた。

侯爵は病體で、そして氣むづかしやだが、それでも面白い處はあつた。然し見す見す目の前の夫人といふ餌を、私に横取りされるのを見てゐるのが、業腹で堪らなかつたらしい。夫人は、私への愛情を、些とも隠さうとはしなかつたので、それを侯爵がまた私自身より餘計目鋭く見破つて、いろいろな暗誑を言ふ。若しも私が自分の特有の邪推で、此の二人が腹を合して、私を弄る積りだと想はなかつたら、夫人の眞情にもつと深く信頼するやうになつたかも知れなかつた。然うした間違つた考から、私は此の上もない頑固一逼の人間と見せかけねばならなくなつた。本來なら、私の心は既う全く彼女に擒はれてゐるのであり、仕合せな位置にも居たのだから、反對に色男を氣取つてやつて行けた筈であつた。夫人がどうして私みたやうな男に愛憎を盡かさなかつたか、輕蔑して打棄つて了はなかつたか、不思議でたまらぬ。併し、夫人もなかなかの通人て、よく物の見さかひの附く人であつたから、私が冷淡でゐるといふよりも、極りが悪さに然うしてゐるのだとはよく見抜いてゐた。

併し、到頭夫人といふ者が、克く理解される時が來た。がそれは容易なことではな

1737(26)-1741(30)

かつた。ヴァランス Valance へ来て、晝食をすることになつた。いつものやうにして、そのあとの時間を費した。私達は市外のサン・ジラク Saint-Jacques に宿を取つた。私はいつまでも此の宿屋と、夫人の這入つた室とを忘れはすまい。食後に夫人は散歩と言ひ出した。侯爵が散歩の出来ぬ人であることは夫人が知つてゐた。他人交ぜずの密會には、此の上の好都合がないので、夫人は十分にこの機會を利用する積りであつた。最早あとには、樂みをするにも、時日がいくらも残つてゐなかつた。二人は市の外濠に添つて、ぶらぶら歩いた。その間に私は何時しか自分の長い病苦の歴史を話して聞かせた。すると物優しい聲音で、自分も牽き入れられるといふ風に應答して、握つてゐる私の手を胸のところへぢいつと押し附けに行つた。如何に頑固を極め込まうとしても、到底彼女の熱い眞情を感じずにはゐられなかつた。愛嬌のある人といふことを前に話した。愛は此の人に魅力を與へた。青春のすべての光輝は彼女に還つて來た。その上、彼女の媚には多くの技巧が加はつてゐた。甚麼無神経でも、感亂されずにはゐられぬ。私も胸の平和を擾さみだされるやうな氣がして、今にも心を打ち撒けて了はうかといふ點まで進んで來

1737(26)-1741(30)

てゐた。しかし然うしては彼女にいやがられはせぬか、反感を起させはすまいか、もつと甚く行つて、反拒けられはせぬか、侮辱されはせぬか、卓上談話の材料になりはせぬか、無情な侯爵にお芽出たらなぞと冷かされはせぬか。いろいろに心配をするにつけて、自分と自分の意氣地なしが腹立しくて堪らなかつたけれど、その臆病な羞恥心は、叱つてもどうしても、勇氣を出させることの出来ないやうなものであつた。私は綾首臺の上にあるやうな氣がした。最早セラドン Caldon としての話を終つた。實に莫迦氣切つてゐて話にもならなかつた譯者云。セラドンは三、四七、三四八頁の注に見える、ヂェルフェのラストレエの一人物で、美女アストレエの戀人。セラドンといふ名は、心の渝らぬ、そして弱弱しい、臆病な情人の代名詞となつてゐる。私はもうどんな容態をしてゐてよいのか、何と言つてよいのか、解らなくなつて、黙つて了つた。苦り切つた顔附きをした。心配しただけの取り扱ひを受けるに、必要なやうな振舞は皆した。好い鹽梅にラルナアジッ夫人は、情ある態度で來た。突然私の頸へ片腕を廻はして、この沈黙を破つた。其の口は、私の口の端へ來て、判然とその意中を談つたので、私の謬想は解けずにはゐなかつた。此の

1737(26)-1741(30)

機會がこれよりも丁度よい時に起るといふことは、望まれぬ事であつた。急に私は生氣づいて來た。然らざるべき時であつた。彼女は私に自信を吹き込んでくれた。此の自信が缺けてゐるばかりに、始終私は自己を失つてゐたのではないか。私は此の時こそ、十分自己を保有してゐた。私の眼、私の官能、私の情念、私の口が、此の時ぐらゐよく活いたことはなかつた。自分の過誤を、この時ぐらゐ完全に救つたことはなかつた。そして若し此の聊かの勝利が、夫人に對して若干の骨折を費させたにしても、彼女はさつとそれを後悔しなかつたに違ひない。

私は百年生き永らへようとも、屹度いつの時でも、この愛嬌の深い婦人のことを憶ひ出して、愉快を感じぬことはあるまいと思ふ。愛嬌。美人でもなく、妙齡でもなかつたから然らう言ふのであるが、固より決して醜くもなければ、嬌さんでもなかつた。才智技能を發揮する上に、何等の妨げもなかつた。一般の婦人とは反對に、彼女のフレッシュな點は、その顔面には餘り現はれなかつた。これは生脂肪のため、荒らされて然らなつたのであらう。彼女が男に靡きやすいといふのも、つまり自分の眞價を顯はす折がないからであつた。彼女を一見しただけでは、愛する氣

1737(26)-1741(30)

になれぬ者があるかも知れぬけれど、一度彼女に接近してみても、尙嘆賞せず居るといふことは出來ぬ。彼女が相手えらばずに、いつも私に對しての如く、深い情を注がなかつた譯は、これと解ると思ふ。私に對しては、殆んど亂暴に近いほど、激しい熱い心を注いだが、そのうちにも、感情よりは理智の方が勝つてゐた。しばらく一緒に楽しく日を送つた間に、縦ひ官能的な、放縱な傾きはあつたにしても、私を瞞した束縛の爲方から考へると、彼女自身の逸樂よりも、私の健康を愛したといふ方に近い所があつた。

私達の交情は侯爵の目から洩れることが出來なかつた。私への冷罵は減ずるところでなかつた。反對に、戀に痺痺した哀むべき者、女主の鋭い刃に身を殉ずる者として私を見てゐた。一つの言葉をも、一つの微笑をも、一つの思入れをも見逃がす人でなかつたから、二人の間の事は何も彼も嗅ぎ知られてゐるのだと察せられた。私より一倍目の利く夫人が侯爵は決して瞞されてゐるやうな人間でなくて、一個の當世紳士だと知らせてくれたので、私も成る程と思つた。とにかく、冗談の時は別として、彼ほど注意深く、丁寧に身を振舞ふといふことは、他の人には望ま

1737(26)-1741(30)

れなかつた。それを私に對してさへ、私が今度の件に成功した後はいくらか變つたが、矢張然ういふ態度であつた。彼は恐らくこの成功の名譽を私に負はせたのであらう。見かけによらぬ開けた人間と想つたのであらう。それは言ふまでもなく彼の誤解であつたが、構ふことはないと思つて、その誤解を利用した。然うなると這箇が可笑しくなつて來て、其際皮肉を言はれても機嫌よくそれを受け流して、時時面白づくに、這箇からも混ぜ返すぐらゐにしてゐた。それも皆ラルナアジ。夫人の仕込みで、伶俐者になつたといふ名譽を荷つて得意になつてゐた。私は最早以前のやうな人間でなかつた。

この土地は、食物が豊かであり、季節もよかつたので、到る處で十分御馳走になれた。これは全く侯爵の世話に依るものとして、感謝せねばならぬ。がその世話を、私達の部屋の事にまて持ち込んで來ずとも、事だにと思つた。彼は強ひて世話をさせようがために、いつも自分の僕を先へ送つた。すると此奴が自分の腹からか、主人の吩咐に依つてか、始終夫人の室と侯爵の室とを隣り合せのところ、極めて、私をば家の一番隅の方へ投り込みやうにした。しかし、そのために些とも私は

1737(26)-1741(30)

困らなかつた。二人の密會の味は一層鋭くなつた。此の幸福は四五日續いた。その間の無上の逸樂に、私は醉心地となつた。その情味は醇粹で、潑刺として、何の憂愁も雜つてゐない。斯ういふ心持になつたことは、これが始めて、そして終りであつた。斯うした歡樂を嘗めずに死ぬことを思へば、ラルナアジ夫人の賚がありがたい。

夫人に對する私の情は、戀では決してなかつた。が、それは少くとも彼女の心に酬いる柔しい心持であつた。矢張一種の欲情でもあり、愛情でもあつた。その欲情は歡樂に燃え、その愛情は對話の間に流れ出て、感情のあらゆる魅力がその中に籠つてゐたけれど、熱狂の餘りに一切を忘却して、眞味が解されなかつた、といふやうなものではなかつた。私が眞正の戀を感じたのは、生涯に唯一度きりであつた。それは此の夫人に對してではなかつた。私は、ワレンス夫人を愛したやうな風には、この夫人を愛しなかつた。しかしそれがために却つて、このラルナアジ夫人を生擒つた心持が、百倍も以上に嬉しく思はれた。ワレンス夫人と居る時の私の歡びには、一種の寂しい悲みと、言ひ知れぬ心の壓迫を感ずる習はしがあつた。こ

の妙に苦しいやうな心持は、奈何することも出来なかつた。その女を我が物にしたと言つて祝するよりも、自分が墮落させたのだといふ氣がして、我とわが身が呵責された。それと反對に、ラルナアジ、夫人に向へば、自分の男であるといふこと、自分の幸福を得たことに得意となつて、歡喜と自信とを持つて、官能の奴隸になつた。私の彼女に與へた印象を、自分も分け前した。私は放逸と共に虚榮心をもつて、自分の勝利を考へて見る餘裕があつた。其處から此の勝利を確實にする手段も出て來た。

私は侯爵と何處で別れたか覚えてゐない。たしか其の地方の人であつたらしい。それから後は、ずつと二人きりで旅行を續けた。モンテリマアル Montellimar を來ると、ラルナアジ、夫人は小問使を私の馬車に乗せて、私を彼女の馬車へ入れてくれた。相乗て行けば途中の怠屈などは知らず、管もなく、またその通つて行つた道筋に、何ういふことがあつたかといふことも、話をしろと言はれれば、困る譯である。夫人はモンテリマアルに用があつて、三日間滞在したが、その間も、一度の訪問に四半時より長く私の傍を離れたことはなかつた。それから引き続き、いろいろ

1737(26)-1741(30)

る面倒くさい事があり、請待を受けたこともあつたけれど、彼女はそれに應ずる氣もなかつた。その言譯には加減が悪いのだと言つてゐたけれど、それは少しもわれ／＼の散歩の邪魔になる病氣でなかつた。毎日々々世に稀な美はしい蒼空の下で、世に稀な美はしい田舎道を、互に身を擦りつけ合つて逍遙した。あゝ！その三日間！折につけて私はその時を惜まざにゐられぬ。同じやうな場合は最早ふたたび歸つて來ない。

旅の戀は、永續させることが出来ぬ。早晚互ひに別れねばならぬ。そして今一度その時が來た。私はもう歡樂に倦んだか、或は倦まむとしてゐたか、——私の情は日にますます暮るばかりであつた。けれども、夫人の注意深い魂膽から残つたものは、好意ばかりであつた。吾儕は、別離の悲みを何とかして打ち消したいものと考えた。再會の約束は其處から來た。斯うした養生法が、尠からず利益になつたから、それを利用することと、夫人の保護の下に、サンタンヂョールの村で一冬を送ることの相談を極めた。私は唯五六週間モンベリエに滞在してゐればよかつた。その間に夫人は、世間の後言を招がないやうな方法で、私を迎へ入れる準備をして

1737(26)-1741(30)

置いてくれるはずであつた。彼女は私の心得てゐなければならぬこと言はねばならぬこと爲ねばならぬことについて細々と注意をしてくれた。その間に私達は互ひに手紙を書かねばならぬ。彼女は攝生法に就いても、いろ／＼と必要な事を話した。経験のある醫者に診て貰つて、その勸告をよく聴けと教へた。そして夫人自身は、醫者の處方は甚だに苛くとも、此の次に歸つて來て一緒にゐた時には、屹度監督して十分守らせて見せるといふ決心をした。彼女は私を愛してゐた。話にも誠が籠もつた。此の愛に就いては、その濫りな恩寵よりも、もつと確かな證據を多く私に見せた。私の旅行中の經濟の工合から、不自由を忍んでゐるのは、ないかといふやうなことを考へた。自身も富裕といふ程でなかつたけれど、別れ際になつて、グルノオブルから持つて來てゐた可なり澤山な金を割いて、私が固く謝絶するもかまはず、強ひて取らせることにした。さて遂に私は彼女と別れて發つたが、その時の胸の中には、彼女のことばかり残つた。想ふに、彼女にもまた私に對する強い愛著が残つてゐたのであらう。

再び旅の道に上つたときは、種種な記憶が湧き出して來た。今日まで味つた歎

1737(26)-1741(30)

樂の味や、その次に復私を待ち受けてゐるそれを、心持のよい馬車の中で、しづかに心の行くほど夢想することの出來たのを、此の上もなく満足に感じた。私はサン・タン・ヂ・オル村と、その村での近き將來の楽しい生活との外を考へることは出來なかつた。そかつた。ラルナアジ、夫人と、その周圍の物との外を想ふことは出來なかつた。それらを除いた外の天地間の事物とは、私は全て無交渉であつた。母のことさへ忘れ果ててゐた。ラルナアジ、夫人の住家、その近隣、その交友、その生活法などに關した考を、豫め組み立てさせようと思つて、夫人が話した様様な計畫を、自分の頭の中て捏ね返した。夫人には娘が一人ある。その娘のことを話すたびに、夫人は母の愛を極度に顯はしてゐた。娘は年齢が十五で、活潑な、愛くるしい、氣前のやさしい娘であつた。私はその娘と戀ろになれるといふ約束がある。その約束は忘れな

いが、然し娘として母の情人を、奈何いふ風に待遇するかが疑問であつた。斯うした夢を描いてゐる中に、サン・テスプリ橋から、ルムウラン Hamoulin まで來た。

みんながガアル橋を見に行つてはどうかといふので、その氣になつた譯者云。

Le pont du Gard は、佛蘭西南部、ガアル縣の首邑ニイム Nimes の東北に當つて、ロオユ

1737(26)-1741(30)

Rhôneの支流ガアルに架かつた石橋。昔の羅馬大水道の一部を成すもの。旨い無花果の朝飯を喰つてから、一人の案内を頼つて此の橋を見物に出かけた。羅馬人の工事を實地に賭たのはこれが初めてあつた。最初は唯普通の出来としか思つてゐなかつた。ところが實際を賭ると、豫想以上であつた。現實が豫想の上に出る。然ういふことは私の生涯でこの時だけであつた。然う思はせるといふのは有繫に羅馬人である。その質素な、そして威嚴ある大工事の光景に、私は夥しく心を打たれた。そればかりでない。四方は寥然たる荒野であつて、その沈黙の中央に浮き出してゐるといふことは、一層深い感觸と、一層強い驚嘆とを呼び起した。此の謂はゆる橋は橋でなくて水道であつた。遠い諸方の石坑から、這麼大きな石ばかり澤山搬んで來たり、人の住まぬ地方へ、何千といふ多勢の人間を寄せ集めたりしたのは、そもそもどのやうな力に依つたのであるか。それが思ひやられた。私はこの宏大な建造物の三段目へと登つて行つた。その尊嚴な光景は、土足に踐み躰ることをたゆたはせた。然うして大穹窿の下に、響響する自分の足音に、宛ら昔のその建造に従事した人人の、強い聲を聞くかの思ひがした。此の無限大の中

1737(26)-1741(30)

に立つた自分は、殆んど目に見えぬ一匹の昆蟲に過ぎなかつた。私は自分の身を見る影もないもののやうに感じて、魂も萎靡となつた。そして幽かに溜息とともに、

「何爲自分は羅馬人にならなかつたのだらう！」

と獨言を言つた。幾時間も斯うして冥想してゐるうちに、心は昏迷したやうになつた。家へ歸つて來るにも、丁度失神したやうな、夢見る者のやうな状態であつた。此の幻想は、ラルナアジ、夫人に取つて大なる不利益となるものであつた。彼女は私の出發前に、モンペリエの若い少女たちに迷つてくれては困ると、誠めたが、ガアルの水道に迷はされるなどは言はなかつた。何から何まで疎漏なく豫防するといふことは不可能のことらしう。

ニイムて私は大演技場の趾を看に行つた譯者云。Les Arènes de Nîmes は羅馬人の建てた橢圓形の大劇場。看客三萬を容れて餘あつたといふ。これはまた前のガアル橋などの比でない程雄大なものであるが、それから得た感銘は、反つて微微たるものであつた。これは私の驚嘆が、もう前の時に盡きて了つてゐたためか、或

は市街の真中に立つてゐる爲に、刺撃の起し方が浅かつたのかも知れない。此の宏大で厳しい演技場の外側には、陋い小ぼけな家ばかり並び立つてゐる。内部にはもつと酷い穢い破屋が一杯に塞つてゐる。不調和な混乱した印象しか來ない。随つて看る人の胸中には惜しいものだといふ情が漂うて、快感も嘆美心も起る隙間がない。私は其の後ヴェロナ Verona の演技場も見したが、これはニイムのに比べるゝと、大きさも美麗しさも、實かに劣るものであるけれど、管理と保存とが、残りなく行き届いてゐるので、唯その點からだけ、強い、そして快い刺撃を與へた。一體佛蘭西人は、細慮といふことに關つてゐる。そして、古蹟を重んずることを知らぬ。彼等は事業を起す初には、火のやうになつて騒ぐけれど、終を全うする、出來上つたものを保護する、そんなことは、至て出來ない性分と見える。

氣分がよくなつた。食欲が盛んに動き出して來た。とう／＼一日ポンド・ドリッネル Pont de l'Inuel に停つて、其處らの連中と大宴會を開いて騒いだ。此の料理屋は當時評判通り、歐羅巴第一と言つたほどのものであつた。此の店では、その便宜な位置を利用することに疎漏がなくて、料理なども廉くして氣の利いた物を喰はし

た。這麼淋しい、かけ離れた處の料理屋でありながら、毎日毎日、海魚、川魚、旨い鳥類、上等の酒などを取りかへ引き替へ調進することが出來たのすら不審に思はれたのに、調理法から接待の工合まで、何處かの貴顯の邸宅かなんぞでなくては見られないほどのことをした。それで勘定がたつた一人前三十五スウ(約計七十錢)だといふのだから驚く。然し、このポンド・ドリッネルも何時までも此の調子で續くことが出來なかつた。その評判の高いのに、だん／＼とつけあがつて行つて、終に店は潰れた。

病氣のことはまるで忘れて了つてゐたのを、モンベリエに着いて、始めて思ひ出すといふやうなことであつた。鬱憂はけろりと癒つてゐた。しかしその外の病氣はまだその儘であつた。習慣であまり病苦は感じなかつたが、若し是ほどの病氣を、今猝かに起した人があつたら、それと言つて、きつと力を落すくらゐのものであつた。まにかく情ないより可怖さが勝つて、身體よりも精神が一倍苦痛を受け

てゐたから、或はこれがために身を敗るのでないか知らぬとも思はれた。斯ういふことがあつたに依つて、情の激するままに、身體を忘れて遊び抜いたのであるが、病氣は空想の病氣でないから、氣が鎮まるとすぐにまた其の苦しみを感じたのであつた。そこで私はラルナアジ、夫人の忠告と、此の旅行の目的とを思ひ返して見た。

いろ／＼な高名な醫者を訪うた。別しては、フイズ氏の處へ行つて診察を乞うた。大事に大事を取つて、ある醫者の家へ下宿することにした。その醫者は、フイツ・モリス Fitz Morris といふ愛蘭士の人で、多くの醫學書生を集めて私宅教授をしてゐた。此の人の宅に居ると、病人に取つて都合のよいことには、モリス氏は、塾生たちから食費として普通の金を徴るだけで、病人が出来ても、その診察料や薬價は取らないといふ事にしてゐた。彼は、フイズ氏の處方を守らせて健康を回復させてやらうと請け合つた。彼はよく義務を盡した。此の家に居れば、喰ひ過ぎるなどの憂ひはない。そして私は食物の不自由などはあまり感じない方であつたけれど、比較するものが手近にあつたために、ついモリス氏よりもトリニン氏の方が餘

1737(26)-1741(30)

1737(26)-1741(30)

程贅澤であつたといふことを、時時考へさせられた。だが、飢ゑて死ぬといふ心配があるのでなし、それに同宿の學生たちは、皆快活な輩ばかりであつたから、此の家の生活は、私には大へんな利益になつて、元氣を支へるには十分であつた。朝の中に、藥を飲む、その中に、何か知らぬが異つた水をも飲んだ。大方ヴァル Vals (譯者云、アルデエシ、Ardeche 縣の地名)の鑛泉でもあつたのであらう。それからラルナアジ、夫人へ手紙を書く。此の手紙はちやんと極まつて交換したもので、ルッソは、その親友のダヂングのために、それを取次してゐたのである。晝になると若い一人の友と連れて、カヌウルグ Canouigue へ遠足に出かける。それから歸つて來ると、みんな晝食に集まる。晝食後には或る課業があつて、大抵夕方までそれにかゝる。それは郊外に出て、小晝餐を喰べながら球戯を二三ゲームやる事であつた。私には力もなく、技も出來ないから、競技はしない。然し賭をして、それに贏つのが面白くて、凸凹の石塊道をかまはず、競技者とポオルとを追つ懸けて、彼方此方と駆け廻つたので、愉快な藥になる運動をした。みんな市外の茶屋で小晝餐を喰ふ。その小晝餐が格別嬉しかつたといふ必要もないけれど、其處の店の女たちが、皆綺麗揃

1737(26)-1741(30)

ひてあつたのに、學生達はいづれも行儀が宜かつたといふことだけを言つて置きたい。球戯のチャンピオンであるフイツモリス氏が吾儕のマネジヤであつた。一體若い學生などといふものは、とかく人の氣受けのよくないものであるに、これだけの人数が集つて、這麼に行儀がよくつて、愼深くしてゐるといふことは、外では一寸見られぬことと思はれた。彼等は唯空騒ぎをするだけで、酒に飲まれるやうなこともなく、放縱といふより快闊なのであつた。斯うした日日の暮し方は私の氣に入つた。このままで續いて行ければ、外に何の望みもないといふ程になつた。學生の中に多くの愛蘭士人があつた。今度サンタンデオルへ行く準備に、その學生たちから英語を教はつた。彼の村へ行くべき日か近づいてゐた。ラルナアジ、夫人は手紙を寄越す度ごとに、約束の期限を間違へるなど催促して來た。私もその言葉に従ふ氣であつた。言ふまでもなく、醫者の方では私の病氣が解る道理もなかつたから、唯神經で病氣を拵へてゐるものと見て了つた。發汗劑や、鑛泉や、牛乳を飲ませて置くだけであつた。宗教家と違つて、醫者だの哲學者などといふものは、唯自分たちの説明の出來得ることだけを眞と認め、自家の知識

1737(26)-1741(30)

を以つて、可能を測る唯一の尺度とするものである。私のかかつた醫家諸君は、私の病氣に就いては何事も御存知がない。御存知がないから無病だとして了つたのだ。でも醫者がまるで物を知らないとは、奈何しても言へなかつたらうてはなにか。私は醫者たちに、蕪弄物にされておまけに持合せの金まで捲き上げられてゐるのだと氣附いた。サンタンデオルには、那樣醫者よりもつと勝つたもつと楽しい代用があることを思つて、速く夫人の處へ行かうと決心した。斯う懶巧な分別を極めてモンベリエを出た。

此處を立つたのは丁度十一月も末に近い頃であつた。モンベリエには六週間、彼是二箇月も滞在した。金は十二ルイ(約計百二十圓)も費つたけれど、私の健康なり、教育の上に、何の得る所もなかつた。僅かにフイツモリスに解剖學の講義を聞いただけであつたが、それすら解剖される死體の臭氣に辟易して、直ぐ廢めて了ふやうになつた。

1737(26)-1741(30)

内心に極めてゐたことが何となく不安に思はれて来たので、サンテスブリ橋の近くまで来た時に何うすればよいかの考に沈んだ。此處は丁度サンタンデオルとシャンペリイ街道との追分に當る處であつた。母の記憶その人の手紙、縦しそれはラルナアジ、夫人のほど繁く來なかつたにしても、いづれも此方へ來がけに壓しつけて置いた愛惜の情を胸に喚び起した。その情が今度の歸り途に急に動き出した。親愛と歡樂。この二つを權にかけた。理性の聲のみに耳を傾けるやうな状態に私は置かれた。まづ自分が冒険者といふ格で出かけて行つて見たところで、此の前の時ほど幸福であることが出来るだらうが。サンタンデオルに一人ても英吉利へ行つたことのある人か、英國人をよく知つてゐる人か、英語を心得てゐる人かがあつたなら、化の皮は其の場で引き剥がれて了ふ。ラルナアジの一家の人たちは、好意も寄せず、當り前の待遇もしないかも知れぬ。それにあの娘のことも何となく氣になる。これには随分と餘計に心を遣つた。自分はその娘と戀仲になるやうなことはないだらうか。然う思ふと顫へた。斯う思つたばかりでも、もうその事件が半分爲遂げられたやうな氣がした。ラルナアジ、夫人の慈惠に酬

1737(26)-1741(30)

いむがためと言ひつつ面白くない交際を求めて行つて娘を墮落させ、加之にその人の家に騷擾を起させ、不名譽や誹謗を被せて、修羅場を現じ出さうとするつもりなのか？ 斯う考へると空怖しい。若しそのやうな不幸に遭遇せねばならぬのであつたら、強い自製の心を起して、必とうち勝つて見せると堅い決心をした。然しさういふ自製の葛藤を起す必要が何處にあらう。母親は私を歡樂の兒にしようとする。私はその母の娘に、己の意中を漏らすことも出来ないうで、戀に心を燃え立たせてゐるとは、何といふ淺ましい境遇であらう！ 彼處での歡樂の甘味は最早初の時に嘗めつくして了つたものを、再び其處へ出かけて行つて、不幸と恥辱と痛恨との犠牲になる必要が何處に在るだらう。浮氣な心は、既う最初のいき／＼した心を失つて了つてゐるものを！ 歡樂の香味は幾らか残つてゐるかも知れぬが、それを渴望する激しい情は、もう鎮まり切つて了つてゐる。と、斯うした考想の中には、自分の位置、義務に對する反省も雜つてゐた。殊に親愛な情深いわが母は、今までも多くの借財があつた上に、この私の愚かな考を果させるために、ますます借金を殖して行くやうな有様であつたから、その恩義を忘れて、卑劣にも負い

1737(26)-1741(30)

て行かうとする自分の心を深く顧みたのであつた。自分と己を責める心は、次第に力を加へて、とうとう最後の手段を取るやうになつた。

サン・テスプリへ來かかると、私は決心してサン・タンデオルの方へは足を向けず、眞直にシアンペリイの方へと指して行つた。私は斷乎として斯う思ひ切つたものの、正直のところ、若干の嗟嘆は交らぬではなかつた。がしかし私が生涯に初めて味つた内部の満足もその中に在つた。て私は、自分は十分自尊して然るべき人間だ。歡樂を棄てても義務を忘れては不可ないといふことは知つてゐる筈だ。と獨りて言つた。私が讀書に耽つたことも久しいものだが、反省と熟慮とを教へられてゐたその實際の應用が、此の時に始めて出來た譯である。近頃になつて潔白な主義を立て、知識や道德の法則を自分に設けて、飽くまでもそれに遵ふのだと言つて自慢して置きながら、その主義がすぐに漂搖と動いたり、無暗にその法則に撞著を起したりすることは、此の上もない不面目だと思ふにつけて、歡樂を欲する念は退つ込んで了つた。私の決心の中には、恐らく徳義といふものと共に、自尊といふものも這入つてゐたに違ひない。然しこの自尊の念慮は、道德其の物でない

1737(26)-1741(30)

にしても、その結果は洵とによく似たものだ。であるから、その自ら欺くといふ點は、強ち咎めるに足りぬ。

良き行爲の影響はいろいろあるが、その一つはそれによつて精神を興奮させ、従つて更により良き行爲を追求する動機を促すことである。吾儕に良き行爲は多くあつても、惡の誘惑にうち勝つことは、人間の弱點として出來難いことだ。私は決心を固めるや否や、一個の別な人間に變つた。といふよりは、一時の醜醉に隠されてゐた元の資質どほりの人間になつた。純正な感情、純正な決心、わが今までの罪を贖はむと思ふ純正な希望を抱いて、此の後は屹度道德の標準に合して行爲しよう、一身を吝まらず同胞の最上の幸福のために盡さう、母に對しては自分が愛著してゐるだけの信義をも誓はう、そして自分の義務を愛する外は、一切他の愛の聲には耳を貸すまい、といふやうなことばかり考へながら、行く手の道を急いだ。さても！斯うした熱誠と慎重とでもつて、全く別な好運に救はれるやうな氣がした。しかし運命は早已に宣告されてゐた。もうそれは始まつてゐた。私の心が善良な感情で満ちて、唯世の純潔な、光明の側ばかりを見てゐた時は、自分こそ知らな

つたが、もう私は痛ましい運命と顔を向け合つてゐた。そしてその運命は、私の懐かな不幸の、長い長い糸を、何處までも引つ張つて行かうとするやうなものであつた。

家へ著くといふので、気が急いで思つたよりも道が抄取つた。フランスから手紙を出して、到着の日と時間とを母に知らせた。豫定よりも到着が半日速くなるので、その時間だけ、シッパリイアン Chaparrilian で停つてゐた。これは劃然通知の時間どほりに到着した方がよからうと思つたからで、彼女に遇ふ歡びを、残る處なく味ひたいと望んだ。て私は少しでも時間を延引つた方が、待ち兼ねたといふこと、一倍嬉しからうと思つた。

此の慎重は多くの場合に成功した。私はこれまで、家へ歸る時には、いつも祝をされることになつてゐた。今度も同じことであらうと待ち設けてゐた。これ程楽しみにしてゐることなのだから、些とは面倒でも、歡迎してくれて然るべき筈だ。

1737(26)-1741(30)

1737(26)-1741(30)

私は果して時間きつちりに著いた。未だ大分距たりのある時分から、もしや母が道傍に出迎へてでもゐるかと思つて、目を光らして遠くの方を眺めて行つた。近くなるに従つて、刻々に動悸が昂まつた。前の町で馬車を降りたので、着いた時には氣息がはずむくらゐであつた。ところが庭を通つても、扉口へ來ても、窓際へ近づいても、誰にも出會さぬ。少少魅まれた氣味で、何か事でもあるのでないかと思へた。ともかく這入つてみた。矢張寂としてゐる。小作人等が臺所で何か喰つてゐるばかりで、その他に何事も無い。下女は私を見て、呆氣に取られてゐる。歸つて來たのが思ひ掛けないと言つた體だ。奥へ上り込んで行つて、始めて彼女を見つけた。あれくらゐやさしく、烈しく、深く愛してゐる其の親愛な母を見つけた。私は駆け寄つて、足元に倒れた。すると彼女が、

「まあ！お前歸つて來て？ 甚だつたの、旅行は。そして病氣はどうなの？」

私を抱きかかへて、斯う訊いた。霎時は私は口が利けなかつた。と、やがて、手紙は手に入らなかつたかと訊いてみた。彼女は受け取つたといふ。

「私はまた、お受け取りにならなかつたのかと思ひました。」

これで話は済んだ。

一人の若い男が母と一緒に居た。その男を出発前にも家で見ることがあつて、知つてゐた。しかし、今度は彼は家へ腰を据ゑたやうに見えた。果して然うであつた。自分の位置はこの男に奪はれたのだといふことに氣づいた。

この若者はヴォオ州から出て來た。父親はフィンツェンリイド Vinzenried とつて、シイヨン Chillon の半番であつたが、自分ではそれを體裁よくシイヨン城の警備官だなどと言つてゐた。此の警備官の息子が、理髮師の下職をして彼處こちらと徘徊してゐる中に、ワレンス夫人の處へ漂れ著いた。夫人は誰彼なしに客を迎へた。い性分であり、殊に自分と同じ郷里の男であるところから、格別深切に待遇した。胸體ばかり大きい、無神経な男で、形はよく整つてゐるが、顔には表情がなく、心も同様無意味らしい。話の爲振は丁度リアンドロス Leandros でも氣取つてゐるやうな風に見えた譯者云。リアンドロスは古希臘傳説に、ヘルレスポントス Hellespontos 即ち今のダルダネル Dardanelles 海峡なるアビドス Abydos の青年。その戀人はクロオ Hero と言つて、アンロヂテ Aphrodite の神に奉仕する女僧で、アビドスの對岸

セストス Sestos の塔中に住んでゐた。リアンドロスは毎夜毎夜セストスの塔上に微輝く火の光を便りにして、ヘルレスポントスを泳ぎ渡つて女の許に通ひつづけてゐたが、或る冬の夜、その火が消えたために、青年は溺死を遂げて、屍は女の住んでゐる塔の下へうち揚げられた。ヘロオは悲みに度々失つて、塔の上から逆さまに深海へ墮ちて死んだ。その屍は彼の戀人のとともに漂うてゐた。話の筋は斯うであるが、本文の意は、仁和賀の色男といふぐらゐること。話をするに、舊の境遇である時の態度風采を交へたり、長い惚氣話をして聞かせたりした。そして自分の關係した高貴な夫人たちの名前を半分ぐらゐしか口へは出さないて、その夫人たちの頭髪を理す時は、屹度その所天たちの頭髪も一緒に捕へるに極まつてゐた。などと好い加減な嘘ばかり喋つた。下司つばい無智文盲な、そして横柄な世に稀らしい溢れ者であつた。斯ういふ男が私の不在中、私の後釜に這入り込んでゐた。それが歸つて來てからの相棒であつた。

ああ！若しも現世の繫縛を脱れ出て、永劫の光輝の胎内に歸つたもろもろの靈魂に眼があつて、地上の現象を見得るものならば、わが愛すべく尊ぶべき故人、ワレ

1737(26)-1741(30)

ンス夫人に告げたい。私自身の過失を自分で責めるやうに、貴女の過失を讓めましてもまた讀者の眼に、私自身と同じやうに貴女の過失を曝け出さうとも、決してお咎め下さるな。自分で固く眞を守るやうに、貴女に向つても尙且然うせねばなりませぬ。しかしながら、其のために受けるあなたの損失は、私のと比べれば、至つて輕微なものでありませう。あなたのしんみりとした柔かな氣質、不盡の慈愛を湛へた心、その清白、その優秀な諸徳は、假にあなたの理智に缺ける處があつたとしても、優にその缺點を補うて餘があります。あなたの缺點は唯、迷妄であつて、邪惡ではない。行ひに賛成の出來ぬ點はあつても、貴女の心はいつも醇粹でした。新參者は、いつもごたごたと降つて來るやうな些細な事件を熱心に取り捌いた。勞働者の監督もした。私とは違つて、何かにつけて騒々しい。鋤を持つたり、藪、材木、厩、飼禽場の始末をしたりなどしてゐると言つたら、必とまづその喧しい聲がきこえる。關係しないのは花園の爲事だけであつた。この爲事ばかりは、閑散すぎで騒ぎ立てる譯に行かなかつた。一番面白さうにしてゐたのは、荷積をしたり、車を引つ張つたり、木を挽いたり、板を割つたりすることであつた。手には始終斧

1737(26)-1741(30)

か鶴嘴を握つてゐて、一生懸命駆けまはつたり喚いたり、釘や楔を打ち込んだりしてゐた。凡そ何人前の爲事が出來たか、それは知らぬが、確かに十人分は騒いだものであつた。その物騒がしい處が、母を嘯した。それから重寶な男だと思ひ込まれた。この男の機嫌を迎へるために、母はあらゆる限りの方便をめぐらした。殊に彼女の一番得意としてゐた、我が身を許すといふことも、勿論その一つであつた。讀者に私の心は解るであらう。私の感情、殊に私を母の住家へ引き戻したその感情は、眞率なものであつた。それに斯う急に、しかもおそろしく意外な事變が身の上で落ちて來るとは、奈何したことだらう！ しばらく私の身になつて考へて見て欲しい。將來を約束した幸運は、一瞬に消え失せたかのやうに思へた。やさしく、可憐しく育てあげた一切の柔かな思想は、何處かへ皆行つて了つた。そして幼年の時分から、自分といふものは、彼女あるがゆゑにのみ生きて居られるのだといふ考を固めて來てゐたのが、斯うなつて見ると、孤獨の感を呼び起さずにはゐられなかつた。

その瞬間の可怕しさ！ そして其からの行く手には、暗い影が落ちてゐた。未

だ私は若い。併し青春を彩るその悦樂と希望との優和な憧憬は、永久に私を棄て去つた。一個の敏感な動物は、其の時から半ば死んでゐるやうなものであつた。眼の前には、唯味ひのない殘生が横はつてゐるとより見えなかつた。どうかして幸福の妄想に、氣が懲られることはあつても、それは自分の事と思へなかつた。纔しその幸福を身に占めたところで、決して自分は眞に幸福な者になることは出来まいと感じた。

新參者は委細かまはず無遠慮に立ち廻つてゐる。それは母が誰にても氣立のよい處を見せた故であらうとは思へるが、自分は間拔けてある上に、十分母を信じ切つてゐるから、少しも此の様子の變つた眞の原因を怪まずにゐた筈であつた。が、とう／＼母の口からそれが解つて來た。しかし、彼女はいかにも平氣で自白した。若し私が外の人間であつたら、或はひどく氣を悪くしたかも知れぬ。彼女の言ひ草では、此の事については、母の方には何も深い意味はない。いつまでも家の事を構はず、始終不在にばかりなられては困り切るから、何でもかても速急に後釜を拵へなければならなかつた。然う言つた口吻であつた。私は苛かつた。

1737(26)-1741(30)

「お母さん！それは何を被仰るのです。其事が、這麼にしてあなたをお慕ひ申す返報といふものですか！今迄幾度となく私を救つて下さつたのは、私の生涯の樂みを奪ひ取るためだつたのですか。私は死ぬかも知れません。死んだら必ず後悔なさるでせう！」

彼女の答は無造作なものであつた。私はまごついて了つた。何と言つたかといへば、

「やつぱりまだ子供だね。人間てものは那樣なことで死ぬものぢやないよ。これと言つて別段お前の方に損になる事はないぢやないか。お前とわたしはいつまでも親しい中で甚だことがあらうと、それが溢る氣づかひはない。お前を思ふ情に些とも異りはない。死ぬまでその氣でゐるのだもの……」

つまり私の今の資格は其の儘にして置いてよいのだ。その資格の中を別な人間にも分けてやつたからと言つて、決して褫ぎ取つて了つたといふことにはならぬといふことを、くれぐれ私に説き聽かせた。

母に對する自分の感情の清さ、正しさ、強さ、又私の精神の嘘偽りならぬことを、此

1737(26)-1741(30)

の時ぐらゐ切實に感じたことはなかつた。私は彼女の足元へ突つ走つて、しつかり膝に縋り著いて、涙の急流を注ぎ懸けた。

どうしてお母さん、這麼に愛してる私ですもの、あなたを辱めることが出来るものですか。また此の關係を他人に割かれるといふことは、到底我慢の出来ないことです。斯ういふ關係になつた時からの後悔は、私の愛情が加はるほどますます嵩じて來ました。然うまで心配しながらお情に甘えてゐることは出來ません。あなたは永久私の景慕する人ですから、景慕させるやうにして下さい。あなたが我が物にして楽しんでゐるよりも尊敬さしていただく方が、私には餘程大切なことです。お母さん！あなたなればこそ、這麼に折れるのです。お互の心を結びつけて置きたいばかりに、自分の愉快はみんな犠牲にして、了つても悔まないのです。愛する人を困らせるほどなら、私は幾度でも身を棄てる決心です。

此の決心は堅く守つた。これ其の時の感情を欺かなかつた。此の瞬間から、私は實の子としてのみ、親愛な母を見るやうになつた。此の決心は心から母には喜ばれなかつたかも知れないが、彼女は其の決心を翻させるために、いろ／＼な誘

1737(26)-1741(30)

1737(26)-1741(30)

惑的な言葉や、嫵媚や、その外の手管は用ひなかつた。大抵の婦人は、自身の正體を見せないで、斯うした手管を使つて、随分成功する筈のものだ。彼女とは離れて、一人で自分の運命を見出さねばならぬことになつたが、それが甚麽ものであるか、薩張見當がつかないので、却つて反對に出て、それを彼女に見出した。殆どわれを忘れて、自分の幸福を彼女の中に置いて見た。彼女を幸福にするためには、如何なる代價を拂つても惜しいと思はなかつた。私のすべての愛情を、その一つに没して了つた。私の幸福と、彼女の幸福とを引放さうとしても、それは無益な事であつた。何と言つても構はぬ、彼女の幸福の中に、自分のもあるのだといふ事を信じた。

心の中に潜んでゐた道德の種子は、不幸と共に生長し始めた。此の道德の種子は、嘗て讀書修養のために培はれ、禍の日の來るのを待つて、實を結ばうと待ち構へてゐたものである。斯うした無私な傾向が生じた第一の果實は、自分の位置を横奪した男への嫉妬、怨恨の情を、わが心の中からどしどし驅逐する事であつた。而已ならず、私は眞實此の若者と親しくなり、その人物技能を養成して、その幸福を思ひ知らせ、出來得べくば、その幸福を欺かぬものにしてやりたい。——一言で言へば、

1737(26)-1741(30)

前にクロオド・アネエが私へ盡したと同じやうな風にしてやりたいといふことを、心から熱望した。が、二人の間には性癖の類似點が缺けてゐた。私には軟か味が勝ち過ぎてゐる上に眼が利き過ぎて、アネエののやうな冷静と剛適がなかつた。そして目的を果さうとは無理であつた。アネエの見た私には被陶治性があつたけれど、此の男にはそれが關けてゐた。柔順親和、謝恩の念、中んづく知識慾、それらを有用にしようといふ熱心、斯ういふものがみんな彼には不足してゐた。私の陶冶してやらうと思つてゐるその當人は、私をばた々面倒臭い喋ることより外を知らない術學者とばかり見てゐた。そして彼自身には、家中で一番大事な働き人であることを己惚れてゐた。空騒ぎさへしてゐれば、それで爲事が進捗してゐる氣てゐた。斧や鶴嘴の貴さは、到底私の陳びた書物の比でないといふ極め込んでゐた。或は彼の考が正しかつたのかも知れぬけれど、其の氣取り方が可笑しさに、息の切れるほど笑はされた。田舎人に對して彼は紳士らしく威張つた。しばらくすると私には素より母にまで然うし出した。フィンツェンリイドといふ名前が彼にはあまり立派に思はれなかつたかして、それをクウルチイユ Courtilles といふ名に改へ

1737(26)-1741(30)

た。後日に至つてシンペリイや、結婚式を挙げたモオリニヌ地方などで、クウルチイユといふ名で彼は知られてゐた。

終に此の名物男は、家中の總大將となつた。私はまるで無い者同然になつた。私が彼の機嫌を損ねたときに、小言を喰ふ者は、私でなくて母の方であつた、残忍な彼のために、母を苦ませることは忍びないから、已むを得ず、何事につけても彼の言ふまゝに諾諾言つてゐた。木挽は彼の最も得意とする爲事であつたが、それが始まると、私は傍へ行つて惘然と彼の偉功を眺めてゐなければならなかつた。でもこの男は性來の悪黨でもなかつた。彼は母を愛した。彼女はどうしても他に愛されるやうに出来てゐた。彼はまた決して私を忌み嫌ふ風はなかつた。暴れ廻る暇ひまには、何か話をして聽かせると、よく素直にわれわれの言ふことに耳を傾けた。正直に自分は莫迦だと自白してゐた。然う言つてゐる口の下から、相かはらず莫迦を歌めなかつた。彼の見解は狭く、趣味が低いので、道理を立つて物言ふことが出来なかつた。借に樂むなどいふことは、思ひも寄らなかつた。魅力の溢れるほどな一婦人を籠絡してゐる上に、尙だ一人の年寄の、髮の緒、齒脱けの

仲働きにも目星を著けて巫山戯た。この女は、ひどく母に嫌はれて胸が悪くなる
とまで言はれたほどのぐうたら女であつた。私はこの新出来の情史を洞見して、
嚇となつた。がしかし、是よりも尙一層激しく私を刺撃して、今までの何物にも比
べることの出来ぬほどに絶望のどん底へ私を蹴落すやうな一事件が起つて來た。
それは外でもない、私に對する母の仕打の、冷却したことであつた。

私は是まで、自分の性の欲求を棄てて顧みなかつたが、彼女もまた、とにかく表面
だけはこの私の清貞を感心してゐたやうであつた。けれども私のやうに斯う身
を清くしてゐては、女として縦ひ外見上、甚麼に取り澄してゐても、内心はその男に
對して、甚だ氣まづく思ふことは知れきつた事實である。といふのは、男が清貞で
居ると、女も同様に清貞を守つてゐなければならぬといふ苦痛も幾らかあるのだら
うし、未だそれよりもそれが爲に女は、男の心が冷くなつたのではないかと疑はず
にゐられぬからである。假に最も聰明な、清淡な女を例としよう、此の女を、男――
その女からは餘り大事にされてゐる男が、よい加減に綾なしておきながら、彼
女の満足するやうに爲向けないといふ事は、彼女に對する最大の罪である。これ

1737(26)-1741(30)

1737(26)-1741(30)

にはいづれの場合といへども、決して例外はない。現に私が單だ彼女を大切にし
たい、道義を全うしたい、尊敬心を失ふまいといふ考ばかりから、彼女に狎れ近づく
ことをしないでゐた中に、然しも自然的な、然しも力強かつた彼女の同情心が、いつ
の間にか褪せ消えたのを見ても、その理は解る。これまで私の最上の歡喜となつ
て來た心と心の親しみを、是れから後は彼女に見出すことが出来なくなつた。新
參者に對して何か苦情でもあるときの外は、彼女と私の心が滅多に交錯すること
はなかつた。彼等二人の間に紛紜さへない限りは、私は彼女から少しも顧みられ
ることはなかつた。次第に彼女は、何事につけても私を度外に置くやうになつて
來た。私が顔出しをすれば、彼女も萬更可厭ではないが、是非私が居なくてはなら
ぬといふ程ではなかつた。随分私は幾日でも彼女の顔を見ないでゐられたかも知
れぬ。然うしたところで、別に彼女は氣に留めることもなかつたらしい。

今までは、私は此の家の主腦であつた。随つて二重の生活を營むことが出來た
のに、其の同じ家にゐながら、何時となしに索莫な、孤獨の感を喚びおこすやうにな
つた。何事からも、何人からも、遠ざかるやうになつて來た。絶え間なき悶えを幾

1737(26)-1741(30)

分ても輕めるために、自分の室に閉ぢ籠つて、書籍を友としたり森の中へ出かけて行つて、心のままにしくしく泣いた。斯のやうな境涯は、やがて堪へられなくなつて來た。今まであれ程優しかつた婦人の、身體は眼の前に在りながら、その心はもう此方に向いてゐないために、自分は唯苛苛と苦むばかりだ。寧ろ彼女を見ないと決めたならば、離ればなれの苦しみも減るのであるまいか。然う感じて此の家を立ち去つて了はうと決心した。彼女にそれを話した。彼女は反對すると思ひの外、却つて喜んで賛成した。グルノオブルには、彼女の友達が一人住んでゐる。デイバン Deybens 夫人と言つて、所天は、里昂の裁判所長マブライ Mably 氏の友人である。デイバン氏は、マブライ氏の子供たちの教師に行つて見ぬかと訊いてくれた。私は承知して、殆んど別離の愁みを感じることなしに、里昂へ向つて出發した。これが今までであつたら、別離といふ考を心に浮べただけでも、私達は死ぬほどの激しい煩悶を感じたものであつたのに……。

1737(26)-1741(30)

教師の資格はまづ私に在つた。自分でも教授法は確かだと信じてゐた。一年間マブライ氏の宅にゐる間に、此の迷ひはすつかり醒めて了つた。天性の柔らかな所は此の職業に適當してゐただらうけれど、それは情が激昂せぬときだけのことであつた。すべてが順調に進行し、全力を竭して勞しただけの効果の見えたときは、私は宛ら天使のやうであつた。が結果がその反對に行つたときの私は、一個の惡魔であつた。子供等が私の話を理會出來ぬときは、私は惡態を吐いて狂り狂うた。何か兒童に良くない舉動でもあると、私は撲き殺しかねぬ方であつた。これでどうして彼等の知徳を養成することが出來よう。私は氣質の甚く異つた二人の子供を預かつてゐた。一人は八歳か九歳ぐらゐで、サント・マリイ Sainte-Marie といふ品の良い、快瀾で、活潑で、そつつかしやで、遊び好きな惡氣もないが惡作ばかりしたがる子供であつた。年少の方はコンデヤック Condillac と言つて、遲鈍なぐづぐづした、驃馬のやうな執拗者で、何を教へても記えることが出來ぬやうな子供であつた(譯者云。L'abbé de Condillac とは全く別人)。斯ういふのを二人捉へてゐた私の骨折は、大抵想像が出來よう。忍耐と平氣でもつてやつて行けば成功もしたて

1737(26)-1741(30)

あらうが、其が孰方も私に缺けてゐたので、成績は少しも見えない。子供等は悲惨な者になつて了つた。私は勉強せぬのではなかつたけれど、平等、殊に深慮に缺けてゐた。自分の使ひつけた三つの武器があつた。がそれは兒童にとつては多くの場合無用で、有害なものである。即ち感情と理窟と狂暴とがそれであつた。私はサント・マリイに對して、這麼子供でも、眞に情緒を動かすものだと思ひ違へて、彼を感動させようとした揚句、自分がまづ感動させられて、涙を流したこともある。又時には自分の言ふことが本當に解るものと思つて、根限りむづかしい議論を吹き込んだこともある。そして彼は折折皮肉な議論をしかけて來ることがあるのて、斯ういふ事がいへる以上は、彼もなかなか理窟が解つてゐるのであらうと思つて了つた。小いコンデヤクの方はまた一倍手數のかかる代物であつた。何を言つても解るのはなし、何を聞いても答が出來ず、どんな事にも感じがなく、其てゐて、此の上なしの剛情者で、私の怒らされた時が、彼の凱歌を揚げる時であつた。であるから、彼の方が餘程伶俐なので、私は反つて子供であつた。私はつくづく自分の過失を曉るやうになつた。弟子の氣質を觀察してだん／＼深く知り分けた。

1737(26)-1741(30)

そして一度たりとも彼等の係歸に罹つたことはなかつたやうに思ふ。然し矯正の方法も知らずに、唯短所ばかり知つて何にならう？ すべてを洞察して、其て何一つ救治することが出來ず、何一つ成功したことがなかつた。そして爲た事は、皆丁度してはならぬことであつた。

弟子も弟子であるが、自分の身の上的ことは更に覺束なかつた。私はデイバン夫人から、マブライ夫人へ紹介されてゐた。彼女からは、私の人物を養成し、且世間並の習慣をも教へてやつてほしいといふ委囑であつた。で彼女はそれについていろいろ世話を焼いた。作法の方で、主人役を勤めさせたりなどもしたが、それは何とも拙かつた。恥を曝すやら馬鹿を見るやらで、彼女もつひ可厭になつて、それきり歇めて了つた。ところが、そんなことのために、いつもの持病として、此の女に戀をしかける妨害にはならなかつた。大抵彼女の氣取りさうな處まで持ちかけて行つて見たけれど、露骨に打ち開けて言ふことはしなかつた。しかし彼女は決して唯諾と來るやうな人ではなかつた。私のする思はせ振りも、故とらしい溜息も、何等の結果を持つて來なかつた。その中に私も、到底見込がないものと諦める

まで疲れて了つた。

母の家にゐた間は、私が一家の頭領であつたから、手癖の悪いのがすつかり癒つてゐた。それに自分で作つた氣高い思想は、那樣邪念を壓倒した。それはその後も續いたと言へば言へる。然し私がさうなられたのは、誘惑に打ち勝たねばならぬといふことを學び知つたからであつて、決して、其の偏向の根を斷ち切つた爲てはなかつた。て、その後といへども、同様の邪念に動かされた場合には、丁度幼年の時分のやうに、盜心が起りはせぬかとひどく氣にしてゐた。現にその證據が、マブライ氏の宅で現はれた。自分の周圍には、手頃な品物が數かぎりもなく轉がつてゐたけれど、それらは見も返らない。唯アルボア Arbois 製の葡萄酒を窺んでやうと考へた。これは時時食事の時に飲んでみて、堪らなく旨いと感じたものだ。それはどろ／＼の酒であつた。私は自分で酒を澄す方法を知つてゐると言つて自慢したのが始まりで、それから、其の爲事が私に委されてゐた。酒を澄すと言つて、却つて變質させて了つた。尤もそれは目に然ら見えただけで、飲んで見て別に變つたこともなかつた。その機にはいつも二三罇づつ胡魔化して來ては、自分

1737(26)-1741(30)

1737(26)-1741(30)

の部屋に引つ込んでちびちびり飲つてゐた。生憎私は食ふ物がなくては酒が飲めぬ質であつた。どうしたら麴包が得られるであらうか？ まさかそれを貯へて置くわけにも行かぬ。下男に買ひに遣らせるのも、事の暴露の因であり、主人に對しても顔よごしになるわけである。自分で買ひに行くことは、尙更可厭である。堂堂たる紳士が劍を腰に吊下げて麴包屋の店先へ立つて麴包下さいも、言はれた口上でない。とかく考へた後に、不圖斯ういふ事を憶ひ出した。或る大名の奥方が、配下の人民共の、今日喰ふ麴包にも事を缺いてゐるといふことを聞いたとき、何の考慮もなしに、それしてみんなに饅頭を喰べさせたらいいだらうと言つたその頓才であつた。これとても、夥しい手數のかかることだ！ この目的を遂げる爲に、唯一人中を駈けずり廻つて、饅頭屋の門を二三十軒も素通りした後、漸くの思ひで何處か一軒へ飛び込んだ。店番の女が唯一人限るない家でないと這入られない。またその女の顔が、自分を牽きつけるやうでないと、鬮を跨ぐことが出来ぬ。しかし然らして、一度可好しい菓子を掴んで歸つて、自分の部屋に落ちついて了へば、それから例の酒罇を抽斗の底から引つ張り出して、唯一人愉快

に小説でも読みながら楽しむことになる。本を読みながら物を喰ふのは、私の道樂で、これが戀人と嬌曳の代用にもなる。一方には又あまり出入しない社交の代用にもなる。一頁讀んで是一片喰ふ、交るゝに然うしてゐると讀んでゐる書物も自分と一緒に口を開いて物を喰つてゐるやうに思はれる。

私は決して大酒はせぬ。従つて酒に吞まれて泥醉するやうなことは生涯に一度もなかつた。であるから、盗みも容易に發覺する筈はなかつたのであるが、とうとう戀から事が暴露た。他はそれを見て見ぬ振をしたけれど、最早酒倉の番はさせてくれなかつた。此のマブライ氏の處置は實に奥ゆかしかつた。此の人はいかにも紳士らしいところがあつて、外見はその職業同様、刻薄なやうにも見えるが、實は柔和な氣質の、慈愛に篤い人であつた。彼の恩義を深く感じて、何となく戀しくなり、自然に此の邸での滞在が長引くやうになつた。けれども教師の職業は到底、自分の柄にないことであるから、本當に子供を教育することは出来得ないと斷念し、殊に位置に對する束縛が苛く、何一〇樂みになることもなかつたから、凡そ一箇年の間必死に勉強したすゑ、とうとう弟子を振り棄てて、また此の家を出ること

1737(26)-1741(30)

に極めた。マブライ氏も同じやうな風に考へてゐるらしかつた。が、この場合若し私が良心に構はず、思ひ切り身を屈してゐれば、無理に出て行けとも、言はなかつたであらう。

尙それよりも、現在の境涯を辛抱しかねるやうになつた他の原因は、前に自分の居た境涯との比較であつた。親愛なシアルメント庭園、樹木、泉水、果樹園、殊にこれらの物に精靈を吹き入れた彼女、其の人のために自分が生れて來たと思つてゐる彼女——然うした物の追懐であつた。彼女の身の上、われ／＼の歡樂や、天真な生活などを憶ひ出すと、堪らぬ程の心の壓迫、乃至窒息を感じて、何をやる元氣も私から抜け出して行つた。その女の傍へ歸るために、今すぐ駆け出さうかと幾度となくはげしく迷つた。もう一度あの顔を見る願が慥へば、其の場で絶命しても悔いなしとあもつた。到頭私は何物を犠牲にしても、其の傍へ戻つて見たいと思ふ、やさしみの追懐に抵抗することが出来なくなつた。私はあまり辛抱が足りなかつた。おとなしくもなかつた。愛らしいところもなかつた。けれども若し、以前より一層彼女のためを思つてかかつたならば、樂しさの限りなき友誼の中に、幸福なライ

1737(26)-1741(30)

フの送れぬ事はあるまい。斯う私は獨て言つた。世にも惻巧な分別を定めて、それを實行する念慮は火の燃えるやうであつた。何事をも抛棄つて、飛ぶやうに駆け出した。少年の初期に發したやうな、それと同じ物狂ほしさて、彼女の足元へ倒れに來た。ああ！若し彼女の待遇、彼女の媚撫さては彼女の胸の中に、以前に接したやうな、そして今も私が身にしめて感じてゐるやうなことが、四半分でも見出されたら、或は歡びのあまりに引きつけて了つたかも知れない。

1737(26)-1741(30)

人を脅かす世の中の幻影！ 彼女は依然親切な情を傾けて私を迎へてくれた。其の情は、恐らく彼女の死ぬ時まで續くのであらう。然し私の歸つて來た目的は、それではなかつた。有りし儘の過去その物であつた。がそれは最早見ることは出來なかつた。また再生させることも出來なかつた。那の曠昔の幸福が、もう永久に滅びたと思へば、もう半時も彼女の傍にゐる氣になれぬ。私はまた前に逃げ出た時と同じやうな慘ましい境遇へ立ち還つた。が、誰が然らういふ境遇を與へ

1737(26)-1741(30)

るかとは判然答をすることは、むづかしい。クウルチエとでも決して惡黨ではなし、些とも可厭な顔を見せない。莞爾してばかりゐる。私は嘗ては彼女の一切であつた。そして彼女はまた私の一切であつたのに、今その人から、餘計な人間として取扱はれるのを、奈何して忍ぶことが出來よう！ 元此の家の實の子であつた者が、今から赤の他人として奈何して暮して行く事が出來よう？ 昔の幸福を憶ひ出させるやうな、いろいろの物を見るにつけて、現在との比較が、ますます酷く感ぜられる。外の家にゐる方が、此の苦みが甚だか、か輕くて濟む筈だ。然しまた、間斷なしに往事を憶ひ起して來ると、自分の受けた損害の感が、痛切に胸にこたへて來る。徒勞と知れてゐる悔恨に悶え、暗い鬱憂に沈んだ私は、食事時の外は、全く孤獨となるやうな前の習慣に戻つた。書物と一緒に一室に立て籠もつて、それをもつて氣を轉へる方便にした。同時に、これまで久しく心配の種であつた家計の危急をも感じたので、心を碎いて、他日の準備を考へた。何處からも母への救助が來なくなつた時の手當を、やきもき氣に病んだ。一時家計のことについては、甚い落目にならぬやうに、整理して置いたのに、自分が家を空けてからは、すつかり

1737(26)-1741(30)

様子が變つて來た。今使はれてゐる會計係は何の事はない浪費者であつたのだ。良い馬などを買ひ込んで、馬具も素晴らしいのを奢つて、何でも界限へ見せびらかさうとばかりしてゐた。彼自身は何も解らぬ癖にして、始終何事か計畫してゐた。母の年金は、受け取る前にもう喰ひ込んで了つてゐた。四季拂は抵當に這入り、家賃は滞り勝ちで、借金はどしどし嵩んで來た。私はこの年金も程なく差押へられて、終には消滅して了ふばかりと思つた。落滅の日の來るのは、然う遠くあるまいと豫知された。その場合の如何に残酷であるかを感ぜずにはゐられなかつた。

自分の親しい部屋は、唯一の慰藉であつた。心の憂悶を癒さむがために、豫告された禍に對して、ある他の道を求めようとした。そして昔の考に歸つて、彼女の今將に墜ちむとしつゝある其の暗い淵から、哀むべきその女を拯ふために、また西班牙の城を築きかけた。私は、文學界に携はつて、その道で一家を成すほどに、知識も天才もあるとは思つてゐなかつた。或る一つの新しい考が起つた。其處から自分の凡才の爲に得られなかつた自信が湧いて來た。

音樂の教授は廢めてゐたけれど、決して音樂その物を放つて了つたのではな

1737(26)-1741(30)

つた。却つて音樂通を振り廻はせる程までに、その理論の方を研究した。樂譜を理解する困難従つて視唱法に對して感じた困難から考へて、私は斯ういふことを思ひ立つた。元來斯うした困難を感ずるのは、自分も至らぬからではあるが、一つには、樂譜其の物にも缺點があるのではないか。それゆゑ、誰しも音樂の稽古には、悩まされるのではなからうか。だんだん音符や記號の組織を研究してみると、その考案に遺憾が尠くない。私が數字を在來の音符の代りに用つて、極短い流行唄を、譜に取るにも線を辿つて行くやうな面倒を除かうとしたのは、昨今のことはなかつた。唯オクターヴの區別、拍子、歴時などを書きあらはす方法に窮してゐただけであつた。此の腹案がまた、頭を擡げて來たのであつた。そしてよく考へてみると、前のやうな困難も、強ち打ち勝たれぬものでもないといふことを知つた。深く思を潛めた結果、目的は達せられた。甚だ樂譜でも、悉く數字を藉りて書きあらはすに、その精確で簡便なこと、驚く許りであつた。此の瞬間から、私はもう自分の立身の緒を握つたやうに思つた。何事もみな母の恩だから、自分の幸福を彼女に分配したい。それに就いては何よりもまづ巴里に出るのが一番だ。然う

ARIETTE DES TALENS LYRIQUES.

Vivement.

Mi
Symphonie.
Basse-continue.

2

c 0. 5, 5. 1 | 1 7 6, 5 6 4 5 | 3. 2, 1 2 3 4 |
b 0 1, 3 1 | 5 5, 7 5 | 1 1, 1 1 |

c 5 1 5, 6 4 5 | 6 5 6, 7 1 6 | 2 5 2, 7 | 3 3 2, 1 7 6 5 |
b 7 7, 7 7 | 6 6, 6 6 | 5 5, 7 5 | 1 1, 3 1 |

c 4 6 2, 0 2 6 1 | 7 2 5 7, 6 1 4 6 | 7 2 5 6, 6 5 6 |
b 2 2, 4 2 | 5, 4 2 | 5 5, 4 2 |

c 7 2 5 6, 6 5 6 | 7 2 5 6, 6 5 6 | 5 7 5, 2 5 7 2 |
a 5, 4 2 | 5 7 1, 2 2 | 5 7 5, 2 5 7 2 |

c 5, 0 5 3 | 6 4 1 1, 4 6 | 5 1 1, 5 3 | 6 4 1 1, 4 6 |
b 5 5 4, 3 1 | 4 4, 4 4 | 3 3, 3 3 | 4 4, 4 4 |

c 5 1 1, 5 3 | 6 6, 7 1 | 2 1, 7 6 | 7 6, 5 5 2 4 |
a 1, 0 3 | 4 4, 4 4 | 4 4, 4 4 | 5 5, 7 5 |

d 3 5 1 3, 2 5 7 2 | 3 5 1 2, 2 1 2 | 3 5 1 2, 2 1 2 |
b 1 1, 7 5 | 1, 7 5 | 1 1, 7 5 |

L'objet qui
d 3 5 1 2, 2 1 2 | 1 3 1, 5 1 3 5 | 1 || b, 0 5 | 5, 1 |
b 1, 4 5 | 1 3 1, 5 1 3 5 | 1, 0 | 0 1, 3 1 |

法譜記式字數

オソル版全集初版リヨリ轉寫

1737(26)-1741(30)

第六卷

思ひ立つと静止してゐられぬ。巴里のアカデミーへ此の案を提出したら、音楽界に時ならぬ大波瀾を惹き起こすことは、目に見えるやうに思へた。里昂から持つて歸つた金が幾何かある。その上に自分の本を賣つて又金をこしらへた。二週間ほどの中に私は量見を極めて、いよいよ實行といふことになつた。遂に私はいつもの癖の龐大な思想を抱いて、丁度昔トリノからヘロンの噴水器を提げて出た時のやうに、今度は新發明の數字式記譜法を振りかざして、住み馴れたサヴァアを發つた。

私のうら若き日の懺悔は以上の如くである。私は誠實にこの物語をし終へて胸が開けた。これから壯年以後になつて幾分か人道的な處があつたら、その事も亦前と同様誠實に表白したいと思つてゐる。それが私の本旨である。が、一時茲て筆を擱かねばならぬ。時はすべての物から面帕を引き退ける。若しも私といふ人間が、末世まで人の記憶に残ることがあつたら、人々はいつか私の言はうとし

1737(26)-1741(30)

第
六
卷

たことを領會するにちがひない。其の時に至つて、始めて私の今沈黙した理由が解るであらう。

一七四一。

自分の決心に負きながらも、二箇年の間沈黙と忍耐とを守つて来たが、復たペンを把ることにした。何爲このやうな手順を踐むやうになつたかは、考へても無駄だ。此の本を通讀した後でないと諸君は決して正當な判断を下すことは出来ません。



第七卷

第七卷

1741(30)

無事平穩な私の青春期は、大した煩悶もなく、大した光明もなく、過ぎ行くことと想はれた。この平凡は、おもに私の天性が情熱と因循とで半分づつ占めてゐる所から來た。いくらか奮激して事業を企てて見ても、忽ち萎頓して了ふ。急に思ひ立つと、矢も盾もたまらなく前の平安を破つて出るけれど、疲勞と持前とで復たもとに立ち還る。常も落ち着く場所といへば、大きな善徳からは遠く離れたと言つて大きな惡徳からは尙更隔たつた。是が自分の天分かと想はれるやうな緩りした物靜かな生涯である。善惡共に、偉大な事を爲出來し得る身ではなかつた。さて是から甚麼光景が展けて來るだらう！ この三十年間、私の天稟と平行して來た運命は、後の三十年間で、この天稟と逆行した。境遇と、性向の間に、斯うした不斷の軋轢があつたからこそ、過大な失敗、未聞の不幸、それと、困累を飾るさまざまな徳——勇氣は別として——が生れ出たのである。

此の作の前篇は、全く記憶から書き出したもので、随つて誤謬も多いわけであつた。後篇も同じく記憶に據る外はないから、誤謬も前よりは一層太甚しいことと思ふ。無邪氣と靜穩の間に過ぎた楽しい幾年の甘い追想は、いろ／＼な快い印

1741(30)

象を留めて、それを喚び還す味に、飽くことを忘れて了ふ。が、やがて讀者は私の後年のそれらが、甚麼に異つたものであるかを知るだらう。それらを喚び起すことは、取りもなほさず、その苦味を新たにするに外ならぬ。斯うした悲しい再現に依つて、自分の境遇の苦味を強くするかはりに、出來得るかぎり私はそれを避けるやうにした。終には必要のある時でもそれが憶ひ出されぬほどまでになつて來た。斯う都合よく自分の不幸が忘れられるといふことは、非常な逆運に出會す筈の私にとつては、まことに天與の慰めと謂はなければならぬ。私の記憶は、ただ楽しい事物ばかりを蓄へてゐるのであるから、おそろしい未來を想ひめぐらしてばかり居る「想像」と正反對で、丁度埋め合せが出來てゆく。

この著作をするに就いて、追想の資料に、いろいろな書類を集めて置いたが、一度他人の手へ渡つてからは、最早自分の方へ還つて來る望みがない。

が、茲に一つ信用するに足る補助がある。それは感情の連鎖である。このお底で自分の生涯がずつと迎られる。一つの事件の原因と結果を、それ明かにすることができる。不幸はすぐに忘れて了ふけれど、過失はなかなか忘れられない。

1741(30)

況してうつくしい感情でも起つた時のことは、決して忘れるといふことが無い。然うした感情を追想する可懐しさは、何時迄もそれを心の中に留めて置く。或は事實を書き漏らし、或は事件を顛倒し、或は時日を取り違へたりなどすることはあるかも知れぬが、自分の感じや、その感じに伴つて起つた事は、萬萬間ちがへないつもりである。てこの感情に關した事を述べる事が此の著作の主な目的であるのだ。私の懺悔の本來の目的は、生涯中のいろいろな境遇に應じて、内心がどうであつたかを精密に語ることである。私の書かうと思つたのは自分の心の歴史である。であるから、それを忠實に書くのに、何も業業しい材料などを追懐する必要はない。今までも然うして來たとほり、唯、自分の内心を顧みるだけで事は足りてゐる。

— 594 —

だが茲に幸ひと、六七年間の事實に就いては、ペイルウ氏の手に在る原稿から寫し取つた書簡の一束があるので、これが正確な参考の材料となる。この書簡は、一七六〇年までで終はつてゐるが、私が仙居トニカ譯者云。エビネエ Epiney 夫人が、ルソンの隠栖にと言つて、モンモランシイ Montmorency の溪間に建てた別荘ヌレで暮した時

1741(30)

期のことや、私の友人だと自稱してゐた人だちと大喧嘩をしたことなどは、皆この間であつた。つまりこれが私の生涯の記憶すべき時期で、その後には續いた多くの不幸は、大抵此の時に醸されたものである。それよりもつと新しい原のまゝの手紙で、數は少いけれども私の手に残る筈のものが若干ある。それらは彼の書簡集——あまり浩瀚に過ぎて、周到なアルゴス Argos たちの注意を晦ます事の出來ない——其の書簡集の後へ寫し込まないで、此の著作の中へ引用することにする。それが縦し自分の爲になつてもならなくても、必要と認められた時には必ず然うする。讀者の方で、私が自分の懺悔をする者であることを忘れて了つて辯疏をしてゐるやうに思はれるやうな心配は、私は持たない。然しながら、どうかしてその引用が私の利益となつてゐるやうなことがあつても、それでもつて、何か眞實を偽つてても居るやうに釋られない事を希望する譯者云。アルゴスは希臘神話に、總身に一百の眼を持つ怪物。美女イオオの牝牛に化けてゐるのを女神ヘラ Hera に頼まれて、五十づつの眼で交代に監視してゐるところを、傳令の神ヘルメエス Hermes に賦カられた。アルゴスの名は、目くぢら立てて、煩く見張りをする監視者などの代名

— 595 —

第七卷
詞に使はれる。

とに斯く後篇の方は、前篇と比べて、眞實を語るといふことの外に似たやうな點は少しもない。又事實の重大といふことを外にしては、毫しも彼に優る處がない。すべての事情は全く前篇よりも劣るばかりである。前篇はウットンなり、或はトリイ Fyre の城内譯者云。コンチ Coni 公の所領で、ウウル Fure 縣ジゾオル Gion 市の附近に在つたて、ゆるゆると楽しく面白く書いたもので、憶ひ出す事ごとくに、きつと新しい快味が伴つた。だから絶えず新しい歡喜の中で、何等の束縛も感じずに、心の行くまで筆を馳らせることが出来た。

今日になつては、記憶も頭腦も弱り果てて、何事も碌に出来はしない。唯苦しい思ひをし、悲みに擣はれつつ、此の爲事を續けてゐるのである。不幸と不義と不信、それと悲しく痛ましい追憶ばかりが、この爲事に跟いて来る。

言はて濟まないことを、悉く時の暗黒の中に葬つて了ふことが出来るならば、この世界に換へても然うしたい。それなのに、どんな事までも言はねばならぬ羽目になつて來て見れば、否でもやはり隠れ忍んで、猪く構へて、他を瞞す工夫ばかりし

1741(30)

1741(30)

て、殆んど自分の天性と相容れないやうな状態に、己を低下げねばならぬ。私の頭の上の天井には眼がある。周圍の壁には耳が附いてゐる。惡意を抱いた、油斷のならぬ探偵や見張りに取り圍まれてゐる私は、氣も沈著かず、注意が飛び散つて忙しくなく、滅裂な二三行の文句を、走り書きすることが纒とであるほどの有様だから、修正は扱置き、讀みなほすことすらむづかしい。それでゐて私の敵人どもは、甚麼に私の身のまはりに緊しい柵を結び廻はして、不斷の監視をしてゐても、眞實は聊かな罅隙から洩れて出ぬにも限らぬと思つて心配してゐるらしい。さて何うして此の眞實を世に傳へようか。成功の望みはなくとも、私はともかく試みる。斯ういふ境遇に居るのであるから、果して氣持のよい光景を展げて、人を牽きつけるやうな色彩を傳へることが出来るか、奈何かは、讀者の想像にまかせる外はない。て私は讀者にことわつて置きたい。若し私といふ人間——正義と眞實とのまことの戀人を知りたいといふ考からでなくては、無意味にこの本を讀んで行つたとこそ、徒らに疲勞を求める外に、何の得ることも無からうといふことを。

1741(30)

前篇では私が巴里へ出發しようとして、中心はシ、ル、メ、ットの方へ牽かれながらも、其處で最後の空中樓閣を築きつつ何時か其處に居る母に見える折があらう、その時には母も心を取り直して居るだらうし、自分もかすかずの寶を抱いて來られるなどといふ胸算用をして、そして彼の新發明の樂譜を、幸運その物であるかのやうに見てゐた、といふところまで筆を擱いたのであつた。

しばらく里昂に滞在して、知人を訪問したり、巴里への紹介狀を貰つたり、此處まで提げて來た幾何の書物を買ひ拂つたりなどした。人人は好く待遇してくれた。マブライ氏夫婦は、如何にも嬉しいといふ風を見せた。幾度も饗應の席へ請待した。此の家でマブライ師と親近になつた。それは前にコンヂヤック師に近づいたと同じ工合で、二師とも兄を見舞ひに來たのであつた。マブライ師が巴里への紹介狀を幾通か與れた中に、フアントネル氏宛のと、ケェリッス Cayliss 伯爵宛のものがあつた。いづれも會心の友になつたが、とり分け前者は死ぬ際まで、友情を渝へなかつたのみならず、會ふたびに必と良いことを聞かせてくれた。それを思ふとああ

1741(30)

私のもつと眞面目にその言葉を守るべきであつた！

ボルド Bordes 氏にも遇つた。此の人とは久しい間の親近で、よく懇篤にしてくれた。私は眞の交友の味を知つた。今度も前と少しも變らなかつた。幾何の本を賣るやうにしたのも此の人であつた。自分で筆を執り、取次まして巴里への紹介狀を與れた。其の紹介で長官にも遇へた。此の人から、折節この里昂を通りかかつたリシ、リウ Richelieu 公爵へ近づかれるやうにしてみらつた譯者云。リシ、リウ公の略歴は、後の七二八頁に出る。其の時伴れられたのはパリ、ウ Pallu 氏であつた。リシ、リウ公爵は丁寧に私を迎へた。巴里へ訪ねて來れば會つてやらうと言はれた。て後にもたびたび出るとほり、折々此の高貴の知己を訪問はしたけれど、それは殆んど何の益にも立たないものであつた。

音楽家のダヴィッド David にも再會した。此の人には、前の旅行の時に、非常に困つて救けられたことがある。私は彼から帽子一個と靴下一足を借りてゐた。其の後幾度か遇ふことは遇つてゐながら、それを返したこともなければ、向うからも決して催促しなかつた。でも私は後になつて、大抵同じ値段ぐらゐの品物を返

禮に遣つて置いた。自分のせねばならぬ事を話すのだつたら、もつとしつかり言ふ筈だが、今の目的は私の爲て來た事を話すのだから、同じやうな譯には行かないのを遺憾に思ふ。

私は又寛厚なベリシオンに遇つて、何時もながらの鷹揚さを感じずにゐられなかつた。彼は前にハイカラなベルナルに與へたのと同じやうな贈り物をくれて、私のために馬車賃を仕拂つたのである。私は人間の最もよい最も慈惠心の篤い外科醫のバリゾオにも遇ひ、また其の愛妻たるゴドフロア Godeiro をも見た。夫と連れ添つて早十年にもなるさうで、容子のしとやかなのと、憐愍の心が深いので、それが何よりの長所となつてゐた。彼女に接して樂まない者はあるまい。又彼女と別れて、悲しがらぬ者はあるまい。惜しいことには肺病が重くなつてゐて、間もなく死んだ。人間の儂らぬ性情は、其の人の愛著するものを觀れば一番よく解る(原注)。尤もこれには例外がある。その人が選擇を誤るか、或は對手の氣質が、世にある例の如く、何等か特別の原因のために一變するかした時は爲方がない。若し條件なしに此の説を是認するとすれば、ソオクラテエスとその妻のクサンテ、ベ

1741(30)

1741(30)

Xanthippe で推測したり、ダイオン Dion を其の友のカルリッポス Kalippos から推測したりせねばならぬ。これより太甚しい非理はあるまい。しかし今此處で私の妻(譯者云。テレエズ Thersese と云ふ女の事。詳しくは後に出る)に對して無理な尊て推量をするには御免を蒙りたい。なる程妻は淺慕な、知見の狭い女であることは、私も意外と思ふくらゐであるが、その性質は純良で憐愍深く、些とも毒氣がない。其の點から、現在未來にかけて私の敬愛を維ぐには十分である。此のしとやかなゴドフロアを見る人たちは、同時に善良なバリゾオを知ることができた。この人達から、一方ならぬ恩を受けた。が、その後私はそのいづれをも皆うち忘れて了ふやうになつた。それは私の不徳義からではない。例の私とは離れない疎懶がさせた業である。其の人たちが自分の爲に謀つてくれたことを感謝する情は、決して心から消えはしない。感謝の意を證據立てることは、造作もないが、努めて勞してその情の表面だけを他に見せることは、私にはできぬ。几帳面に手紙を書いたりすることは、私は最も不得意だ。それを少し怠ると、その疎懶を恥ぢたり、氣にしたりするのが、ますます疎懶に陥らせる因になつて、到頭まるで手紙を出

さなくなる。這麼こと沈黙してしまふと、それがつひその人たちをも忘れてしまったやうに見えたのである。それをバリゾオもベリションも氣にさへ留めぬのか、何時遇つて見ても同じやうな調子で居た。しかし二十年後になつて、有繋の才子も他から疎くされたと感づいては、自愛の心から、斯うまで復讐する氣にもなるものかといふことを、ポルド氏に見出した。

里昂を去る前に、此の前よりも嬉しい再會をして、なつかしい印象を受けた一人の可愛い女の兒を忘れてはならぬ。それは前に話したセエル嬢である。此の女とはマブライ氏の家に居た時にも舊交を温めたことがある。今度の旅行には十分の餘暇があつたから、度度遇つて、心の上に激しい動搖を感じた。相當の理由で彼女の心も反對でない事を信じた。併し彼女は私を疑はなかつた爲に、彼女を唆さうとする自分の不心得は消えた。彼女には、何も身に屬いた物はなかつた。私と似たり寄つたりであつた。二人の境遇は殆ど同じだから、若し一緒にならうと思へば、容易く出來た。けれども私に目的があつたから、結婚など言ふことは、夢にも想つてゐなかつた。其の話に依ると、ジ、ネエツ Gahve といふ年若な商人が、この

女を我が物にしたいらしい容子だといふことであつた。其の男とは一二回女の家で遇つて知つてゐた。正直さうな男で評判もよかつた。此の男と一緒になれば女も仕合せだらうから、男から結婚を申し出せばよいにと望んでゐた。果して後にその通りにした。て私はこの二人のうつくしい戀を邪魔するでもないと思つて、出發を急ぎながら可憐しい女のために祝福を捧げた。がその祝福もなさないかな、ほんの姑くの間しか効目がなかつた。結婚して二三年目に、彼女は世を蚤うしたといふことを、後で聞き知つた。旅する間も、追恨のやさしみに胸を満たしながら人間は義務のため、徳義のためには己を犠牲とすることを辛く思ふけれど、その犠牲が、人の心の底に残して行くやさしい慰ひ出に依つて十分に償はれるわけてはないかと、つくづく考へさせられた。その以後も屢々それを感じた。

前回の旅行に、巴里の不愉快な一面を見せられただけ、それだけ、今度はずつと明るい一面を見ることが出來た。けれど、自分の宿屋ばかりはその限りでなかつた。

1741(30)

ボルド氏の紹介でサン・カンタン Saint-Quentin という旅館をソルボンヌに近いコル
 デエ Cordiers 町に見つけて泊る事にしたけれど、陋穢れた町の陋穢れた旅籠屋の陋
 穢れた室であつた譯者云。コルデエ町はサン・ジャック Saint-Jacques 町とヴィクトル・ク
 ザン Victor Cousin 町の間、狭い横町。そしてその宿は今ジャン・ジャック・ルソオ館と
 いふ汚い宿屋になつて残つてゐる。でも此處は、グレッセエ Grasset だの、ボルドだの、
 マブリー師、コンデヤック師などを始めとして、その外にも澤山立派な人達の宿泊す
 る處だつたが、折悪しく誰にも出會さなかつた。只一人ボンヌファン Bonnefond と言
 ふ跛足の田舎紳士で、告訴好きの、喧しく日常の用語を吟味する人と相識になつた。
 そのお底で現在私の友人の中、一番の老人のロガン氏と親しくなり、その又お底
 で哲學家のデドロオを識ることができた。デドロオのことは、旋て幾度も話す折
 がある。

巴里へ著いたのは一七四一年の秋のこと、衣兜の中の十五ルイ(約計百五十圓)
 と、自作の嬉劇「ナルシッス Narcisse」と、新案の記譜法と、それだけが資産の全部であつ
 たから、遅疑しないで早く是等のものから利益を見出さなければならぬ。私は推

1741(30)

薦書を利用する方法を考へた。相當の青年で、自分の技能を言ひ立てて巴里へ出
 かけて来るものは、大抵何處かて引き立ててくれるのが普通である。私もそれで
 あつた。大した事もないが、幾分の便宜は得られた。紹介された人たちの中で、此
 の三人が最も名者であつた。——ダムサン Damesin 氏それはサウアアの馬術家だ
 が、カリニオン Carignan 公爵夫人の嬖人であつたらしい。ボオズ Boze 氏アカデミー
 の考古學部の書記官で、賞勳局長。それから神父カステル Castel エスイタの僧で
 「視譜法 Le clavecin oculaire」の著者。此の中ダムサン氏への紹介を除いた外は、いづれ
 もマブリー師の世話で推薦された。

ダムサン氏は私に最も必要な二人を紹介した。一人はボルドオ Bordeaux 高等
 法院の裁判長で、グイオロンの巧いガスクの氏。一人はレオン Leon 師と言つて、此
 の頃ソルボンヌにゐた人好きのする貴公子で、ロアン Rohan 士爵といへば、誰知ら
 ぬ者もない高名な主權官であつたが、未だ年の盛りに死んで了つた。この二人は
 作曲を習はうといふ熱心を持つてゐた。て私は數箇月の間、二人に稽古をしたの
 で、端さかゝつてゐた財布が、いくらか元氣附いた。レオン師は私を友人のやうに

して自分の秘書役にする氣でゐた。が彼は金持でないから、私に仕拂ふ俸給と言つても、たかだか八百フラン(約計三百二十圓)に過ぎぬ。それでは衣食住の費用にしても不足が立つから、惜しいことはこの上もなかつたけれど、とうとうそれを辭退し切つた。

ポオズ氏はよく私を待遇した。それは知識を求めるところに汲汲としてゐる人で、相應に蓄へてもゐたが、少少術學的であつた。その夫人もやはり夫の娘ぐらゐには行く方で、そして華美ずきの粉飾家であつた。時々此家で食事をした。凡そ此の夫人の前へ出た時ぐらゐ、さまり悪さうに、間の抜けた恰好をしたことといふのはあるものでない。彼女はいかにも馴馴しく爲向けて來る、私は居縮まつて了つたので、ますます可笑しく見える。彼女が皿を私に薦めると、遠慮しいしい肉叉を窃と突き出して、その中の極小い片を突つ刺して取る、それが爲に彼女は皿を召使ひに渡すと言つて、私からは見えぬ方に向いて、くすくす笑つてゐた。此の田舎者の頭の中に知識などが少しでもあらうとは、夢にも考へなかつたらしい。ポオズ氏は友人のレオオミッウル Reaumur 氏に紹介してくれた。この人は毎金曜日、即

1741(30)

1741(30)

ちアカデミーの科學部の會員が集合する日に、此の家へ來て食事を共にしてゐた。彼はレオオミッウル氏に私の計畫と、それをアカデミーで審査して貰ひたいといふ希望とを話した。レオオミッウル氏はその提議を取り次いだ。當事者はこれを許可した。定められた日に、私は此の人に案内されて其場へ出た。時は一七四二年八月二十二日。豫ねて準備した論文の草稿を、いよゝアカデミーで朗讀する榮譽を荷つたのである。鏗鏘たる耆宿の面前で、確かに氣臆れがした筈であるのに、ポオズ夫人の前ほど氣は引けなかつた。説明も答辯も相應にやつて退けた。草稿は採用されることになつて、鄭重な慰勞を受けたので、意外の事に喜びと驚きが一時に來て、とても斯ういふ人達の前ではその一員でない限り、誰とて常識を失はずに居られまいと想像して見た。私の新説に對して調査委員が指名された。メエラン Mainan エロオ Hello フウシイ Fouehy の三人だ。いづれも高名の碩學たちには相違ないが、申し合したやうに音楽を知らぬ人ばかりで、私の案を審査する柄でなかつた。

1742(31)

一七四二。——以上の諸氏と討議を重ねて行くうちに氣附いた事がある。學者といふものは偏見が他人よりも少ければ少いほど、その返報として一層強情に自家の説を墨守するものであるといふことを知つて呆れた。反對説は薄弱で誤謬に満ちてゐた。私の答辯の爲方はぐづ／＼して、むしろ不利益な態度を見せたが、それでも確實な論據に立つてゐたのに、唯の一度も自分の意見を通過して、満足を彼等に與へることが出来なかつた。何時も彼等が脅し文句を並べて、私の心持を酌む事もせず、頭ごなしに辯駁を試みるその手輕さに驚かされた。彼等は何處から聞き出して來たのか知らぬけれど、スウエッチ Souhaiti といふ修道僧が、これまでに音階を數字で示すことを考案したといふことを知つてゐた。私の新案は決して創新なものでないといふことを言はうとするならば、是が何よりの盾となるのである。或は然うかも知れない。何爲なれば、縦し私はスウエッチといふやうな名前を耳にしたことがなかつたにしろ、又縦しオクタアツといふことさへ考に入れないで、易しい禮拜樂の七音を書きあらはす方法が到底數字を借りてあらゆる

1742(31)

音樂上の記號——音部記號、休止符、オクタアツ、小節、拍子、歷時などまでも、簡畧に書きあらはすことの出来る、至極便利な私の工夫と競争しようといふ事は柄にもない話だが、——然うしたいゝる／＼の條件は、スウエッチの夢にも想ひ及ばなかつた事だ——とにかく粗末ながら七音を書き示すといふことに就いては、スウエッチが最初の發明者であつた事は事實だからである。然し、委員たちは此の原始的な發明を度を超えて推賞した。そして私の組立を話し出す時は、何時でも謔話のやうなことばかりを言つた。私の方法で一番の特色になつてゐるのは、移調法と音部記號とを廢することである。だから同一の樂譜が、歌曲の首に附いてゐる第一の頭字を換へたと思ひさへすれば、何調にでも意の如くに移調された譜として見る事が出來た。委員たちは巴里の假託音樂家から、移調して演奏しては何にもならないといふことを聞いて來たらしい。彼等は此の説を本壘として、一番の特色をば却つて手の附けられない缺點として了つた。そしてその決議に曰はくには、私の樂譜は聲樂に適當するが、器樂には使用すべからずだと！何爲當り前に、聲樂に適當するのみならず、器樂には更に妙なりと言はなかつたのだ。委員の報告に

基いてアカデミーは一片の證明書を下附して來た。丁寧に念の入つた挨拶が書き立てである中に實際院の方では此の意見を創新だとも有用だとも認めなかつたといふ意味が見えてゐた。私は此の事を世に懸へる爲に「現代音樂論 Disserthion sur la musique moderne」を書いたが、この著述を飾るために、那樣紙片を使ふべきものとは思はなかつた。

私はこの場合十分の理由があつて斯う考へた。縦し其の人の見解は狭くてもかまはぬ、或る一事物を専心に、而も深く研究した者は、その事物を判断する場合になると有聲に一隻眼を具へてゐる點は争はれないものだ。幾ら外の諸科學に造詣の深い人でも、此の當面の事物に對しては、奈何しても偏頗な専門家に譲らなければならぬ所がある。私の案に就いて試みられた唯一の確かな駁論は、ラモオの意見であつた。私が自分の案を説明して、まだ言葉の終らぬ中に、ラモオは直と缺點を洞察いた。斯う私に言つた。

「君の記號は大へんに面白い。歴時の定め方が簡單明瞭だし、音程が判然あらはれてゐるし、全音符はいつも二全音符の中で示されてゐるし、みんな從來の音符では出

1742(31)

來なかつたことばかりだ。が缺點を言へば、頭腦を費はせることがひどい。とても速い演奏になると、その頭腦が働かなくなるだらう。」と言つて旋てまた。

「僕等の使ふ音符は、高低の位置が極まつてゐるから、別に頭腦は働かせなくても、眼で見えてすぐ解る。二つ音符があつて、一つはずつと高く、一つはずつと低くなつて、その中間に連続した澤山な音符が列んでゐる。僕等はそれを瞥つと見たばかりで、その列び方がすぐ呑み込める。これは音度の關係から然らるのだ。ところが、君の譜表でこの連続の工合を了解しようとするには、どうしてもその數字を一つ一つ噛みこなしながら進んで行くより爲方がない。瞥つと眼で見ただけでは何の益にも立つまい。」

此の駁論には、私も服せぬ譯に行かなかつた。縦しんばそれは簡單で、そして突飛であるにしても、練磨の功を積んだものでなくては、とても斯うは言へぬ筈である。して見ると此の考が濟々たるアカデミシアン達の心の上に浮ばなかつたと言つて、別に不思議でもない。けれども此の碩學たちは、よく事理に通じてゐるが

1742(31)

ら唯己の關係してゐる學科のみに就いて審査するのが義務だといふことを、知らないでゐたのこそ、不思議といはねばならぬ。

此の時の委員や、その外の學士會員を、しばしば訪問してから、私は巴里の文藝界に名を知られたあらゆる人たちと交際の出来る身になりかかつた。後に私が急にその人たちの仲間入りをした時に、皆既に懸念であつたのは、憚らぬことであつた。此の時私は一生懸命に樂譜の組立に心を砕いて、是非ともこの新案で音樂界に一の革新運動を起して見たい、さうすれば自分の名も揚つて、巴里の藝術界でも定りの、少からぬ利福も得られることと信じた。二三箇月といふものは、びつしり室内に閉ぢ籠つた。喩へがたい熱心を持つて、アカデミーで讀んだ草稿を世間へ出せるやうに手入れをした。困つたのは原稿を引き受ける本屋を見出すことであつた。新活字を鑄造する費用がかかるといふことと、どの本屋も初舞臺を踏まうといふ者に、金は注ぎ込まぬといふ事であつた。が、原稿を書いてゐる間に喰つた麪包の代を、此の著作に辨償させることは、至當な事と思つてゐた。

ボンヌフォンが私を大キイヨオ Quilhan le Pere に紹介してくれたので、協議の上、私

1742(31)

の單獨に費用を支辨した特權は度外において、その利益を等分にしようといふことに約めた。此のキイヨオの遣り口で、私は特權に對する失費を零にして丁つて此の出版からは一リアルルの金も取ることは出来なかつた。此の出版に就いては十分賣れるやうにするといふデフンテヌ Dessaintaines 師との黙約があり、外の記者連も皆好評を寄せてくれたにも拘らず、本の捌け方は餘りはかばかしくなかつた。

私の方法を嘗試する上に、一番の障害となることは、もしそれを承知してゐなかつたら、それを學ぶだけに餘程な時間が費えるだらうといふことであつた。私はこれに答へて、自分の樂譜の組立は簡單明瞭だ。普通の樂譜で音樂を學ばうとする者でも、私の樂譜から這入つて行くと、却つて時間の經濟になるくらゐのものだと言つた。實地に此の説を證明するために、ロガン氏に紹介して貰つた亞米利加生れのルウラン Roullins といふ少女に、無報酬で音樂を教へた。三月経たぬ中に、彼女はもう私の樂譜を使つてどんな曲でも讀めるやうになつた。餘りむづかしくない曲なら、本を開いてすぐに唱ふのが、却つて私よりも旨くなつた。眼に見えた

1742(31)

此の好結果も、遂に知られなかつた。是が他人であつたら、この記事で新聞の幾段を埋めるかも知らぬが、私は有益な事物を發見する才を持ちながら、それから利益を取る手段といふものを知らなかつた。

1742(31)

ヘロンの噴水器は、今度もやはりこんな事て壊れて了つた。しかし今ではもう私も三十歳になる。其の上今の居所が巴里の大道の真中といふのであつて見れば、空しく暮してゐることは出来ぬ。此の窮地に陥ちた私の決心を聞いて驚くものは、私の懺悔録の前篇を精讀しなかつた人だけだらうと思ふ。これ迄にして來た私の努力は、すべて無効に歸したが、しかし私には重すぎた。て私はどうしても一度休息がしたい。絶望に陥りもせずに暢氣な無爲生活に入つて、運命をうち任せたといふ状態になりたかつた。そして其の運命を待つ間、残つた金をぼつぼつ費ひ崩して行くことにした。無爲の餘りの娯樂は全く廢めても了はないが、それに制限を加へて、カフェへ二日に一度、觀劇には一週に二回位しか行かぬことにし

1742(31)

た。若い女に對する費用に就いては、別に節減を加へることも要らなかつた。それは女のために金を費つたのは、生涯に唯一度きりなかつたからだ。其の時の事は、やがてお話ししよう。

此の無爲閑散な生活は、三月と續けることができなかつた。けれども、その間には、安和と言ふか、歡樂と言ふか、はた信頼と言ふか、確かに然うした或るものが潛んでゐたことは、生活上の一つの異色で、又私の氣質の特色の一つでもある。他も想像する如く、私の一ばん熱望するのは、奈何かして他人の中へ顔を出さずに済ましたいといふことであつた。人を訪問せねばならぬと思ふことは、堪へがたい苦痛になつてゐた。それがために學士會員や、其の外従前から取り入つて居た學者仲間をすら訪ねることを廢めた。マリヴォオと、マブライ師と、フォントネル——以前に變らず訪問したのは、まづこの三人ぐらゐであつた。マリヴォオには自分の作つた「ナルシス」の劇を見せた。大きに喜んで、わざわざ修正の筆まで入れてくれた。デドロオはその人たちよりも若く、殆んど私と同一年ぐらゐであつた。音樂がすきて樂理には通じた。二人の間には、よく音樂の話が出た。彼はまた自分の作物

1742(31)

の筋を話して聞かせた。然ういふ譯からすぐ二人の間に親密な交りが結ばれて、十五年程の間續いた。彼と同じ職業に身を投じなかつたなら、もつと續いたかも知れぬものを、残念なことをした。しかしそれも向うが悪かつたのだ。

私が麴包を他から恵まれるやうになるまでに、此の残りの貴重な短い月日を奈何して送つて行つたか、それは想像がつくまい。曾て幾百回となく稽古をしては忘れて了つた詩人たちの名句を諳記することに費したのであつた。毎朝十時頃、衣兜にウエルギリウスかルッソの本を押し込んで、リウクサンブウルへ散歩に出かける(譯者云。ルッソは Jean-Baptiste Rousseau)をして晝飯時までは、其處で聖歌や牧人詩の記憶を新にする。晝間の部分を讀んでゐる中に、前晩の所は大抵忘れてゐても、其は氣にもかけなかつた。私は、ニキアス Nikias がシラクセネ Syrakusai で戦敗の後、捕虜になつた雅典人等が、ホメロス Homeros の詩を誦することに依つて、生命を維持してゐたといふことを憶ひ出した。差し當る否運を紛らさうと思つて、した勉強が、あらゆる詩人を諳んずることになつた。もう一つ、其に劣らぬ慰みは、將棊を指すことであつた。そのために芝居に行か



全

オロドヂ

ない日の午後は、極まつてモオジイ Mangis の家へ浸り込んだ。此處では、レガアル Legal 氏、ユンソン Husson 氏、フイリドオル、それから當時高名の將某の大家たちと相識になつた。が、私の腕は根つから進らなかつた。でも終には彼等の誰もより上手になれるものと信じ切つた。然らなれば財源をくつるに十分だなどと胸づもりをした。どんな浮々した事でも、自分の嗜好が傾いてゐると思ふことに就いては、何時でも同じ風な牽強けた説を立てる癖があつた。自分で斯ういふことを言つてゐた。何事でも一藝に秀てた者は、世間から重んぜられるのだから、他より抜けるといふことが大事だ。俺は屹度大事にされる！ 運さへ向けば、迹は自分の力で奈何にてもなる。この子供染みた獨言は、理性が言はせるのでなくて、怠惰が言はせる詭辯であつた。引切なしの激しい努力、それを續けて行く苦しさに、氣は萎えた。私は、怠惰に媚びた。恥づべき境遇に居ることを忘れようと思つて、都合のよい口實を設けた。

斯うして心静かに持ち金の竭きる時を待つてゐた。カフェエへ行く途中、ちよいちよい立ち寄ることにしてゐた神父カステルが若し私の昏睡を醒まししてくれな

かつたら、財布の底に鏝一文なくなつて了つても、平氣で静としてゐたにちがひない。神父カステルは妙な氣の人であつたが、左に右良い人で、私が何もしていないで、段段困つて來るのを見兼ねるといふ風で、斯う私に言つた。

「音楽家連中にしても、學者連中にしても、誰も君の樂譜に賛成しないんだから、一番河岸を變へて、女の方へ向つて行つちやどうだね。此の方面なら、奈何かすると成功するかも知れないよ。君の事はブウザンヴァル Beethoven 夫人に話したいから、私からだと言つて訪ねて行つて見給へ。それや良い夫人さ。殊に君は夫人の息子や所天の居る地方の人だから、喜んで遇つてくれるだらう。娘のブロイ Broghe 夫人といふのも一緒に居るから、此の人にも遇ふさ。可怕的才女だよ。もう一人デパン夫人にも君を紹介したいから、那の著作を持つて行き給へな。

君には是非遇つて見たいと言つてたから、悪い事はしないだらう。何しろ巴里といふところは、女に纏つてその力を借りなくては、何事も出来ない所なんだ。謂はば女は曲線で、其に對して、惻巧に立ち廻る男が漸近線といふのだ——這箇からはぐんぐん接近しては行くけれど、然うかと言つて、決して其の曲線に觸れるやうな

1742(31)

事はしない。」

一日又一日とこの苦役を延期させて置いたが、到頭元氣を出してブウザンヴァル夫人を訪問した。なさけある待遇をしてくれた。をりふしブロイ夫人がその室へ這入つて來たので、母親は、

「ちよいと、此處に入らつしやるのは、カステルさんのお話しのルソオさんて被仰る方だよ。」

ブロイ夫人は私の著述に對する挨拶をして、クラヴサンを弾くからと言つて其の傍へ伴れて行つた。私の樂譜を實地に試みてゐたことをも知らせた。懸時計を見ると、一時に間もないから、私は失敬すると言つた。と、母夫人が、

「お住宅は随分遠くて入らつしやるのでせう。まあ宜しいではございませんか。御飯でも召しあがつてつからにささいませしよ。」

私は此の上強ひても言へなかつた。物の十五分も經たぬ間に、私はついした言葉の端から、彼女の馳走しようといふのは、召使ひ共と一緒に晝飯のことだと氣取つた。ブウザンヴァル夫人は、良い人には違ひないと思ふが、見解が狭い上へ持

1742(31)

1742(31)

つて来て、波蘭士の由緒ある門閥家であるといふことが、大きに邪魔をしてゐるらしい。當然尊敬すべき技能の士を視ることが、疎略に過ぎた。此の場合にも、服装よりは舉止で私の身分を判断した。服装は固より質素だったが、整然と手入れの出來たものを著てゐたから、臺所で飯を喰はされるやうな風體までには見えなかつた筈だ。臺所へ這入つて行くことは、もう大分前の事て忘れて了つてゐるから、今又その復習をしたいなどは思はなかつた。脆然としたけれど、色にも見せないで、今ちよつと家の近所に用があつたことを憶ひ出したからと言つて別れて出ようとした。娘夫人は母親の傍へ寄つて行つて、何か知ら、耳うちをした。果してその驗が見えて來た。母夫人は起ち上がつて私を遮るやうにして、

「あの萬望御迷惑でも、私共と御一緒に召しあがつていただきたいのでございませから。」

と言ひ繕つた。此處で横柄に出るのは、莫迦だと思つて、そのまゝ留ることにした。而已ならず、プロロイ夫人の深切は私の氣分を和げた。面白い人と彼女を思つた。此の女と食事を一緒にするのが嬉しかつた。私をよく知るやうにさへな

1742(31)

れば、食卓を私に割いたことを悔いなくてあらうと信じた。此の家と懇意な間柄になつてゐるラモアニン Lamignon 所長も一緒にあつた。此の人もプロロイ夫人と同様、巴里特有の樂屋詞や、隱語や、通人の用語に明かつた。斯うなると此の哀れなジャン・ジャンクの光は消えたやうなものであつた。私はミネルワ Minerva に負くとも、づう／＼しい、知つた風な口を利かうともしないで、黙つてゐた(ミネルワ、希臘名アテエネ Athene。知慧、藝術を司る女神)。もし私が、いつも同じやうに才子であつたら、甚麼に幸福であつたらう。今日のやうに深い淵へ沈むやうなこともなかつたらうに!

自分が愚鈍で、プロロイ夫人の好意に酬いることのできないのを、此の上もなく苦にした。食事が済んで例の自分の本領を見せようとした。衣兜には、里昂に居た時、バリゾオへ宛てて書いた書簡詩が一篇、這入つてゐた。固より幾分の情熱の有つたところへ、朗讀法で一層引立たせたので、聽く三人に涙を零させた。自惚かそれとも實際だつたか、いづれにしても、娘夫人の瞳の中に、母親に向つてどうですお母さま。此の方は決して召使共と一緒に、御飯を召しあがる方ぢやありません。

1742(31)

私達と一緒に上げて上げられませんか申したのが悪うございまして？と言つてゐるやうな色が歴史と讀まれた。此の時までは何となく胸の中でむしやくしやして堪らなかつたが斯うして復讐することが出来てからはもう氣が爽快して來た。プロロイ夫人は私を買ひ冠つて心の中では巴里人の耳目を動かして世の寵兒となる人に違ひないと思つてゐた。私の物知らずの誠めにもなることと思つて……伯の懺悔録 Confessions du comte de * * * を私に恵まれた譯者云。この書物を書いたのは、デックロオである。その畧歴は後篇五九頁に出る。其の時彼女は私に斯う言つた。

「此の本は貴君には良い手引になりませう。何時かお讀みになれば必と爲になる事がありますわ。」

この書物と與れた纖手に對する禮心から、二十年の餘も大切に置いて置いた。が時々此の夫人が、私の空疎な手柄を、大したものやうに考へてゐたのが可笑しかつた。此の書物を讀み始めた時から、其の著者と親密になりたく思つた。此の希望は好い結果を産み出した。といふのは、私の交際した文學者仲間、この人だけ

1742(31)

が、眞の友人であるからだ(原注)。私はいつまでも決して渝らぬ心で此の著者を信用した。巴里へ歸つてから、此の懺悔録の原稿を彼に委託するやうになつたのも、其のためだ。狐疑心の深いジャン・ジラクも、其の犠牲になるまでは、決して不信や欺罔が有らうとは思はなかつた。

ブウザンヴァル男爵夫人と、プロロイ侯爵夫人とは、必と私を何かに使つて、何時までもこの窮乏を見棄てて置くやうなことはすまいと考へた。全く其のどほりであつた。まづ其の前に、私が始めてデバン夫人を訪問した時のことを話さう。

これにはまた一倍長い筋道がある。

デバン夫人といふのは、世間に知られてゐるとほり、サミ、エル、ベルナル Samuel Bernard とフォンテヌ Fontaine 夫人とのなかに生れた女の子であつた。デバン夫人は三人姉妹で、まさしく三美ともいはるべきものであつた(譯者云。希臘神話に、愛嬌、美及び歡喜を象徴する三女神を總稱して *Graces* といふ、孰れも女神アフロヂテに侍して、歌舞宴樂を助ける)。その中のラッウシ、La Tonche 夫人といふのはキングストン Kingston 公爵と英吉利へ道行と出かけた。三人の姉妹の中で、一番年

1742(31)

嵩なのがダルチイロ、夫人で、これはコンチ公の親友も親友唯一の獻身的な親友で、機轉は利く、快活ではある、當りが柔かくて情深い、まことに得がたい女であつた(譯者云。Louis François de Bourbon, Prince de Conti. 一七一七—一七七六)。最後に、デバン夫人三姉妹の中では一番の美人だ。操行に就いて、一點の非難すべきところがなかつたのも、三人の中で亦此の人だけであつた。所天になつたデバン氏が、此の夫人の母親を、自分の領地内で手厚く待遇つた關係から、母親はその返禮に、徵税請負人たる位置と、莫大な資産とを附屬物にして、娘を此の人に嫁入らせた。私が始めて彼女に遇つた頃は、まだ巴里切つての美人だといふ評判の聒しい時であつた。化粧室へ私を呼び入れた。兩の腕は露はに、髪も取り亂して、理髮衣を檢束なく引つ懸けてゐた。その光景が私には如何にも珍しかつた。哀れにも私の頭は掻きみだされて、悶えるやら、氣が遠くなるやらした。此の夫人には全然壓迫されて了つた(譯者云。デバン一家の關係を少し話して置く必要がある。デバンといふ人の經歷は本文にある通り。そして「百科辭典」の材料を供給した點で功績があつた。その後妻が本文に出たデバン夫人である。ルソオの保護者となつたフ

1742(31)

ランキ、イユはデバンの實子、夫人の繼子に當る。此の繼母子の間に、何等かの秘密が包まれたといふことは人々に見られた。が然し、一七七七年——といふと、丁度ルソオの死ぬ前の年——に、フランキ、イユは有名なサクスの將軍の私生女兒オロオル Anore と倫敦で結婚をする。——サクス將軍自身が全體、王位繼承役に就つた波蘭王アウグスト二世の私生兒なのだ。そしてこのフランキ、イユは後の女子作家ジョルジ、サンド George Sand 夫人の祖父である。フランキ、イユは一七八七年に死んだ。

慙うも私は取り亂して了つたが、それが爲別に自分に不利益を招くやうなこともなかつた。彼女は全く氣附かなかつた。彼女は例の著述と、その著者とを丁寧に待遇つて、私の計畫に有益なやうな談話をしたり、歌を唱つてみたり、クラヴサンに合したりした。食卓へ私を招く時は自分の傍に席を取つた。慙うまでにされなくとも、私は有頂天になり易い人間なのだから、すぐ目を眩した。いつても訪ねて來て差岡はないといふことであつたから堪らない。殆んど毎日のやうに此の家へ來て、一週間に二三回は、一緒に食事まですることにしてゐた。話がしたくて

したくて堪へられなかつたけれども、思ひ切つてそれが出来なかつた。私の天性の臆病を、ますます募らせたには、種種な原因がある。

富豪の邸へ出入りすることは、幸運に導かれる扉口に違ひない。だから私の境遇として、此の扉を鎖め出されるやうな愚なことはしたくなかつた。デッパン夫人は、好きな人であつたが、勿體振つて冷淡な所があつて、その舉動がどう見ても、迂闊に馴馴しく近寄れさうもないので、私は勇氣が出なかつた。この邸は、當時巴里で名高い孰の邸に較べても、敗を取らぬくらゐ豪華を極めた。種々の社會から、人々こそ仰仰しくなかつたが、擇りに擇つた立派な人達ばかり集つて來た。夫人は好んで貴顯紳士や、藝術家や、美人などを呼び寄せた。邸へ行つて見ると、公爵だの大使だの、勳章を佩げた人許りが來てゐる。ロアン Fohan 公爵夫人、フォルカルキエ Foulquier 伯爵夫人、ミイルボア夫人、ブリニオレ Brignole 夫人、エルツエ Hervey 嬢などが親密な友達であつた。フォントネル氏、サンピエール Saint-Pierre 師、サリエ Sallier 師、フルモン Fournout 氏、ベルニイ Bernis 氏、ブッフォン Buffon 氏、ツアルテエル氏たちはその園内にゐて食卓仲間となつてゐる。夫人の隔意あるらしい容子に、多くの若

1742(31)

1742(31)

い人達は牽きつけられなかつたけれど、交友は孰れも四角張つた人たちばかりから成り立つてゐたので、何となく可怖しいやうな氣がした。哀むべきジャン・ジラクが、どうして、恚ういふ仲間の中でうぬ惚れて、花を咲かせることが出来よう。だから私は口が利けなかつたのであるが、と言つて黙りてゐるにもゐられなくなつて來たから、思ひ切つて手紙を書いた。其の手紙を二日間彼女は黙つて仕舞つて置いた。三日目になつて手紙を私に返して、人の血を凍らせるやうな冷たい調子で、何となく忠告めいたことを言つた。私は何か言はうとしたけれども、唇まで來て言葉が消えた。激情は希望と一緒に何處へか去つて了つた。形式的に申譯をした後は、やはり以前のまゝで交際を續けて行つたが、前よりも尙口を利かず、目顔にすら物を言はせなかつた。

私の莫迦を、人は忘れたと思つてゐたが、それは勘ちがひであつた。デッパン氏の實子で、夫人の繼子になるフランキエ氏は、夫人や私と同じ位な年輩であつた。修養はある、風采は立派だから、多少自負の心はあつた。實際夫人にうぬ惚れてもゐたと言はれたが、是は多分夫人が、フランキエ氏の妻にと言つて、顔のまづい、そ

1742(31)

して温和しい女を配して、そしてその夫妻と一緒に中よく暮してゐた所から廣がつた風説であつたのであらう。フランキウ氏は技能ある者を好いた。自身も研究を懈らなかつた。殊に音楽を深く知つてゐたから、それが私たち二人を結びつける糸筋になつた。私は始終出遇つてゐて、少しも隔てなくした。ところが突然彼の口から、どうも此の邸へ出入り方が餘り頻繁過ぎるから、少し間を空けて來てもらひたいものだ、と夫人が言つてゐるといふ事を聞かされた。這麼挨拶ならいつか夫人が手紙を突き戻した際に言へばよさうなものを、一週間も十日も経つて今頃言ひ出して來るなんて、別に新しい理由が出來たと言ふのでもないのだから、ちと遅滞だなど、私は心の中て考へてゐた。一方ではフランキウ氏夫妻は、以前と少しも濡らず私を款待してゐるのであるから、然う言はれて見ると、私の立場がますます妙なものになつて來た。てもなる可く遠退くやうにはしてゐた。この有様では、程なく全然足が止まることであらう、と然う思つてゐた處へ、デ・パン夫人が何といふ氣紛れからか、五六日間息子さん(名をシノンソオといふ)のお傳をしてゐて欲しいといふことを言つて寄越した。そこで息子さんはその日數の間、

1742(31)

先生を取り替へて、唯一人居残つた。其の一週間を送る苦痛が、何うにもかうにも私には堪へられなかつた。けれども、唯夫人の命に従つてゐると思ふ心で、せめても自ら慰めることが出來た。その譯は、この哀むべきシノンソオ Othonceau は、その時分から、狂暴な性質に變つた爲に、一家を不名譽に陥らせた上、とう／＼ブルボン Bourbon 島(亞弗利加のレユニオン島の一名)で死なねばならぬやうになつた。私が附き添つてゐた間は、彼が我が身にも、他人にも不都合な行爲のないやうにすることが出來た。唯それだけの事だつたが、それとても並大抵の苦痛ではなかつた。だから若し夫人が、其の返禮に自分の身を私に任せると言ひ出しても、尙う一週間もこの辛抱を續けることは御免蒙りたかつた。

フランキウ氏は私を親友にした。勉強する時は一緒にあつた。この時は二人でルウエルの處で化學の研究を始めかけた譯者云。ルウエルは Guillaume-François Ronelle. 佛蘭西著名の化學者。一七七〇歿。なるたけ家の近い方がよいと思

1742(31)

つて、サン・カンタンの宿を出て、デッパン氏の住居のあるブラアトリエニル Patrière 町と町つづきのヴェルトレ H. Verdolot 町で、テニス・コオトのある處へ宿を取つた。此處へ來てから、不圖した感冒の氣味で咳嗽が出たのが、到頭肺を冒されて、私は死にさうになつた。若い時分には炎症、助膜炎、別しては咽喉の病によく罹ることがあつて、其の月日はよく判らないが、死の面影と懇意になるくらゐまで、幾度も生命を失ひかけたことがある。病氣が治りかける頃になると、何時も自分の境涯を省みて、臆病や、虚弱や、怠惰を悲んだ。斯ういふことのために、心中に燃え立つ情熱のあることを知りつつも、不幸の關門の前にくづくづくと不活潑な精神生活を續けてゐるのである。病氣にならうとした日の前晚、私は丁度その時分に開いてゐた曲名は忘れたが、ロアイエ H. Royer のオペラを看に行つた。餘り他人の技倆を信じ過ぎ、それが爲に自分の身分を蔑視するのは私の癖であつたが、それですら此のオペラを聴いて熱もなく、新し味もない、弱い音楽だと考へずにはゐられなかつた。時時自分て、あんな曲なら、俺が作つた方がよつほど増しだなどと云つてゐた。しかし、一たびオペラを作るに就いて自分の持つてゐる可怖しい考想と、専門の作曲家等が

1742(31)

口癖に言つてゐる構想の困難とにもひ到るといふと、忽ち氣は挫けて、よくもそんな事が思ひ浮んだものだ、と獨り顔を赧くした。よくよく思へば、誰がその曲の詞章を書いて與れた上に、這箇の氣に入るまで、改削の勞を取る者があらう？ 病中に音楽や、オペラについて、這般事を再び考へ込んで了つて、體温の昇つてゐる最中に、歌詞も、ジェットオも、合唱部まで作り上げた。確かに、大家に聴かせたら、驚嘆したであらうと思ふやうな曲を二つ三つ、即興的に作つた。噫！ 若しも熱病に罹つてゐる人の夢物語を書き留めることが出来たならば、甚麼に雄大で高遠な作が、とき／＼其の患者の囁語の中から出て來るものであるかといふことが知れるだらう！

癒後の間にも、音楽とオペラの事が、尙心を占領してゐた。唯あまり逆上せる程でなかつただけだ。その事ばかり考へてゐる中につひ發作的に、どうしてもオペラを作る眞の味が知りたくなつて、自分一人の樂みとしてでも可いから、詞章も樂譜も一緒に作り試しようとした。この試みは、必しも私の處女作といふ譯でもなかつた。既にシャンペリイに居た當時、イフィスとアナザレエト Iphis et Anaxarète, 25

1742(31)

ふ悲劇的オペラを作つた事がある。其は後で考へて火に焚いて了つた。また里昂に居た時「新世界の發見 Découverte du nouveau monde」といふのを作つて、ボルド氏や、マブリエ師や、トリッブレエ Triplet 師や、其の外の人たちにも聴いてもらつた。これも後に、また前の曲と同様な目に遭はせたが、其の序白と第一幕との曲譜はもう出来上つてゐたので、ダヴィッドが見て、その或る部分には、ブオンチニ Buononcini の體を得たところがあると評をした(譯者云。ブオンチニは伊太利亞のオペラ作家。一七五二? 歿。アリオスチ Ariosti と同盟して、有名な普魯士のヘンデル Händel と倫敦で競争した)。

今度は作に手を著ける前に、十分時間を掛けて筋立てを沈思した。まづ一篇の史詩的バレエ ballet héroïque の中に「三種の異つた主題を採り入れ、それを三段曲として切り離すことの出来るやうに仕組んで、樂趣も一幕毎に換へて見ようといふ計畫であつた。そして其の題材として、毎幕いづれも古詩人の戀愛史を取つて來ようといふので、此の曲に「粹詩神 les Muses galantes」といふ名を命じた。第一段はフォルテで行かうとする幕で、これがタッソ。第二段がピアノで、オウィヂウス。第三段

1742(31)

には「アナクレオン Anacréon」と名がついて、酒神歌躰の輕快な味を出して見ることにした。最初に第一段から始めかけて、非常な熱心をうち籠めて行くと、感興が旺んに湧き立つて來るのを覺えて、何とも知れぬ嬉しい氣持になつた。或る日の夕方であつた。私はオペラへ這入りかけたところが、作曲のことが胸に痞へて一杯になつて來たから、すぐ金を衣兜に仕舞つて匆匆と駆け戻つて家へ閉ぢ籠つた。光線の透けないやうに、室の窓帷を悉皆引いて置いて自分は寢臺へ横になつた。そして詩と音樂の興會の中に浸り込んで、七八時間で、咄嗟に第一段の中心となるべき部分を作り上げて了つた。フェルララ Ferrara の姫君に對する私の戀——この時私は姑くタッソ、其の人であつた——と彼女の不人情な兄に對する私の貴い、思ひ上がつた感情とのために、實際私が生きた姫君の腕に抱かれたより、百倍も可歎しい一夜の主となる事が出來た譯者云。タッソは伊太利亞の詩人、Torquato Tasso、ダンテ Dante、ペトラルカ Petrarca 及びアリオスト Ariosto と並稱される。一五九五歿。彼の極めて短い全盛期の間、伊太利亞のフェルララで、ルクレチア Lucrezia レオノオラ Leonora とさふ二人ともタッソより十歳も年長の領主の姉妹の保

1742(31)

護を受けて、相互の間に何等かの関係があつたといふが、事實は確かでない。茲に言ふのはレオノオラの方を指すので、彼は此の女に對する戀情に堪へられなくなつて、竟に發狂したともいふが、虚實は判らぬ。不人情な兄といふのは、即ちフェルラ公アルフォンソ Alfonso で、最初はタソオの擁護者であつたが、タソオが精神病に罹り、且しばしば口論など始めてから、瘋癲院へ監禁するやうなことがあつた。折角斯うして作り上げたものも、朝起きてみると、頭の中にはほんの厘かの部分しか残つてゐなかつた。其の僅かの部分も倦怠さと眠氣とで、大かたは消えかかつてゐたけれど、それでも尙十分はその作の力あることを仄見せてゐた。

— 634 —

ところが此の勞作の餘り抄取らぬ間に、別な故障が起つて、其の方へ氣を取られて了つた。私がデパン家に親しくしてゐる間も、時々訪問してゐたブウザンヴァル夫人や、ブロツイ夫人は、私の事を忘れなかつた。近衛大尉のモンテエグ Montaigne 伯は、此の時丁度ヴェネチア駐在の大使に任ぜられた。これは彼が頻りとバルジヤ

1742(31)

ク Barjio に阿諛つて、そのお庇でなされたのであつた譯者云。バルジヤクは、フルクリイ大司教の従者。其の兄に、モンテエグ士爵といふのは、皇太子殿下の扈從で、右の二人の貴女たちや、私が訪問して行つたアカデミーのアラツイ Alariz 師をよく知つた。ブロツイ夫人は、大使が書記官を一人捜してゐると聞いて、私を推薦した。私達はそこで談判を開いた。私は俸給として、五十ルイ約計五百圓の給與を申し出た。これとて體面を張らねばならぬ位置の者に取つては、未だ餘程廉いのである。其の人の積りでは百ビストオル(約計四百圓)だけ與れて、新任の旅費も私に自辨させようといふのであつた。條件が滑稽であつた。雙方の意見は到底折れ合はなかつた。速りに私を引き留めて置かうとして骨を折つたフランキウ氏の希望が愜つた譯である。私は居残つて、モンテエグ伯だけ發つて行つた。其の時フクロオ Follan といふ他の一人の書記官を、外務局の方から宛行はれて伴れて行つた。二人がヴェネチアへ着くと、すぐ其の間に喧嘩が始まつた。フクロオは、這麼狂人と一緒に居ても詰らないと言つて、伯を置き去りにしてしまつた。モンテエグ氏の手にはもう一人、ビニイ Biniis といふ若い僧が居て、書記官の下僚を勤めてゐたけれ

— 635 —

ども、フロオの後任となられる柄ではなかつたので、お鉢がまた私の方へ廻つて来た。兄の士爵は、伶俐な人で、書記官といふ位置には、種々な特権が附随してゐるからなどと、甘口に載せて、到頭私に一千フラン(約計四百圓)で承諾させるやうにした。私は二十ルイ(約計二百圓)を旅費に受け取つて、出發した。

1743(32)-1744(33)

一七四三—一七四四。——里昂からは道をモン・スニイ Mont-Cenis の方へ取つて、途中哀れな母に遇つて行くことを切りに望んでゐた。けれどもロオヌ河を下つてツウロン Toulon で船に乗つた。これは一つには戦争のためと、もう一つは經濟を考へて、當時プロヴンスの司令官であつたマイルボア氏宛ての紹介を貰つてゐたから、その人から旅券を得ようとしてであつた。モンテエグ氏は、私がなくしては居られぬので、追つかけて追つかけて手紙を寄越して、旅行を急がせて来た。が或る事情のために遅れた。

丁度これはメシナ Messina (シチリア島の都會)でベストが流行した時であつた。

1743(32)-1744(33)

英國の艦隊が其の港に碇泊してゐて、私の乗つてゐるフルッカ Falucca へ来た譯者云。地中海の沿岸航行船で、大三角帆と橈を具へる。これがために、長い不自由な渡海をして、辛とジノヴ Genova へ著くと、此處で二十一日間交通遮断を受けねばならぬことになつた。乗客は其の期間、船に居ようと、或は隔離舎へ這入つて居ようと隨意であつたが、隔離舎の方は出來て間もないことと、壁の外には何の設備も整つてないとのことであつた。乗客は残らず船に居ることになつた。が、暑さは厳しく場所は窮屈で、加旃に悪い蟲が居るので、私だけは何が何でも隔離舎へ這入ることにした。二階建の、何一つ飾附もない、閑然とした大きな建物の中に伴れられて行つたが、窓や卓子や、寢臺や椅子などは勿論、腰を卸す臺も、横にならうにも一束の藁すら見當らなかつた。外套に、旅行用の囊に、二個の鞆が持ち込まれた。丈夫な扉に丈夫な錠前が卸りて、私は鎖め込まれて了つたから、心の儘に大手を振つて、室から室、下から上へと歩き廻はつたが、何處へ行つても一様の寂寥と一様の赤裸とだけが見出された。

這度目には遭つたけれど、それでも船を出て此の隔離舎に這入つたことを悔い

1743(32)-1744(33)

なかつた。そして新魯敏遜といふ格で生涯此處で生活を續けるかのやうに、此の二十一日間の暮しの準備を爲始めた。第一に船から運んで来た蟲を退治するのが面白かつた。襯衣や衣服を取り替へて、すつかり清潔になつた。次には自分の擇んだ室の設備に取りかゝつた。中單と下衣で蒲團を拵へ、ナブキンを縫ひ合せてシイトを拵へ、褌衣は懸蒲團に使ひ、外套は巻いて枕にした。鞆を一つ平らに置いてそれを腰掛にし、もう一つの方の側面を立ててそれを卓子にした。紙とインクの用意を整へ、書庫の積りて携へてゐた書物を一打ばかり列べて見た。これ窓帷と窓が無いばかりで、其の外に不自由はなかつた。

這麼赤裸の隔離舎にゐながら、ヴェルドレエ町のテニスコオトに宿を取つてゐると餘り異なる所はなかつた。食物もなかなか威張つた。

上等兵が二名、銃に劍を著けて護衛してゐる。階段のところは食堂、板間が食卓、梯子段が腰掛になつてゐた。支度が出来ると、知らせの鐘で、食卓へ呼ばれる。食事の間に、読み書きをしたり、室内の整理もしないでゐる時には、新教徒の墓地を自分の庭のつもりで散歩して見た。又看場へ登つて港内を瞰下すと、船の出入が一

1743(32)-1744(33)

眸に見えた。然うする内に二週間は経つた。もう少しの事で、一瞬間の怠屈も感ぜずに遮断期間の全部を過ごすことが出来た筈であつた。その時私はジョンヴィル Jonville と言ふ佛蘭西の公使に宛てて、酷臭く燻し立てて、半分焦げた手紙を差し出した。其のために、あと一週間の日数を縮めることになつて、その間を公使の邸で過ごした。實際のところ、やはり隔離舎に居るよりは、此の方がずつと居心地がよかつた。公使は限りなく私を愛した。秘書官のデボン Dupont 氏も氣のよい青年であつた。ジエノアの市中から田舎へ掛けて、種種なところへ案内してくれたので、方方面白く目をした。恁ういふ譯から私は此の人と懇意の間になつて、書信の往復も其の後餘程長くまで續けた。さて私はロムバルディア Lombardia の野を横ぎつて、愉快に旅程を趁うた。ミラノ、ヴェロナ、ブレシア Brescia、パドヴァ Padova その邊を観て通つた。到頭ヴェネチアへ著いてみると、大使閣下はもう待ち兼ねて業を煮してゐた。

1743(43)-1744(33)

來て見ると公文書が山と積んである。政府から來たのもあり、他の大使たちから來たのもあるが、中には暗號で認められた書類があつた。大使は必要なだけの暗號字を備へてゐながら、其の解釋が出來なかつた。私は今迄に官廳の職務を執つたこともなく、まだ生れてから政府の暗號字といふやうなものを一つも見つたことはなかつた。困つたことだと心配したが、その中にこれほど容易な事がないと分つて、一週間も経たぬうちに、何の困難もなしに暗號文が悉皆讀めるやうになつた。ヴェネチアの大使館などは、何時も事務が閑暇である事は勿論、此の大使のやうな人に、誰とて些とでも錯雜つた事件を持ち込んで來るやうな氣づかひは更になかつたからである。大使はそれを書き取る事も出來ず、一通り讀める程に書く事も出來ないために、私の著任するまでは、大抵な困り方ではなかつた。私は彼に取つて重要な人物であつた。彼もそれを思つて、私を大切にされた。また或る他の原因から、ますます然らざるやうになつて來た。前任の大使フルウレ Foulay 氏が、腦に異狀を起して官を罷めてからは、佛蘭西領事ル・ブロン Le Blond 氏が一時、大使の職務を代理してゐた。モンテエグ氏が著任の後、事情が明かになるまでと言つて、尙引

1743(32)-1744(33)

き續き執務してゐた。自分で爲ると言はれて出來ることでもないに、他人が自分の政務を處理してゐるといふ事をモンテエグ氏は不平で、その領事を癢にしてゐた。其處へ丁度私が行つたので、直ぐ書記官の任務を奪つて、私の主管の下に置いた。其の職務と官名とは、分離することの出來ぬものであつたから、私にその官名を帯びよと命じた。彼と同勤してゐる間は、始終此の肩書で上院や會議の席へ派遣した。私ばかりが出された。とにかく大使館の書記官としては、領事や政府から任命された官廳の書記を使つてゐるよりも、自身の手の者を置いておく方が都合のよいことは、言はずと知れたことだ。

是て私の位置は安固になつた。他の館員——いづれも伊太利亞人——も側の人も多く、多くの家人等も、誰あつて私と權力を争ひ試みる者はなくなつた。授けられた官名に附帶する權利を利用して、私は保護權、即ち大使管下の自由權を回復した。これは今まで度々侵害されてゐても、館員のヴェネチア人等が、無貪著に見逃がして來たものであつた。然し同時に私は不良の徒が、其處へ逃避して來ても、それは決して免さないことにした。或はそれが私の利益にもなり、閣下にも分け前させる

ことが出来たかは知らぬが……。

彼は書記官の職務の中で、官房の事務まで干渉しかけて来た。當時戦争があつて旅券が澤山交付される時であつた。旅券には認證を與へて奥印をするので、一通毎に一ツエキイノZeochino、ツエネチアの金貨、今不通。約四圓五六拾錢づつ書記官へ納める規定であつた。前任の書記官達は、佛蘭西人にも他國人にも區別なしに此のツエキイノを納めさせた。私は此の慣例を不公平と認め、自身は佛蘭西人ではないけれど、佛蘭西人の爲に、此の料金を廢した。が、一方で外國人に對しては、嚴重にこれを督促した。例へば西班牙女皇の寵臣の兄弟に當るスコッチ Duke 侯爵がこのツエキイノを納めないで、旅券を請求して来た時などは、押し返してこの金を徴收した。此の鯁骨を、復讐心の旺んな伊太利亞人は、決して忘れなかつた。旅券の課税に關する新规定が、一般に知れ渡るや否や、これを請求して来る者と言へば、皆、似而非の佛蘭西人ばかりに變つた。めちやくちやの片言雜りに、自分たちはプロヴンス人だ、ピカルデイ Picaudie 人だ、ブルゴオニ Bourgoone 人だなどと言ひ立てて来た。けれども私の耳は確かだから、決してそんな手に乗るやうな憂ひはな

かつた。伊太利亞人には一人でも納金を糊塗させなかつた。佛蘭西人なら一人でも拂はせた者はなかつたと思つてゐる。迂闊此の事を、まるで何も知らないて居たモンテエグ氏に言つて了つた。ツエキイノといふ語で彼の耳は開いた。佛蘭西人に課税せぬことにしたのを、良いとも悪いとも言はないで、他國人から徴收する料金の處分法に自分も立ち入つて来た。所得は折半にしようといふことを言ひ出した。

自身の利害に關するといふよりも、寧ろ彼の下の司張つた根性に憤りを催して、私は威丈高に彼の提議を刎ねつけた。彼は頑固に主張つた。私は頭へ込み上げて來て、語氣まで勵勵しく、

「それやあなた不可ません。閣下は御自身の権限をお守りになればよし、私には私だけの権限を守らせていたゞきませう。此の金は一スウたりとも決して閣下にお手は著けさせません。」

と言ひ放つた。これでは到底いけないと知つて、彼は別に方法を案じ出した。そして厚顔しくも、斯う言ひ出した。君は官房の收入を獨占してゐるのだから、同じ

官房の支出は引受けて仕拂ふのが正當だらうと。這麼ことと言ひ争つても詰らぬと思つて、其から後は、インクも紙も封蠟も蠟燭も紐も新規の印章まで悉皆自辨て調へたが、それを一リアルでも私に返してくれなかつた。それは然うとしても彼の氣前の面白い、そして微塵も慾氣のないビニイにだけは、私も旅券の所得の一部分を配けてやつてゐた。彼も心の中で私に禮を言つてゐたらうし、私も氣の附くだけは、疎略にしなかつた。二人は何時までも親密に勤めた。

私が無經驗である上に、一方は無智と強情とで固めた、大使には過ぎた人物であつたから、私が常識に懇へ知性に問うて、大使の職務や王室の政務を巧く處理して退けようとしても、片端から壞して行くのであらうと、最初は然う思つてゐたが、實際に當つてみて、自分の爲事はそんなに心配なものでもないといふことが解つた。彼のした事で、至當な措置だと思はせたのは、西班牙の大使マリイ Mani 侯爵と提携するやうになつたことである。マリイ大使は、伶俐な慧い人で、随分モンテエグ氏ぐらゐを鼻の尖で動かすことも出来かねぬ方であつた。でも兩國の利害の一致と云ふ點から考へて、何時でも有益な助言を與へて來たのを、一方はとかく自分

の意見を振り廻したが、つて實行といふ段になると、すぐ打つ壊して了つた。唯一の二人が相互ひに協力して當つた事は、ヴェネチア人に局外中立を嚴守させることであつた譯者云。ヴェネチアは、一七九七年拿破崙に征服されたまでは、獨立の一共和國で、ドオジニ Dogo と稱へる大統領が管理してゐた。ヴェネチア人等は確く條約を守ると保證しながら、裏面では、埃太利亞の軍隊へ向けて、盛んに彈藥を供給したり、剩さへ脱營といふ名の下に、新募の兵をも輸送してゐた。モンテエグ氏は内内共和國の方へ好意を表してゐるらしく、いろいろ私が抗言して見ても、本國政府への報告には、皆私に、ヴェネチアは決して中立條約に違反するやうなことはないといふことを無理に證言させた。

此の哀むべき人間の強情と狂愚とは、始終私に不條理極ることを書き、且行ふことを餘儀なくさせた。意の儘に私をばその手先に使ふことを強ひた。それがために時とすると書記官といふ職務はとても堪へられないものだ。殆んど不可能の事だ。などと思ひ入るやうにさせた。國王若しくは政府へ發送する文書には、執と言つてそんなに祕密を貴ばなければならぬものもないのに、殆んど全部を暗

號文で起草しろと聒しく頑張つたなどが其の一例である。金曜日に政府からの書類が到達して、土曜日にこちらからのを發送する其の間の置かな時間て、そんなに澤山暗號を使つた文書を作つて、然も同じ飛脚に渡すといふことは、出来ることでないといふことを言つて聞かせた。すると彼の擗り出した名案は、明日到達しようといふ書類に對する回答文を、前日の木曜日から作つて置かうといふのである。世にも妙策を案じ得たやうな顔をしてゐる。何ぼ何でも那樣事が出来たものでなく、いよいよそれを實行しようといふのなら、亂暴も程があると、どんなに言つても背きさうにもせぬ。それから後、終まで始終、彼がその週内に取りとめもなく口にした語を書き取つたり、彼處此處と私が泡を喰つて飛び廻つて拾つて来た下らない材料を取り合はせて、土曜日に發送する書類の草稿として、木曜日の朝までには必とそれを提出することを怠らなかつた。そして金曜日に照會が著くと、大急ぎでそれと合せて、必要な加除と訂正を加へたきり、すぐに回答として發送した。

また別に飛び離れて可笑しい癖があつた。それは、彼の書信を想像に餘るほど

滑稽に見せた。それは、甚廢書信が來ても行く先まで届けなくて、元の出所へ送り返すことであつた。政府から來る通信は、いづれもアムロオ Anelot 氏、當時の外務大臣へ宛てて送り、巴里から來るのはモオルバア Mannepas (佛國宰相) 氏へ、瑞典からはアザランクウル Havincourt 氏へ、彼得堡からはラ・シ・タルナイ La Chetardie 氏へ送つた。時には一個人から來たのでも、少し異つた用語で私に修飾をさせて、それそれ差出人へ宛てて送り返させた。認めを貰はうと思つて書類を提出しても、政府宛の分の外は、全く眼も通さず、他の大使宛の書類でも、些とも讀まないうて、盲判を捺す習慣になつてゐたから、其の後の分に對しては、自分の思ふ通りに、幾分の變更を試みるぐらゐの自由が取れて、少くとも相互の通信を交換するだけのことはした。然し重要書類に適當な變更を加へるといふことは、私には出来なかつた。まだしも彼が自己一流の譯の解らぬ妄語を、その中へ幾行も書き込まない時が、私の幸福であつた。若しそれが書き込まれると、この新規な妄語で裝飾された書類を、もう一度始めから清書し直さなければならず、おまけに暗號字といふ名譽を戴かさないと、奈何しても彼は署名せぬといふ騒ぎであつた。私は彼の名譽を尊重す

1743(32)-1744(33)

るあまり彼の口授することと異つた暗號文を起草しかけて見た事が幾度あつたか分らぬ。しかし那樣不實な事をしたところで、何處でも是認する氣づかひはあるまいと氣づいて、どんな狂人染みた所業をしても、それは彼の責任に在ることとして抛棄つて置いた。私は正直に有體を話して、それで自分の委された義務は、責任を持つて果したと思つて満足してゐた。

私が常も率直に、熱心に勇敢に振舞つたのは、慙ういふ次第であつた。それは後に私の受けた報酬とは、非常に異つた報酬に相當した。天は私に幸福な性質を賦與した。最も優れた女子たちが私に教育を授けた。私自身も學び得た事が少くなかつた。是等のものが相集つて私といふものを作り上げたのであつたが、其の本領を見せるのは、今此の時であつたから、私はそれを事實にあらはした。孤獨の裡に在つて、友もなく相談相手もなく、無經驗の身で外國に來て、外國人ばかり相手にして居ると、周圍に居る者は、孰れも惡習い我利々々の寄合で、それらが世間の惡評を避けようがために、私をも渦巻へ捲き込まうとした。然し私は、佛蘭西といふ何の御蔭も蒙らない國のために、乃至當然の義務として、大使のためには別して

1743(32)-1744(33)

自分の力に能ふだけのことは十分に竭してゐたから、外の事には傍目も振らなかつた。衆目の集まる位置に居たけれども、他に後指を指されるやうなこともなく、却つて此のヴェネチア共和國や、平生互ひに往復してゐた諸外國の使臣たちに敬愛された。ヴェネチア在留の佛蘭西人、殊に彼の領事さへも私を大切にするやうになつた。此の領事を排擠して彼の任務を奪ひ取つたことは、由ないことであつたと思ふ。もともと其の任務は、領事の權限に屬するもので、それを私が引き受けたからと言つて面白いどころでなく、却つて一倍面倒を増したやうなものであつた。

モンテエグ氏はまるでマリイ侯爵に心酔し切つてゐた。そして微細な職務上の事には立ち入らないから、隨つて其が大抵懈り勝ちになるので、若し私といふものが居なければ、ヴェネチアに來てゐる佛蘭西の人たちは、自國の大使が何處に居るのだから解らぬくらゐであつた。だから居留民が何かの事で、大使の保護を受けたくても、聽いてくれないから、皆嘖嘖こぼすやうになつて、誰も其の傍へ行く者はなかつた。大使の方からも決してその人達を請待することがないから、食卓が賑ふといふやうなことはかつてなかつた。自分がすべきだと思つた事は、時々私は

獨斷で行つた。何事か佛蘭西人が請願して來ると、自分の能力に在るかぎり、何事でも取り扱つてやつた。これが他の國であつたら、未だ未だ私は爲事が出來たてあらうと思ふけれども、生憎手近に相談相手となるやうな人が居合さなから、爲方なしに家族と田舎に家を持つてゐた領事の處へ相談に出掛けなければならぬやうな始末で、その領事がまた用の多い人で、心には思つてゐても、つい妨げられる場合が多かつたりした。それでも、彼が口を利くのを面倒がるやうな時は、自分で冒險を試つて見たが、往往それが旨く行つた。是に就いて、今でも一例を記えて居て笑はされることがある。巴里の芝居好き者が、コラリイヌ Coralline と、その妹のカミイユ Camille との二女に樂まされることの出來たのは、私の力に由つたのだといふことに、誰も氣のついた者はあるまいが、全くそれに違ひなかつたのである。

二女の父のヴェロネエズ Veirones は、娘たちと一緒に、伊太利亞俳優の一座に加はつて行くといふ契約を結んで、二千フラン(約計八百圓)といふ手金まで受け取つて置きながら、巴里へは發たないで、靜とヴェネチアに居すわつてゐて、此處の聖路加座といふのへ出る約定をして丁つた。すると娘のコラリイヌは、未だ子供ではあつ

たが、これが呼物になつて、大入を取つた。ジェスツル Cesaris 公爵は佛蘭西議會の筆頭といふ資格で、早くヴェロネエズ父子を寄越せと言つて、大使へ要求して來た。モンテエグ氏は、その手紙を私に見せて唯一言、

「よく調べて見給へ。」

と命じたさりであつた。聖路加座は貴族のたしかツスチニアニ Zustiniani の所屬であつた。此の人に對つて、ヴェロネエズは國王陛下が雇ひ入れになつてゐるのであるから、早くこちらの方を解約しろといふことを申し込んで貰ふために、領事のル・ブロン氏へ頼みに行つた。ル・ブロン氏はあまり無食著すぎて、出かたが拙かつた。ツスチニアニは反對に理窟を捏ねて、ヴェロネエズを放さうとしなかつた。私は癪に觸つた。折ふし謝肉祭の時分であつたから、私は異裝舞蹈の衣裳と假面を用意して、ツスチニアニの邸へ出かけて行つた。私のゴンドラ gondola が、大使の儀装をして這入つて行つたために、觀てゐた者が悉く驚いた。ヴェネチア人は曾て恠ういふ有様を見たことはなかつた。私はずつと這入つて自分は *hina signora mus-chera* (一個の假面の義)といふ者だと通じさせた。中へ案内されるとすぐ私は其

の假面を脱いで實名を明した。議官は蒼くなつて、魂銷たやうな顔をしてゐる。「閣下」ヴェネチア語で慙う私が言ひ出した。「私がまゐりました爲に、お妨げをして何とも、お氣の毒です。ところで、あなたの劇場の聖路加座に、ヴェロネエズと申す者が出勤してゐる筈ですが、實はあの者は、國王から傭入れになつてをりますので、人を以つてあなたへ其の事を申し上げました處が、御聽き濟にならないとかで、それ今日是我が陛下の御名の下に、那の男をお渡し願はうと思つてまゐつた次第で。」

ちよつと慙う述べてみたのが、忽ち效果を現した。私が其處を出るとすぐ主人公は早速非違檢察官の處へ駆けつけて、其の由を申し立てると、したたか譴責されたので、ヴェロネエズは其の日の中に暇を出された。私はヴェロネエズに、若し一週間に出發せぬと、拘引されるぞと言ひ送らせた。彼はすぐに發つた。

また或る時のこと、一商船の船長が困つてゐたのを、私一人で、殆んど誰の力も借りずに助けたこともあつた。其の船長は、馬耳塞の人で、名前はオリヴェエ Olivetti と言つた。船の名は記えてゐない。其の乗組員が、ヴェネチアの國へ爲事しに來てゐ

たスラヴ人と爭論の末暴行を働いたといふので、商船は抑留されて、船長を除く外は、何人も許可なくては船を著けることも上陸することも出来ないといふ酷い災難に遭つた。そこで大使へ哀願したが、一向取り合つてくれない。それから領事へ言つて行くと、この事件は通商上の事に關係はないから、幫助の限りでないといふ刻ねつけられて了つた。船長は手段が竭きて、私の處へ泣きついて來た。私はモンテグ氏に、此の件に關する調書を、議院へ提出する事を許可して欲しいと申し出た。私は今、大使がそれを許可したか、或は、其の調書を提出したか、よく記えてゐない。けれど、私の措置が無効になつて、船は引き續き出港禁止を命じられてゐたから、別に或る方法で好結果を得たことを記えてゐる。私はこの一件書類を、モオルバア氏宛の文書の中へ挿入したが、然らざるにさへ、モンテグ氏の同意を求めぬに、なかなか骨が折れた。其らの書類は大切なものでもなかつたけれど、ヴェネチアでそれが開封されたといふことを私は知つた。其の事は右の箇條が逐一公報の紙上へ出たので解つて來た。この裏切りは、私が大使に勸めて告訴させようとしたけれど、無功に終つたためにしたことである。彼の書類の中へ、遭難一件を書

1743(32)-1744(33)

き込んだ私の趣意といふのは、共和國政府の好奇心を利用して、將來を危惧せしめ、そして那の商船を釋放させようといふのであつた。てなにと、若し政府からの指令を待つてゐなければならぬとなると、其が到達するまでに、船長は奈何なつて了ふかも知れぬ。まだその上に、私は船員を訊問するために直接その船へ出向いて行つた。爾時は領事館の官房に居るパチゼル Patzert 師と一緒に、此の人は心から進んで來たのではなかつた。これらの哀むべき人達は、誰に限らず皆議院の感情を害することばかり恐れてゐたのであつた。禁令が出てゐて船へ乗り込むことが出来ないから、私は自分のゴンドラの中から、大聲に船員の一人一人に訊問の語を懸けたが、發問の爲方で、船員等の利益になるやうな答辯をさせるやうに水を向けてやつた。訊問をしたり、口供書を製するのは、寧ろパチセルの方の職務だから、私は彼に然うさせようと思つた。それなのに彼は同意することは愚か、一語も口を利かない。口供書の、私の名の次に署名するのすら愚圖愚圖言つたくらゐてあつた。随分大膽な措置ではあつたが、幸ひに好結果を得て、商船は無事に出口を許された。政府の指令が著いたのはそれから餘程遅れてであつた。船長は

1743(32)-1744(33)

私に謝禮をしようといふから、私は惱りもしないで、彼の背を拵きながら、「ねえオリヴェエ君。旅券ぐらゐは只貰ふのが、僕に附いた役得と言つて可いんだらう？ それすら佛蘭西の方から受け取らない僕がさ、何ぼ何だつて國王の保護を金で賣つたと言はれちや酷ぢやないか？」と言つた。が、せめて船の中で御馳走だけでもしたいからと言ふので、其は辭退しないで、西班牙の大使館に書記官を勤めてゐた、カリオ Cario といふ人を伴つて、一緒に、行つた。カリオは才子で面白い男であつた。後には巴里駐在の書記官又は代理公使となつたが、モンテエグ大使と、マリイ大使が親密であつたやうに、私達二人も、互ひに懇意にし合つてゐた。

自分に出來るだけの事を、正直一圖に取り扱つてゐる間に、些細な事件にも順序を立て、注意を加へて、他に欺かれたり、自分の金を費ひ込んだりしないやうな方法を、知つてゐたならば、私はどんなにか幸福だつたらう！ 然し、私の現に占めてゐたやうな位置では、ごく緩かな過失でも、後の祟が可怕しいから、注意力は、全部、職務上の失態に陥らぬやうに、といふ方へ向いてゐた。終まで、自分の本職に關係した

1743(32)-1744(33)

渾べての事件を處理するのに、十分規則立つて、飽くまでも精確にと心懸けてゐた。二三度餘り遑^{あせ}て書類の書損じをしたがために、アムロオ氏の書記などが、苦情を言つたこともあつたけれど、其の外には、大使は勿論誰からも、職務を懈つたといふ小言を喰つたことは唯の一度もなかつた。私のやうな怠^{おろそ}け者のぼんやり者にしては、特筆すべき事件と謂はねばならぬ。しかし時とすると、記憶が弱くて、自分の任されてゐた用を、迂^{まが}闊^か忘れて了ふやうなこともあつたけれど、正義を重んずることを忘れなかつたから、其の事に就いて、誰も不平を鳴らして來ぬ前に、その過失^{あやま}を自身に引き受けた。茲^{こゝ}に其の一例を述べる。これは私がヴェネチアを立ち去る時の事で、其の結果は後に私が巴里へ來てから氣がついた。

大使館の料理番のルッスロオ Roussetot といふのが、古びた二百フラン(約計八十圓)の手形を、佛蘭西から持つて來た。これはルッスロオの友人で、醫師^{かちし}をしてゐた男が、鬻^うぎを賣り渡した代金として、ツァネットオ ナニ Zanetto Nani といふヴェネチアの貴族から受け取つたものであつた。其の手形をルッスロオが私の處へ持つて來て、何卒^{どうか}此の手形で若干金引き出せるやうにと言つて、勸解の依頼を持ち込んだ。一體^{どう}は

1743(32)-1744(33)

ネチア貴族の慣例^{くわんれい}として、外國で借りた金は、自分の國へ歸つて來ると、決して返さないといふ事は、私も彼も承知してゐた。何でも彼^かでもその金を取り還さうとしても、果てしもなく愚圖^{ぐど}愚圖^{ぐど}言つて、こちらが費用^{ひよう}仆れとなるばかりであるから、可哀^{あは}さうな債權^{せけん}者は、もう根氣^{こんき}が竭^{つき}き果^はてて、全く棄權^{しきけん}して了ふか、然^{しか}もなくば、眞^{まこと}の一部分^{いぶぶん}だけ受け取つて我慢するより爲^{ため}方がない。私はツァネットオに督促^{とくそく}することをルブロン氏へ頼んだ。ツァネットオは、その手形は認めなければ、仕拂^{しはら}いの方は承知せぬ。大分激論^{げきろん}があつた後に、幸^{あは}と三ツキカイノ約計^{やくけい}十三四圓^{じゅうさんしよげん}だけ出さうといふことになつた。で、ルブロン氏が手形を持つて行つて、見せたことは見せたが、金を準備^{じゆんび}してない。どうしても待つてゐなければならぬ。丁度^{ちょうど}この間に私は大使と爭論^{せうろん}を、おつ始めて、大使館を出て行かなければならぬやうになつたのである。保管^{くわん}の書類は、綿密^{めんみつ}に整理してあつたのに、ルッスロオの手形だけが、奈何^{いかん}しても見當らぬ。ルブロン氏は、確かに私に返したと言ふ。固^{かた}より正直^{しやうじき}な人であるから、それを疑^{うたが}ぐるのは私の無理だ。それにも拘^とらず、私がそれを何^{なん}うしたのかを憶^{おぼ}ひ出すことは出来なかつた。とにかくツァネットオは債務^{せむ}を承認^{しんにん}してゐるのであるから、私

1743(32)-1744(33)

はル・ブロン氏に頼んで、領收書を書くか、或は副本のつもりでもう一通手形を發行させるかして、三ツキイノの金を引き出して貰はうとした。ツァネットオは手形が紛失したと聞いて、執方も承知しない。私は自分の財布から三ツキイノを出して、相濟としてル・スロオに渡さうとした。彼は其の金を受け取らないで、巴里へ行つた時に、債権者と直接に談をして欲しいと言つて、其の住所を私に教へた。醫師は是迄の成行を知つてゐるから、手形を受け取るか、金なら全額を返して貰はうと言つて承知せぬ。私は腹が立つて、若し此の厄介な手形が見つかるものなら、甚麽こともしかねなかつた。爲方がないから二百フランを悉皆仕拂つた。而も金に窮り切つてゐる最中のことであつた。斯ういふ譯で、債権者は、手形が紛失したばかりに、金額の仕拂を受けることが出来たので、若し彼のために不幸にしてそれが出て来たならば、ツァネットオナニ閣下が契約した十エキ、ウ約計十三四圓、即ち伊貨三ツキイノと同額の金すら、容易なことで、手に入るのではなかつたのである。

職務に對しては、自分でも大した手腕があるやうに思つたので、ますます興味が

1743(32)-1744(33)

乗つて来た。て、友人のカリオや、信義に篤いアルツウナ Aluna —— この人の事は、やがて話をする——との交遊を除き、又聖馬可通や、劇場の無邪氣な娛樂を除き、又うち連れて、折折人の家を訪問したことなどを除いた外は、私の樂みといへば、即ち自分の事務に對するそれのみであつた。困難な事務が然う澤山あるてはなし、ピニイといふ助手も私に隨いてゐたが、何分文書往復の區域が廣く、それに折ふし職争が始まつてゐたために、随分爲事は忙しかつた。毎朝の時間の大部分は事務にかかつて了つた。飛脚の來た時などは、夜に入ることあつた。餘暇があれば、それを今從事してゐるやうな法政の研究に充てたが、初めから調子がよかつたので、是ならば、將來十分益に立つだらうと樂んでゐた。とにかく誰も私の事を悪くいふ者がなく、大使自身さへ、勤務振りを讃め立てて、苦情がましいことを言つた例は會てなかつた。それに苦情は却つて私の方から出た。到頭辭職したいと言ひ出した頃は、彼は曾ならず不機嫌に見えた。關係諸大使、または各大臣などが、よい書記官だと言つて、速りに大使へ禮を言つて、寄越したりするので、本来なら大使は悦ばなければならぬのに、並外れな彼の腦裡には、却つて反對の結果を起させた。

特に或る重要事件に關係して言つて來た謝狀のために、私は詰らぬ目に遭つたことがある。是非この事は話して置かねばならぬ。

毎土曜日は諸方へ郵書の出る日であるのに、事務が未だ済まない内から、何處かへ出掛けやう、出掛けようと言つて些との間も彼は眞面目に静としてゐられなかつた。それほど彼は不勉強であつた。だから國王や諸大臣へ向けて發送する文書の仕上げを、やたらに急促して書かせて、自分も上の空で署名して、其だけ済ますととばくさと、何處とも知らず出掛けて行く。其の外の種々な書類は、てんで見向きもしない。其の書類も、普通の報告ぐらゐなら、受付だけして置けばそれで済むけれども、若し何か王室に關係でもある時には、誰か署名する者がなくてはならぬから、其の署名は私がする。或る日、維因駐在の佛蘭西代理公使ヴンサン Vincent 氏から、重要な通牒を受け取つた時に、丁度そんな事があつた。それは、ロブコヰイツ Lobkowitz 公がナポリ Napoli へ進軍し、ガアジッ Casages 伯が彼の忘れられない退却をしたときのことで、歐羅巴人は餘りこの事を話さないけれども、實に當世紀中、罕に觀る壯烈な軍隊行動であつた。ヴンサン氏から來た通牒には、一人の男が維因を發

1743(32)-1744(33)

1743(32)-1744(33)

つて、ヴェネチアからアブルチイ Abruzzi へ向けて竊然忍んで行く、これは埃太利亞軍隊が近づいたことをアブルチイの方へ警告するためだと言つて、其の男の人相書まで添へてあつた。例の何事にも無貪著なモンテエグ伯が、折柄不在だつたら、私はその書類をオオビタル Hôpital 侯の方へ廻して機宜に適つた處置をした。ブルボン家が、ナポリ王國を保全することを得たのは、平生愚弄に愚弄を重ね受けた、この哀れなジャン・ジックの力に由つたのかも知れぬ譯者云。ロブコヰイツは埃軍の總督。ガアジッは西班牙軍の總督。一七四三年二月、ガアジッは埃軍をロムバルデアで撃破した後、大軍を前にして將卒を損ぜむことを恐れ、餘儀なく退却した。オオビタル侯爵は、此方の大使へ、當然のことながら、禮を言つて來た時に、書記官たる私を讀めて、克く歩調を揃へてやつて呉れたといふ事まで書いて來た。モンテエグ伯は、自分こそ此の事件の粗漏を後悔しなければならぬのに、却つて侯爵が那麼に言つて寄越したのは、暗に自身を非難する心に違ひないなぞと、飛んでもない邪推をした。私には忿忿した所を見せた。未だ其の外に、私は君士坦丁堡駐在の大使、カステラアヌ Castellano 伯爵に向つても、あれほど重大な事件ではなかつた

1743(32)-1744(33)

が、前のオオビタル侯爵に關係したやうな事件を持つてゐた。ところが君士坦丁堡へは郵便がなくて、時時議院からの飛脚が要塞へ行く時に、若し佛蘭西の大使に何か用があれば手紙を書くやうにと知らせて来るばかりであつた。此の知らせは大抵一日二日前に来るのが當り前であるのに、此のモンテエグ氏は、何時も他から軽く視られた所爲で、眞の申譯に、飛脚の出發前、一二時間といふ時分でないと思はせて來なかつた。て多くは大使の不在中に出會すことになるから、何時も私が書類を作つて出してゐた。カステラヌ氏は私への回答の序に、懇篤な謝狀を送つて來た。同様にジエノワのジャンヴィル氏からも來た。それだけに又新たに苦情が加はつた。

それは私だと言つて、機會の許す限りは、自分の名前を賣ることに努めなかつたのではないが、出過ぎた事をして、強ひて其の機會を造り出さうとまではしなかつた。唯自分が巧みに事務を運んだ節には、其の至當な報酬として、眼の開いた人たちに賞讃され、我が努力の徒爾にならなかつた事を知つて貰ふのに、何の不都合もあるまいと信じてゐた。執務の精確機敏、それが果して大使の私を憚るやうになつた

1743(32)-1744(33)

當然の原因であつたらうか。それは姑らく言ふまい。併し、二人がいよいよ別れるといふ當の日まで、絶えず彼が口にしたのは、實にこれに外ならなかつた。それは此處で立派に證言して置く。

大使の家庭は何時も亂脈で、破落戸のやうな者が羣を作して集つてゐた。佛蘭西人はみんな冷遇されて、其の代りに伊太利亞人が幅を利かせてゐた。おまけに其の中で、年久しく大使館員として功勞のあつた人たちは、何れも罷免の恥辱を呑んで出て行つたが、中にも確かベアチイ・ポエ伯とか言つて、以前はフルウレ伯の扈從では首席にゐて、當代になつてからも、同席を占めてゐた其の人まで、同じ運命に遭はされた。次席の人は、モンテエグ氏が自分で引つ張つて來たマントヴ・マルジョヴァあたりの喰詰め者で、ドメニコ・ヴィタリ Domenico Vitali といふ者だつたが、此の男に家政上の主權を與へて置いた。すると此の男は、詔諛と吝嗇とですつかり大使に取り入つて、尙だ幾人か残つてゐた正義の人たち、さては、其の頭にある書記官にまで、雷ならず打撃を與へた。凡そ正義の人の儼とした眼差ほど、奸猾な徒は不安を與へるものはない。ヴィタリをして、私を憎ましめるには、それだけあれば十分で

あつた。其處へ未だ外の原因まで附加はつて、一層憎惡の念を強くするやうになつた。私の方が悪かつたら、讀者の叱責を蒙けることにして、其の原因といふものを話して見よう。

大使は常例として、駐在地にある五つの劇場の何處にても、一間づつ觀棚を買ひ切つて置いた。毎日晝食の時に、大使は極まつて、今日は何處の芝居へ行くといふことを名指した。次に、私が自分の好きな座を擇び、他の側人達はまたその外の座へ見物に出かける。私は出しなに、自分の擇んだ場席の鍵を持つて行つた。或る日、ウイタリが其の場に居ぬ時、私は自分の使つてゐる下男に、或る家まで鍵を持つて來るやうに吩咐けた。ウイタリは私の鍵を寄越さないで、ちやんと自分がその席を占領して了つたと言ふことであつた。其の返辭を下男が大勢の前で吹聴したから、私の憤怒は一倍激しかつた。其の晩、ウイタリは私に謝罪ると言つたけれど、這箇は肯かないで、彼に露きつけて、

「言譯をする氣なら、明日何時に、僕の侮辱を蒙けた那の家まで出て來て、譯を知つてゐる人達の前でして貰はう。てなげや、明後日甚麼ことが有らうと、君か僕か執方

かが此處を出て行くことにしよう。

斯う言つた語勢が強かつたので、ウイタリは縮み上がった。彼は定められた場所へ、定められた時間に出て來て、皆の前で、彼に相應しい意氣地のない謝罪をした。併し彼は、あとで緩平復讐の方法を考へた。私には全く屈從してゐるやうに見せかけて、陰では伊太利亞人の持前を十分に見せた。大使にすすめて私を罷めさせることは出来なかつたけれど、奈何しても私の方から罷めて出なければならぬやうな境遇に突き落した。

然うした手合だから、到底私の人物を理解し得る氣づかひはない。けれども、彼自身の利益となれば、私を動かす方法は知つてゐた。私の性質が温良で、よく他の過失を寛容すること、その代りに故意の侮辱に對しては、自尊心の満足するまでは黙つてゐないこと。秩序と威嚴の具はるべき所には、必とそれが缺けることを承知しないこと。他人に十分の尊敬を拂ふばかりでなく、同等の尊敬を自身にも要求すること。恚ういふ點が私の特性であることを克く呑み込んでゐた。其處が彼の乗じた所であつた。そして、竟に成功するやうになつた。

大使の邸中を彼はめちやくちやに顛覆して了つた。折角私が骨を折つて打ち建てようとした規律も、順序も、整理も、悉く壊された。女の一人も居ぬ家であつて見ると、普通よりも幾分か、嚴重に取締をせぬと、物事すべてが整然と行かない、随つて威嚴を損ずることになる。彼は間もなく此の邸をば、淫逸と放縱の住家詐欺師と淫蕩兒の巢にして了つた。曩の次席の人を逐ひ出して、その跡へマルタ Malta の十字架を掲げた私窩窟を開いてゐた一つ穴の男を据ゑて、大使の次席の扈從にした。そして二人で腹を合せて、檢束のない、破廉恥極る行爲を散々した。大使の居室、それも固より整頓してゐるといふ方でもなかつたが、其の室の外は、家中何處の隅にも眞面目な人間のゐられさうな處は、一つもなかつた。

大使は晚餐を喰はないから、夕方になると、私達や附添の人たちだけで、別に食事をすることになつてゐた。ビニイなども此處で一緒に喰つた。甚麼鄙陋な居酒屋の店でも、もつと清潔にもつと行儀よく、食卓掛なども這麼穢いのでなく、食ひ物だつてももつと増しなものがある筈だ。此處では眞黒に燻つた蠟燭が一本悄然と立つてゐるさうで、錫の皿に、鐵の肉又といふ有様である。表へ知れぬことなら怒

すべきであるが、皆して私の自用のゴンドラまで奪り上げて了つた。他の諸大使に跟いてゐる書記官連中の中で、飢ひ船に乗つたり、徒歩で道を歩いてゐる者は私ばかりであつた。議院に出る時の外は、大使の扈從も隨かなかつた。そのみならず、邸内での一件が、一つとして市中に知れてゐないものはなかつた。大使に使はれてゐる役員たちは、みんな騒ぎ立てた。首謀たるドメニコはみんなが此の日頃亂脈の中に生活してゐることが、私に取つては誰よりも一倍辛い辛抱であるといふ事を知つてゐるから、尙更聲を大きくして騒いだ。邸内で私だけは、決して餘所へ行つて内輪の事を喋らなかつた。が、斯ういふ事や、大使自身のことを、臆する色もなく閣下に訴へたが、已んぬる哉、彼は早や忌々しい悪黨どもに魅られて、日ごと私に何か知らず新たな侮辱を浴せた。同職の人たちとの釣合上、又私自身の位置として相應に費用の要することは、已むを得ないことであつたが、自分の俸給には、一スウの餘裕もなかつた。で、大使に金を請求すると、彼は私を尊敬し、且信用してゐるといふことばかりは言ふが、那樣事で私の紙入が一杯になつて、思ふ通りの事が出来ると思つてゐるらしかつた。

大使の頭腦は、元來人並異つてゐる所を、二人の惡黨が到頭全くこれを狂はして了つて下らぬ骨董品の賣買に魂を入れさせ、自分たちは甘い汁を吸ひながら、口では十分爲になるやうに取り計らつたやうな事を言つてゐた。又大使に懇懇めて、ブレレンタ Brelia 河に臨んだ大別墅を借り入れさせ、定められた借料の二倍の金を拂はせて、其の懸値を持主として山分けにした。各室ともヴェネチア式にモザイクの裝飾を施して、綺麗な大理石の圓柱や方柱が立つてゐた。それをモンテエグは、巴里では斯うして裝飾するのだと言つて、悉皆樞の薄板で其處等中を張り詰めて了つた。他の諸大使とは獨り異つて、館員たちの帶劔を禁じ、奴僕に杖を持たせなかつたのも、同じく、巴里ではを利かしての事であつた。唯私が忠實一遍に勤めてゐるといふ點のみで、私を忌み嫌ふやうになつたのも、恐らく同じ理由からであつたのであらう。一斑は知るべしではないか。

大方蟲の居所がよくないのであらう、憎惡といふ意味さへなければ、と我慢して、私は輕蔑されようと、虐待されようと、平氣に堪へ忍んでゐた。しかし一朝、自分の勤勞に對して相當と信じてゐる、名譽まで剃ぎ奪つて了ふ算段をしてゐると氣取

つてからは、もう私は職を擲つより外はないと覺悟した。第一著に仕向けて來たのは、此のヴェネチアに居たモデナ Modena 公の一家を大使が請待しようとした時、大使は私に其の席へ出ることにはならぬと止めた。私は氣を悪くしたが、腹は立てないで、自分は毎日大使と食卓を共にするの光榮を荷つてゐるのであるから、若し、モデナ公が來て、同席することが協はぬなどと言はれるやうであつたら、閣下の威嚴として、又私の責任として、その様な無法な要求を黙つて聽いてゐるといふことは出來ないと答へた。大使は急ぎ込んで、

「何だ！ 扈從でもない君が、側附の者すら同席しない、一國の君主の食卓の前へ出しゃばらうといふんだな！」

「然うですとも！ 閣下から授けられました私の位置は、自分が塞げてゐる間は、側附の人たち、又は自稱扈從などの位置よりも、復かに優つて貴い筈で、那樣人たちの出られない處へでも、私ばかりは當然列席して可いのでせう。閣下が公會の席へ御臨場になる日には、私も禮法上儀式へ呼ばれますから、禮服してお伴をして、其の後、聖馬可の宮で、閣下のお招伴に宴席へ出るのだといふことをお忘れになつ

ては不可(い)ません。ヴエネチアの大統領(ト)や議官(ト)たちと公然(ト)食卓(ト)を圍むのが私の權利(ト)なり義務(ト)でもあるのに、それが今度のモデナ公の私宴(ト)へは出(ト)ては不可(い)ないといふ譯(ワ)が私には解(ワ)りません。

此の堂堂たる私の論鋒(ト)も、大使には通(ト)じなかつた。しかし私達は、再び争論(ト)を繰(ト)り返す機会(ト)がなかつた。來(ト)る等のモデナ公(ト)が來(ト)ないで了(ト)つた。

この事があつてから後は、折(ト)さへあれば私の可(い)嫌(ト)がることや、偏(へん)頗(ぱ)な仕打(し)の爲(ため)向(む)けどほして、私の位置(チ)に隨(したが)つた種(たぐ)々な特權(ト)を褫(ち)奪(だつ)して、可愛(い)いヴイタリに讓(ゆ)つてやうと、其(その)ばかりに心を碎(くだ)してゐた。事情(シ)が許(ゆる)すなら、ヴイタリを私の代(た)りに立てて、議院(ギ)へまでも突き出して見たい考(かん)であつたらしい。大使は平生(ト)ビエニを使(つか)つて、其の室内(ト)で私書(シ)を書(か)せてゐた。モオルバア氏(ト)へ、商船長(ト)オリヴェの一件(ト)を知らせる手紙(ト)も、やはりビエニに書(か)せた。其(その)文中(ト)には、本件(ト)の主務者(ト)であつた私の事は一言(ト)も言(い)はないで、反(た)つて當時(ト)口(ク)も開(あ)かなかつたバチセルの功(ト)に歸(か)しようと思(おも)つて、口供書(ク)の複本(フ)を調製(ト)して同氏(ト)へ送(おく)つた。私(わたし)を苦(くる)めて、自分の愛(あい)する者(モノ)を怡(よろこ)ばせようとしたのであるが、私の職務(ト)まで取り上げることは望(ぞ)んでゐなかつた。前(まへ)

のフロオ書記官(ト)は、彼の事を世間(ト)へ吹聴(ト)して了(と)つた人(ト)だが、此(この)人の後任(ト)を捜(たづ)ねる譯(ワ)に、私の後任(ト)が然(さ)う世話(ト)なしに見(み)つかるものでないといふことをよく知(し)つてゐた。此(この)處(ト)で書記官(ト)になる人の、缺(と)くべからざる資格(ト)は、議院(ト)と往復(ト)の關係(ト)上(ト)、伊太利亞語(ト)に通(と)じてゐること、一切(ト)の文書(ト)、一切(ト)の事件(ト)を、毫(こ)しも大使(ト)を煩(わづ)はさず、處理(ト)し得(と)ること、大使(ト)のために勞(と)を吝(いと)まぬことは勿論(ト)、身を卑(ひ)くして、側附(ト)の没分曉(ト)先(ま)生(ま)たちの御機嫌(ト)をも伺(うかが)はねばならぬこと、なか／＼大抵(ト)でない。だから大使(ト)も、私の生國(ト)なり、彼の郷里(ト)から遠(と)く離れた處(ト)へ私(わたし)を引き留(と)めて置(お)いて、金(かね)がない爲(ため)に執(と)方(と)へも歸(か)られないやうにして、終(ついに)に根(こん)負(お)けして屈服(くつぷく)して來(き)るのを待(まち)たうとしたのである。旨(こ)く行(い)りさへすれば、或(ある)は彼の希望(ト)どほりに行(い)つたかも知(し)れなかつたが、別(べつ)に思(おも)はくを有(あ)つてゐたヴイタリが、私(わたし)に最後(ト)の手段(ト)を取(と)らせるやうにしたので、其(その)目的(ト)が達(と)した。

私の勞力(ト)は悉(ことごと)く無駄(ト)になつた。感謝(ト)しなければならぬ勤務(ト)も、大使(ト)には却(か)つて失態(ト)と見做(と)された。内(うち)での不愉快(ト)と、外(そと)での無法(ト)と、——もう是(こゝ)より外(そと)に大使(ト)から期待(ト)するものもなくなつた。そして威信(ト)を墜(おと)し切(き)つた大使(ト)の手下(ト)共(ども)は、誰(たれ)一人(ひと)味(あじ)

1743(32)-1744(33)

方になる者もなく、いづれも私を陥れようとする者許りになつて了つた。斯う氣がついて見ると、もう猶豫すべきでないと思つて、辭任のことを申し出た。但し、後任が見附かる迄は待たうといふ約束であつた。諾とも否とも返辭をしないで、何時もの調子で大使は濟ましてゐる。是では埒が明かぬのみならず、後任の人を捜してゐるらしい様子が少しも見えないから、私は手紙を彼の兄に出して、自分の心持を細かに語り、大使から暇の貰はれるやうに取計らひを頼んだ末に、もう甚麽事があつても、此處にゐる氣はないといふことを書き添へた。永い間返事を待つて見たけれども來なかつた。私はそろそろ不安な氣が爲出して來たところへ、大使の方が兄から手紙を受け取つた。その手紙は随分露骨な書き方がしてあつたものと見えて、何ぞと言ふとすぐ腹を立つ大使だが、今度は別けて今までに無い激しい荒れ模様になつた。聴くにも堪へぬ悪口罵詈を急流の如く濺ぎかけた。終には舌が強ばつて來て、私が暗號表を他人に賣り渡したなどと暴言を吐くやうになつた。私は、はつはつはつと嗤笑つて、此のヴェネチアの何處の隅にか、那樣物を買ひ取つて、一エキッウでも出すやうな莫迦があると閣下は思つてお出でかと、些と嘲

1743(32)-1744(33)

弄の氣味で詰寄つた。然う言はれて大使は火のやうになつて、窓から私を追つ放り出すと言つて、人を呼び立てさうにした。それ迄は冷靜にしてゐたものの、此の恫喝を喰ふと、今度は私の方の憤怒が一時に込み上げた。私は駈けて行つて、扉をびつしやり閉め切つて錠を捻つた。

「不可ませんよ。」私は儼とした歩武で彼の方へ進み寄つて、あなたの召使どもが、この事に何の關係がありますか？　これはお互ひ二人の間で決定すべき事件ぢやありませんか？」

私の舉動なり態度が、忽ち彼を靜めた。驚きと怖れは歴史と彼の顔に讀まれた。彼の怒が段段をさまつて來るのを見て、私は唯簡單に左様ならと言つた切り、返辭も待たないで扉を開けて悠々と出て行つた。そして靜靜と控室を通つて行く、と、召使どもは常例に循つて皆起立して私を遣り過して了つたが、彼等は主人に手を貸すよりも、寧ろ私の方へ助勢したかも知れぬ所であつた。私は自分の室へも這入らないで、すぐと階段を降りて、二度とこの館門は潛らないつもりで、その儘外へ出た。

此の出来事を話しに、ル・ブロン氏の處へ指して行つた。彼は話を聽いて格別驚いた顔もしなかつた。大使の爲人を彼は熟く知つてゐたからであらう。まあ飯でも喰つて行き給へと言つて、即席ではあつたけれども、随分奢つた物を出した。大使の方には猫の子一匹居ないのに、此處へはヴェネチアに来てゐる名のある佛蘭西人は、打ち揃つて出掛けて來た。領事は衆賓へ私の事情を話した。誰一人として、大使が有理だといふ者はなかつた。大使は私の俸給を胡魔化して了つて、一スウをも與れなかつた。漸く持ち合せの若干ルイがある外は、著のみ著の儘だから、是で何うとして出發が出来ようかと、途方に暮れてゐた。人人の財布は私の爲に開けられた。ル・ブロン氏からは二十ツマキイノ(約計九拾圓)サン・シイル Saint-Cyr 氏からも同じ位出して貰つた。サン・シイル氏は、ル・ブロン氏に亞いて懸意にした人だ。其のほかの人達のは、禮を言つて謝絶つて了つた。そして出發の時まで宿を借りようと思つて、領事館の官房理事の處へ行つた。一つには世の情ある人達は、いづれも、大使の味方でないといふことを廣く證明しよう爲であつた。

大使は私の不幸が、圖らずも世間の同情を惹いたことを知り、且大使ともある自

分が、他から棄てられたことを知つて、正氣を失つた。狂人のやうな振舞をし出して來た。遂には前後を忘れて私を捕縛すべく議院へ請願した。その事をビニイからの通知で知つたから、明後日出發する積りてゐたのを延して、もう此の上二週間ぐらゐは滞在することに決めた。私の進退に就いては、世間が公平な判断をして見てゐた。私は誰からも大切にされた。議官の方では、あの狼狽へた大使の請願などを、無論許可する氣づかひもなかつたと同時に、領事の口を透して私へ、莫迦な人間が甚だなことをしようとも些とも懼れることは要らぬから、心まかせに何時までも、當地に滞在してゐてよからうと傳へて來た。

私は毎日友人知己の間を訪問した。西班牙の大使へ暇乞に行つて一方ならぬ優遇を受けた。ナポリの公使フィノキエチイ Finocchetti 伯爵をも、同じ譯で訪ねた。不在だつたので、手紙を出して置くと、世にも染染と情ある返事を與れた。金には素より困つてゐたが、借り残した借金と言へば、前に話した二口と、外にモランヂイ Morandi と、ふ商人から、五十エキ。ウ約計一百圓ばかり借になつてゐただけであつた。けれどもその金はカリオが引き受けて返済してくれる筈になつてゐた。

ガリオには其からも度々出遇ふ機會はあつたのに、到頭其金を返さずに了つた。が彼の二口の借金の方は、都合の附き次第綺麗に返して了つた。慙うして私は此國を立ち去つた。

1743(32)-1744(33)

ヴェネチアを去るに蒞んで、私は此の市府に特有な歡樂——少くも自分の滞在中に味つた享樂の一部分なりとも茲で話さずにゐられぬ。私の青春時代には、年齢相應の享樂若しくは歡樂と名の附くものを深くも追求しなかつたことは前にも話した。ヴェネチアに居る間でも、其嗜好に變化はなかつた。然し職務が職務で、餘計にこの嗜好を妨げたと同時に、淡泊な娛樂が面白くなつて來た。一番面白く思つたのは、名士達との交遊であつた。ルブロン、サンシイル、カリオ、アルツウナの諸君。今一人フォルリイゴシの人で、名前は忘れたけれど、此の人の事を憶ひ出すと、今だに胸が動くほど思ひ出の深いのがあつた。一生の間に接した人の中で、この紳士ぐらゐ私自身のと酷似した性癖を有つた人はまたとなかつた。その外には二

1743(32)-1744(33)

三の英吉利人、いづれも才能修養の凡庸でない、そして吾儕と同様、音樂には熱狂する方の紳士達。かういふ人達には、それぞれ夫人か、女友か、情婦かが有つた。中にも情婦たちは悉く才藝を備へたそれ者と言つた方の女ばかりで、其の家へ行くと、音樂があるか、舞踏があるか、偶には賭博なども始まつたりした。けれども他の種々な興味の方が旺んで、藝競べだ、芝居見だと言つて騒いでゐて、賭博だけは誰もあまり面白がらなかつた。賭博などといふものは、暇で暇で爲様のない者の慰みに過ぎないものだ。

一般の巴里人と同じやうに、私も伊太利亞音樂には、あまり同情を持つてゐなかつた。けれども同時に、幸ひと精敏な鑑賞力をも具へてゐたから、然ういふ偏見は立所に壓倒された。鑑賞力の優れた人達に與へるほどの印銘を、私もすぐと、此の音樂から感ぜずにゐられなかつた。權歌(ヴェネチア水上の舟子どもが唱ふ歌謠を聞いて、今迄にない肉聲の美を發見した。それから劇場でも、唯一心に歌を聴きたいと思つた時は、多勢うち寄つて喋つたり物を喰つたり、賭博を打つたりするのが煩くなつて、一人だけ外へ取つて退いて了つた。それほどオベラに魅られた。

1743(32)-1744(33)

然ういふ風に一人だけ自分の場席へ閉ぢ籠つて演技時間の長いのも恐れないで、終まで心おきなく享樂に耽つた。或る時聖クリソストムス Chrysostomus 座てわが家の寢床でも稀しいほど前後を忘れてすや／＼寢込んで了つたことがある。傍では咏歎調が盛んに花やかな旅行を續けてゐる最中とも知らず、此方はまるで夢うつつてゐた。が、そのしつとりと潤ひのある和聲天使の妙音とも聞き擬ふ旋律が、今方に徐徐と私の夢を醒まして行かうとするその刹那のたとしへなき甘味、それを何と言つて説明したらよいのであらう！ 何たる覺醒！ 何たる怡悦！ 何たる憧憬ぞ！ と思ふ瞬間に私の耳と眼とは開いた。殆ど自分は天國の人となつたかと思はれた。この駭魄的な曲を、現在は勿論死んでも忘れることであるまい。その歌詞の冒頭は斯ういふのであつた。

Conservami la bella
 Oh si in accende il cor.

救へ手弱女、

ときめく心を。

1743(32)-1744(33)

此の曲が可好しさに、一時それを手に入れたこともあつたけれど、腦裡に印した彼の曲と、紙に書いた曲とは同じ物でなかつた。樂譜は同じでも内容の悉皆異つたものであつた。その日の夕方眠を寤された時のと寸分違はぬやうに再演するには、紙上の樂譜では用を成さない。唯頭腦の中だけで、其の通りに奏することが出来る。

オペラの音樂よりも一段優れた、——伊太利亞は言ふまでもなく、廣い世界にも匹儔があるまいと思はれるのは、scuola 學校の義の音樂であらう。スクォラは貧しい少女を教育するために設立された慈惠院のやうなもので、共和國政府からは、それらの少女に結婚資金なり、捨身義金なりを支給することになつてゐる。少女に課する科目では、音樂が第一位を占める。四つのスクォラに附屬した教會堂では、日曜日毎に晚拜式を執行する間に、大合唱と、大管絃樂とを伴ふ經文歌が演奏される。孰れも伊太利亞知名の大家の作曲指揮に依つて、細格子の嵌つた樂堂で、二十歳以下の少女ばかりが集つて演奏するのである。これぐらゐ實感的で、しかも刺撃の強烈な音樂は外にあるまいと思ふ。豊富な技術、優秀な歌謠、肉聲の美演技の

1743(32)-1744(33)

諧調さう言つたやうなものが相集つて一種の印象を與へるのであるが此の印象は決して形態の美から來るのでない。それであるが此の印象に心を動かさぬものは恐らく一人もあるまいと信ずる。カリオも私もこの Mendicanti (貧民羣)の晩拜式に出ることを缺かしたことはなかつた。またそれは私達ばかりに限つた事でもなかつた。何時行つて見ても會堂の中はアマツウル一杯になつてゐて、オペラ座の俳優さへ此の優れた模範に依つて、歌謡の眞髓を感得する積りて出かけて來る者が少くなかつた。唯一つ忌忌しいと思つた事は、少女たちの集る樂堂に、びつしりと格子の這入つてゐること、聲ばかりは聞こえてゐるけれども、可惜美の天使の姿は、雲に隠れて了つてゐる。そればかりを私は言ひ暮らしてゐた。その事をル・ブロン氏に話すと、

「那樣に那の小娘どもが見たければ譯のない話だ。實は僕も那所の管理者の一人といふことになつてゐるから、何とか都合して、一緒に小食でも喰ふやうに取り持たう。」

彼が此の約束を履行するまで私は便便と待つてゐられなかつた。渴望し切つて

1743(32)-1744(33)

かた、是等の美神の巢窟たる樂屋へ這入つて行くときには、從來におぼえのない程憧憬の戰慄を感じた。ル・ブロン氏の周旋で、聲も名前も私には聞き馴染の世に響き渡つた歌女たちを、一人づつ呼んでは私に紹介してくれた。

「ちよつとソフィア Sofia……」

視るとそれは驚くほど醜い顔の女であつた。

「さあ、カッチイナ Cathina……」

是はまた眇目だ。

「それから、ベティナ Betina……」

一面の痘痕で顔の相好が崩れて了つてゐる。出て來る女も女も、一人として何處かに著い申し分のない者はなかつた。此の性の悪い領事が、私の吃驚した顔を眺めて大口開いて笑つてゐる。餘りだと思つた。でも中に二三人、稍見るに足る者もないことはなかつたが、然ういふのに限つて、合唱の中へ潛り込んでないとか、歌が唱へない。私の失望は尋常でなかつた。小食を喰つてゐる間に、世辭の一言も言つてやると、皆喜んで浮き立つて見えた。顔の醜いのは魅力をも葬り去ると

1743(32)-1744(33)

断ずることは出来ぬ。その例は彼女たちを見て解る。私は斯う思つた。「靈の力を借りないで、那廢は決して唱へるものでない。那の女達には、皆その力があるんだ」と。斯う考へ直して見ると、彼女達を見る見方がからりと變つて、歸りしなには、是等の醜女共が、皆戀しく思はれてならなかつた。私は晩拜式へ戻る勇氣も出なかつた。併し彼女たちを見てからは、危険が少くなつた。私は何時までも何時までも、彼女達の唱歌を楽しいものと思つてゐた。音聲の美は、容貌の醜さを補つて餘あるものであつたがために、現に私が直接に顔を視たにも拘らず、彼女達は皆美人であつたと思ふ心は、頑として抜けないものになつて了つた。

伊太利亞で音樂を樂まうといふには、何程の費用もかからないから、音樂に嗜好のある人は強ひて其の願望を自制する必要もない。私はクラヴサンを一臺借り込み、僅か一エキッパばかりで、四五人の合奏者を自宅へ招んで、一週間に一度づつ、オペラで聞いた中の面白さうな曲を、自分で演奏してみた。時には自作の、粹詩神中に在る、或る交響體を試演したこともあつた。此の試演が眞に面白かつたからか、或は世辭のつもりでか、それは知らぬが、聖クリンストムス座のバレエの教師が、

1743(32)-1744(33)

其の中の二曲を懇望して來た。二曲とも幸ひに此の大型管絃樂部に採用され、美しい、可愛い歌女のベッチイナ Bettina (前のとは別の女が出て踊つてくれた時は、眞箇に嬉しく思つた。ベッチイナは、西班牙人のファゴアガ Fagoga といふ私達の友人の家に於て世話になつてゐたから、夜などによく遊びに行つたものであつた。

また女の話になるが、凡そヴェネチアのやうな處へ來て、女に關係しないなどと言ふ者は嘘だ。では君も大いに艶聞があつたのだらうから、暫くは懺悔し給へと他は私に逼るであらう。全くそれは私にも然らぬ種類の話はある。て今までの話と同じやうな、ナイイザな懺悔を、是からぼつぼつ始めようと思ふ。

私が賣物の女は好かぬといふことは、今にはじまつたことではなかつたが、ヴェネチアでは手の届く區域内に、佳い素人の女は見附からなかつた。それは此國の家家の多くへは、自分の位置上無暗に出入がし兼ねたからである。ルブロン氏に可愛い娘たちはあつたけれど、容易に接近出来なかつた。それに娘たちの父母に

1743(32)-1744(33)

は、十分敬意を持つてゐたから、心に戀を描いてみることもすら出来なかつた。
 それ以上に私の所好なのは、普魯士王の官吏の娘で、カタネオ(Cateneo)といふ若い
 女であつた。ところが此の女にはカリオが戀してゐて、もう結婚談まで持ち上が
 つてゐた。妻を貰ふなら、カリオなどは自由な身分であるが、私は然うは行かない。
 俸給にしても、彼は年俸百ルーイ(約計一千圓)の、私はたつた百ピストオル(約計四百圓)
 しかない。それに私の氣質で、自分の友人の勢圏を侵すことは素より望みてな
 かつた上、何處に限らずだが、殊にこのヴェネチア邊へ来て、私のやうに空虚に近い財布
 を振り廻しながら、灰殻木戸郎でもあるまいといふことは、萬萬承知してゐた。私
 は異性の欲を轉回させるための不幸な習慣を續けてゐた。そして氣質が促す其
 の欲も、事務の忙しさについて紛らされて、一年の餘も此の市府に居ながら、巴里に居
 た時と同様の清淨を保つことが出来た。丁度十八箇月目に、此處を去るまでの間、
 唯二度の外、異性に近づいたことはなかつた。その二度といふのは、慙ういふ意外
 な機會からであつた。

第一回目は、彼のヴィタリといふ正直者の幹旋に由つたので、それは、何か彼の方か

1743(32)-1744(33)

ら謝罪せねばならぬことであつた揚句の話である。卓上の談話が何時ともなく、
 ヴェネチアの樂み筋といふ方へ落ちて行つた。折柄集まつてゐた男子達は、此のヴェ
 ネチアの娼妓には、何とも言はれぬ佳い處があつて、何處の國へ行つて見ても、是ほ
 どの女はたんあるまい、などと讚めちぎつた末、此の最上の快樂を冷淡に見てゐ
 るのは、随分野暮な話だと、私に譏刺けるやうに言ふ。ドメニコは私に、多勢ある中
 の一番の選り抜きといふ處を、どうしても馴染に持たなくては不可ない。自分が
 周旋の勞を執るから、枉げて承知しろと言ふのである。私は此の有難い親切心に
 思はず失笑した。すると尊敬すべき老ベアチイ伯は、伊太利亞人にしては稀らし
 い率直さを以つて、私に己の敵を先導に立てて魔窟へ飛び込むなどは、君にも似合
 ぬ不覺の至りてないかと、言つて呉れた。固より私は那樣欲望も誘惑も感じてゐ
 なかつたのに、何ういふ譯か自分でも解らぬ動機から、わが嗜慾に逆ひ、感情に逆ひ、
 理性に逆ひ、意志にまで逆つて、竟に耽溺を敢へてするやうになつた。それは唯自
 分の弱い心から、狐疑の色を顔にあらはすのを恥辱と心得、且此の國の俗言に、*Per
 non parer troppo coglione* (あんまりな意氣地無しと思はれたくないものだ)とある所

から瘦我慢で然うなつたと謂はなければならぬ。

押し掛けて行つた家のバドワ女は顔も美しく、相應に見られる女であつたが、私の所好といふ所までは遠かつた。ドメニコは私をその女の傍へ置いたまゝ姿を隠した。私はソルベトオガリエを命じたり唄を謡はせたりして、物の三十分も経つた頃に、卓の上へ、ヅカアトオチナル(約一圓七拾錢置いて歸りかけた。ところが女は勤めを果さぬ内は此の金は納められぬと、妙に疑ぐり深いことを言ふので、私も妙に莫迦な考を出して、疑念の晴れるやうにしてやつた。歸つて来てから、取り返しの附かぬ事になつたと思つて、何だか心配でたまらず、何はさて置き醫者を探して薬を求めさせるといふ騒ぎをした。格段に是ぞといふ異状もなく、症候が顯れたといふでもないに、凡そ三週間は精神が何と言つて喩へ様もない程の不安に襲はれた。彼のバドワ女に纏かれた腕から、何の後害をも貽さずに免れて出ることは誰にてもむづかしからうと、信じ切つてゐたからであつた。醫者も私に安心させようと思つて、いろ／＼骨を折つて見たが安心出来なかつた。爲方がないから、終には君の身體は天祐と言はうか、自然と病毒には感染しないやうな風に出來

1743(32)-1744(33)

上がつてゐるのだから、何も心配するには當らぬと、口を酸くして私に言ひ聞かせた。なる程私は遠慮方の経験は、他よりも道と少かつたが、此の病に冒された事が合つて無かつたところから見ると、此の醫者の言つたことは、或は正しかつたのかとも思はれる。それならばと言つて、決して私は増長して、無謀の事をする者でなかつた。縦し其の様な天祐が具はつてゐたにしても、それを濫りに利用するやうな事はなかつたと保證出来る。

1743(32)-1744(33)

第二回目の冒険も、同じく賣色の女との關係ではあつたが、前のは全く話の譯が異ひ、動機も結果も共に異つたものであつた。船長のオリツエが船へ私を請待して來たので、西班牙の書記官と一緒に臨席したことは、前に話したとほりである。私は内々禮砲を行ふことと信じてゐた。船員は擧つて整列して、私達を歓迎してゐるのに、一發の火薬も發しない。カリオの不満らしい容子を見て、一方ならず氣が病めた。吾儕よりもつと身分の卑い人たちに對してすら、商船では禮砲を行ふ

ことになつてゐるのである。而已ならず、船長は何か私に對しては、特別の敬意を表せねばならぬ等だと思つてゐた。斯う思つては隠してゐられぬのが私の本性で、饜應は鄭重でも船長の接待振が慇懃でも、私は初めから癢てたまらず、喰ふ物も少し喰つて、口も碌碌利かずにゐた。

でも第一の乾盃頃には、齊發でもあることと思つて待つてゐたのに、何の音沙汰もない。私の意中を看抜いたカリオは、子供が駄駄を捏ねるといふ風な私を見て、噴き出しさうにしてゐる。やや酣にならうとする時分に、偶と見ると、ゴンドラが一艘此處へ漕ぎ寄せて來た。

「もし貴下！船長は私に言ひかけた。お氣をつけなさいと、敵が其處へ見えましたよ。」

何の事を言ふのかと思つて訊いて見ても、彼は唯えへ、えへとはばかりで判然した答をせぬ。ゴンドラは舷側まで漕ぎ着けた。中から出て來たのは、見るから顛へ著くやうな一人の若い女で、男たらしの、さも軽らとした容態をして、三足ばかり足を捌いたと思ふともう船室の中に這入つてゐた。そしてクウヴェニル(食匙、肉

又などの合稱が、其の前へ列ぶか列ばぬ間に、もうちやんと私の傍へ膠着いて座つてゐた。潑刺な生氣に充ち満ちて、音ならぬ魅力のあるブリネット、齡なら二十歳までであらう。話は伊太利亞語ばかり使つてするのだが、その抑揚の工合だけを聞いてゐても、此方の頭がもう悠々茫として來さうになる。喰べながら、話してゐる内に、屹と私の方へ眼を與れて、きりきりと甲高に、

「あら！ブレモン Brémont さんの？ お久し振だわねえ！」

と叫んで、卒然私の兩腕の間へ身を投げ入れて、口の端へ自分のを押つ着けた。そして、氣息の塞まる程にきゆつと私を抱き締めた。東洋風の黒睡がちの大きな眼が、私の胸の真中を目標けて、火箭を射掛けた。そして初めの内こそ驚きの餘り、爲む術を知らなかつたが、須臾の間に、情火が非常な速度で込み上げて來て、他人の手前も有らうに、女の方から却つて私を制止しなければならぬほどの始末になつた。私は酔はされた。むしろ狂はされた。

やがて彼女の思ふやうに私を鎮靜させたことを見届けてからは、その撫媚も幾分か手柔かになつて來た。が、元氣はなかなか減じない。よい時分を見すまして、

嘘か真か知らぬが、先刻から那麽に舌たるくしかけて来たのは、全く私がブレモンといふ人に酷く背て見振へる位であつたからだと言ふ。それは女が熱くなつてゐた、トスカアナ Toscana の税關長で、今でも遇へばまた何うなるか知れぬけれど、些と莫迦で棄てて了つたから後釜には私を握るて、所好な人だけに、十分の愛を獻げよう、其のかはりには、彼女が澤山だと言ふまでは、私からも愛を酬いなければならぬ、そして向うから愛憎を盡かす時が来ても、それは丁度前のブレモンの時のやうに我慢して貰はなければならぬ、と然う言ふのである。事實はそのとほりに成つた。彼女は全く私を自分の物にして了つた。手套や扇子や頭巾までも私に持たせて、それ彼處へ行け、此處へ行け、是をしる彼をしると、一一指圖どほりに、私は唯唯言ひなりになつた。乗る時には私のゴンドラへ乗るから、自分のは返して了つてくれと言ふから、それも唯唯。席を起つて、その迹へカリオに座つて貰はう、少し話したい事があるから、と言ふので、これ亦唯唯。二人は小聲で随分長く話し合つてゐたが、私はそれを抛棄つて置いた。と、彼女は私を呼ぶから行つて見ると、

「ねえ、ツァネットオさん、あたしを愛して下さるなら、後生だから佛蘭西流は廢して

頂戴な面白くもないからね。可厭になつたと思つたら何時までも迷つてないで、早くおさらばにしませうよ。ね、必とよ。」

と言ふ。食後私共はムラノ Murano の玻璃製造所を觀に行つた、譯者云。ムラノはヴェネチア海の一島市。中世以降、玻璃製造で著はれ、公民館にその製品が陳列される。彼女はいろんな裝飾品を買ひたがつて、無遠慮に金を他に拂はせた。かと思ふと、私達に買はせたより、もつと餘計な小飾り物を、方方で蒔き散らして行つた。自分の金でも、他の金でも、一切絲目著けずにはつばと捨てたところでは、金の有難味を全く辨へぬのかと思はせた。て金を他に拂はせたといふのも、つまり自分て出すのが惜しいからといふのでなくて、見得から来たことに違ひない。自分の欲しい物は、他が買つてくれる、其處に彼女の得意があつた。

日暮れ方、私達は彼女をその家へ引つ張つて行つた。話をしてゐる間、私は鏡臺の上に拳銃が二挺置いてあるのを見つけて、

「おや、おや」と言ひ言ひ一挺取上げて見て、これは新形の飛道具だが、一體何にするのだい？ 這麽道具よりは、もつと火力の強い武器がお前の方にあるぢやないか。」

なぞと言つた様な冗談も一通り済んでから彼女は斯ういふことを言つた。
 「こつちが惚れてもゐない男のお附合で、機嫌氣味を取らなければならぬやうな
 時にや、もう惚惚して堪らないから、あべこべにその埋合せをさせてやるの。それ
 が當り前ぢやなくつて？ だけど、然らうやつて自分に調戲はせてる間でも、若しか
 不躰な事を爲かける奴があつたら、それや抛棄つときやあしなわい。誰でも他を
 莫迦にすれや、そのままぢや勘辨してやりやしないわよ。」
 屹とした矜を見せ、そして何處か生なやうな處もある態形、それが彼女の怪しい
 魅力に一層の力を加へた。

別れ際に、また明日の再會を約へた。彼女の待つ間もなく、すぐ復た出掛けて行
 つた。すると彼女は南國特有の *vestito di confidenza* (義服といふのに稍近い)といふ
 奴で、思ひ切つた甚い檢束のない服装をしてゐる。その姿が今日に歴歴と浮び出
 して來るけれども、細かく描き立ててみた處で爲方もあるまい。唯然し、その裝縁
 と襟元に薔薇色の柔毛の附いた絹絲の飾のしてあつたのが、美しい肌理に映つて、
 何とも言へぬ感じがした。後にそれがヴェネチアの風俗であるといふことを知つ

たが、この凝つた流行が、何爲佛蘭西へ這入らないのが、それを私は怪んだ。さて來
 て見ると、想像にも及ばなかつたくらゐの歡樂が、私を待ち受けてゐた。前にラル
 ナアジ夫人のことを話した時(五四二頁に當時の楽しい思ひ出が、今も時時喚び起
 されるといふことを言つたけれど、あの老い込んだ顔の拙い、冷淡なその夫人を、奈
 何してこのヅリエッタ Zulieta と比べることが出來よう！ 讀者は幾ら骨を折つて、
 此の魔性に近い媚婦の愛嬌と意氣とを腦裡に描き出さうとしても、眞を距ること
 が、甚だ遠くて終はるであらう。鮮麗な點に於いては、修道院の處女といへども及
 ばない。生生としたところは、土耳其の宮女も及ばず、刺撃的なところは、淨樂の天
 女といへども及び難い。感情の上には、た感覺の上に、這麼甘美な悅樂を身に受け
 たものは、恐らくこの廣い世界に一人もあるまい。嗚呼！ 一刹那でも此の悅樂を
 十分に舐めることが出來たら、まあ甚だであらう！……いや私は味つたには味つ
 たが、然しそれはチャムといふものを抜きにしてであつた。私はその至味を淡く
 して了つた。わが意からそれを消滅させて了つたのである。とは言ふものの、或
 はこれは造化が私に歡樂の禁斷を命じてゐたからかも知れぬ。天はこの言語に

絶する幸福を私の心では渴望させて置いて、その幸福が生ずる毒汁を私の惨な頭の中へ注射したのであつた。

私の特性を遺憾なく説明するに足るやうな一條の出来事が、私の生涯中にあつたとすれば、次に話さうとするのが、其である。自分が此の書物を書く趣意の何てあるかを、此の際に當つて力強く喚び覺ますにつけても、私は大勇猛心を振ひ起して、決して姑息な一寸遁れの心から、言ふ事も言はずに濟ますやうなことはしたくないと思ふ。讀者の何人たるを問はず、一個の人間を知悉したいと思ふ人は、姑く忍んで次の三四頁を通讀し給へ。さすればジーン・ジーン・クルンソといふ者を殘すところなく觀察することが出来るであらう。

一個の娼妓の城、それを私は愛の女神美の女神の殿堂とも思ひ做しつつ、這入つて行つた。そしてその女體は端嚴の相を具へた、瀟灑すべからざるものであるかのやうな思ひがした。彼女の與へたと同じやうな印象を正當に感じようと思へば、他の場合ではどうしても敬虔と尊信を抱いて向はなければなるまいと、つくづく私は然う思つた。始めて打ち解けて、彼女の持ち懸けて來る、じやらくらとした人

懐しな思はせぶりを見せつけられると、堪らなくなつて、どうか後の樂みを失ふ氣づかひのないやうにと競競心配になり、いつそもう一思ひに行く處まで行つて了はうかと焦慮つた。斯うして身を焼く焙のために、灰燼となつて了ふのかと思ひの外、俄然私は總身に、氷の如きものの流れめぐるのを感じた。足は立ち窘んで、氣も消え消えに、がつくり其處へ打僵れて、子供のやうに泣き入つた。

此の涙の原因は何であらう？ 其の時私は甚廢事を考へてゐたのであらう？ 私は恁う獨語を言つた。自分の手の中にあるこの本尊は、造化の神工、エロスの傑作で、精神も肉體も、一點の玷なく出来上つてゐる。妖艶に慈悲を兼ねたものだ。君主貴族などは、宜しく彼女の膝下に拜跪すべきだ。スケプトルム scepter 王者が手に持つ笏は、彼女の土足に懸けらるべきものだ。それに奈何した事だ。これが誰の慰み者にもなる夜鷹の類で、商船の船長にさへ自由にされるのだ。私のやうな者にも抱かれに來るのだ。その私といへば、無一物の人間でないか。どの位値打のあるといふ事も、彼女が知らう筈もなければ、知つたからと言つて有り難がる氣遣もない。奈何しても合點の行かぬのは此處だ。私は自分と自分の心に欺

1743(32)-1744(33)

かれて判断力が麻痺して丁ひ、一個の穢れた醜業婦を見違へたのか、それとも私には分らぬ或る秘密な缺點が潜んでゐて、それが女の魅力の効果を打壊し、一體なら誰にでも大騒ぎをされる筈のところを、却つて可厭がられるやうになつたのか、就方かに違ひあるまい。て私は其の缺點の何であるかを探らうとして、いろいろ心を遣つて見たが、唯ひよつとすると、何か可厭な病氣でも潜んでゐるのではないか知らぬといふ事だけが心に浮んだ。膩切つた肌付き、鮮麗な色澤、真白な齒列、匂高き呼吸、それと全身に行き渡つた女らしい身嗜み、然う言つたやうなものに、全然私の考は覆へされて了つて、前のバドヴ女郎との一件この方未だ自分の身體が眞箇に回復してゐないといふ懸念を持つてゐた私は、却つて彼女に害を及ぼすやうな事はないかと氣づかはれて來た。

このやうな回想が丁度その時に涌いたので、その刺撃で、つい涙が顔れるやうになつたのである。ゾリエッタに取つては、この光景は實に意外で、惘れた口が塞がらなかつた。然し彼女が室内を歩き廻つて鏡の前に來たときに、その譯を曉つたらしく、其處をまた私の目色で、今の事は決して彼女に對する不快の念から起こつ

1743(32)-1744(33)

たのでないといふことを知らせた。彼女の力で、私の氣分も穩かになり、極りの悪いのも忘れさせられた。今や私は未だ曾て男の唇も、手も觸つたことのない胸の上へ、蕩乎となつて狎戯れかからうとする機に、偶と目に這入つたのは、萎び切つた乳房の一つであつた。はつと思つて、熱く見ると、片方の乳房とは、似ても似つかぬ恰好をしてゐる。萎びた乳房、それが甚麼原因から來るものかと私はさまざまに考へて見た。何か先天性の悪疾があつたからではなからうかと思つても見た。然うなつてみると、今の今まで、自分の想像に描き得べき唯一の美人としてゐた心持が、驟然と變じて、造化から、人類から、愛から見放された、何か一種の怪物でも抱いてゐるやうな氣が爲出して來た。それに自分も莫迦なことに、斯ういふものを俺が見つけたと言ふ氣で、わざ／＼乳房の事を話して了つた。女はそれを冗談にして、了つて、相續らずのはしやぎ様で、いろ／＼と我を忘れさせるやうな事を言つたり爲したりした。しかし、何うしても裏むに餘る私の不安を見て取つた彼女は、到頭顔を赤くして、著物の前などをさちんと違へて、ついと窓の所へ取つて退いた。その迹を追うて傍へ寄らうとすると、また飛び退いてソファの上に腰を卸した。か

と思ふとすぐまた起ち上がつて、ばたばたと扇づかひを始めながら、彼方此方と歩き出して冷かな蔑むやうな調子で、慥う言つた。

Zanetto, lascia le donne, e studia la matematica (ザネットおさん、女なんか構つてゐないで、ちと算術でも勉強おししが可いわ)。

歸りしなに、復た明日遇はうぜ、と言ひ置かうとすると、少し延ばして三日目にしませうよといふ語の下から反意的な微笑を見せて、些とはお休みなさらないと、と附加へた。其の時機を待つ間の焦躁しさ加減といふものはなかつた。胸の中は、女のチャームと愛嬌で巨浪を揚げてゐる。くだらぬ穿鑿だてをしたばかりに、あの再び來まじき、甘美を極めた瞬間を、下手に取り逃がしたかと想ふと、その口惜しさと忌忌しさに、唯我と己を責めるばかり。唯待たれるのは其の損失を償ふべき機会、氣が熱つて氣息も断れさうになる。その傍から、彼の見露しの一條があるもかまはず、女の境遇の汚辱をば驚くべき、數多の長所を埋合せを付けてやらねばなるまいと、それも亦心繫りの一つになる。約束の時間になると夢心地で飛んで行つた。慥うして訪ねて行くがために、女の燃え易い心が、一層の満足を感ずるか否

1743(32)-1744(33)

1743(32)-1744(33)

うかは分らぬけれど、とにかく彼女のブライドだけは、これがために充たされることは疑ひない。それに自分の粗忽の罪は、どんな事をしてでも詫び入れる方法があらうと思つて、まだ遇はぬうちから、ほくほくと獨りて悦に入つてゐた。女は此の計畫を私に實行させなかつた。彼女の家へ使に遣つた舟子が、引返して來ての返辭に、ゾリエッタは既う昨晚此家を發つて、フィレンツェの方へ去つて了つたとあつた。自由になる中は、それ程に戀しいとも思つてゐなかつたが、今斯うして手の中から抜け出されて見ると、はじめに自分の愛の痛切なものであつたことが思ひ知られた。遺憾の極、知覺を失ふやうになつた。どの位女が可愛くて、牽きつけられる程に思つたにしても、その女を失つたことは尙だしも我慢が出来るけれど、去る時に落んで、嘸自分を蔑視つて行つたことであらうと思ふと、それだけは奈何しても残念で堪らぬ。

私に關係した二度の艶物語は、然ういふ譯であつた。十八箇月間、ヴェネチアに居

1743(32)-1744(33)

たけれど、その外に是と言つて話すやうな事は別にない。唯もう一つと言つた所でこれはほんの序の口だけに過ぎなかつた。色男のカリオは、何時も何時も他の機嫌取りをするやうな女ばかり對手にしてゐるのは面白くないから、一番河岸を替へて、自分の専有物に出来さうなのを拵へたいといふことを考へて居た。そして彼と私とは、一身同體といふ間柄で、その腹中を打ち明けた。ウエネチアでは往々ある慣ひのとほり、共同て一人の女を圍つて置くといふことにしては何うだ、と持ち込んで来た。私も後へは退かなかつた。第一安心の出来る女でなくてはといふことで、カリオが一生懸命駆けずり廻つた末、到頭生擒つて来たのは、齡も未だ辛と十一か二ぐらゐの小娘であつた。折から無慚な母親が、その娘を賣り物にして、客を捜してゐる處であつた。私達は其の娘を見に行つた。愛憐の情は、その子供を一目見るとすぐ動いた。髪も未だ色が浅い。そして羔のやうに素直で、誰の目にも伊太利亞育ちとは見かねる方だ。ウエネチアといふ處は、至つて生活費の廉くて済む國であつたから、厩かな金を母親に遣つて、娘の養育料にさせた。娘は聲がよいので、將來それを資本にして立つやうにと、スピネッタ spinetta (鍵盤を有する絃

1743(32)-1744(33)

樂器を一臺買つた上に、唱歌の教師をも一人附けて遣ふことにした。此の一切の費用が、月割にして一人前二ツ、キイノ(約計九圓二十錢)まで費らぬくらゐで、それ外の方の失費が助かることは大抵でない。それはよいが、娘がもつと大きくなつてくれなくては、何にもならぬのであるから、畢竟遠い後の收穫を當て込んで、精神と種子を播してゐるやうなものであつた。しかし、那樣文句も言はないで、毎晩他愛もなく子供の所へ入り浸りになつて、無邪氣に騒いだり、喋けてばかり過ごした。其の樂みはいよく、女を自分の意に従はせた時にも優つてゐたか知らぬと思はれる位であつた。吾儕が女に戀著するのは、稀の刹那の強烈な情火に由るよりも、日常生活を續けて行く間の、ちよいちよいした愉快にもとづくのが一番多いのと同じ譯である。何時とも無く、私の感情は、この小さいアンツレタ Anzoleta に牽き寄せられて行つた。がそれは寧ろ父としての愛に近く、感覺の欲は殆んど影を收めて、前の愛が濃くなればなるほど、後の欲はますますその乗ずる機會を失ふと言つた形であつた。そればかりでない、この娘が年頃になつたときに、若し私がそれを弄ぶやうなことをしようものなら、近親間の不倫な罪を犯したと同じやうな、

良心の責苦を受けたに違ひあるまいと思つた。カリオは奈何かと思つて見ると、尙且知らず、識らず、私と同じやうな心の傾向を持つて来た。豫期したとは全く質の違つた快樂ではあるが、それでも面白味はあるから、何といふ氣なしに、唯追求して行つた。縦しんば女が成長の後に、甚麽美女になつたらうとも、斷じて其の純潔を破壊するやうなことはなく、却つて其の擁護者として立つたことであらうと思はれる。程なく私の身の上に異動があつたために、折角の勞作を分擔することが出来なくなつた。唯自分が斯う考へてゐたといふことより以上に、何の功績もない事になつて了つた。是から旅行談に移らう。

1743(32)-1744(33)

モンテエグ氏と別れるに就いて、最初の積りては、一旦ジッネエツに歸つて、種種な邪魔を拂つて、哀れな母に再會の出来る時を待たうと思つた。ところがモンテエグ氏と争論の一條が、聒しく世間に響いて來たらうに、彼は又其の顛末を政府へ報告するといふやうな莫迦をし出したから、勢ひ私も自分で出る所へ出て、事情を審

1743(32)-1744(33)

かに聴き取つて貰ひ、大使の狂態をも知らせ置く必要が起つて來た。まづヴェネチアから手紙で、この決心をテイユ Phail 氏の處へ通知した。これは、アムロオ氏の歿後、臨時外務大臣を勤めてゐた人である。其の手紙を出すと同時に私は出發して、ムルガモ Bergamo へモ Como から、ドモドッソラ Domo d'Ossola を通つて、サンブロン Simplon 峠を越えた。シオン Sion まで來ると、佛蘭西駐劄の代理公使シエニョン Chaignon 氏の懇篤な待遇を受けた。ジッネエツではラクロジッウル氏が、また同様の待遇振りであつた。此處でまたゴオフクウルとの舊交を温めた。此の人からは受け取る筈の金があつた。ニョンは其の儘すぐどほりして、父には遇はなかつた。遇つても詰らないと思つては、父に遇ひに行けば、繼母が碌に私の言ふことも聴かないで、今度の不始末を何だ彼だ言ふであらうと思つて、それが可厭さ故であつた。父の舊友で、書店の主人のヂウヴィヤアル Duillard が、その不心得を嚴しく私に諭した。私はその譯を話した。そして繼母には顔を合はさずに、不心得の申譯をしようと思つて、馬車で二人はニョンへ著いて、或る旅籠屋へ這入つた。ヂウヴィヤアルは哀れな父を連れ出しに行つてくれた。父は息急きと走つて來て、

私を抱きかかへた。三人で食卓を圍んで、久しぶりに言ひ知れぬ心のやさし味を感じながら一夜を話し明かしたが、翌朝私とデヴィヤアルは連れ立つて、又ジッネエツへ歸つて來た。此の時のデヴィヤアルの行き届いた心ぞへを、私は何時も感謝してゐる。

向つて行く道筋は里昂を通らぬ筈だが、こと更其處へも寄ることにしたのは、モンテエグ氏の卑劣しい根性から出た、或る不正事件を確めるためであつた。金糸で刺繍をした中單を一枚、カフスを二三對、白い絹の靴下を六足、これだけ容れた小さい箱一個を、巴里から私が送らせたことがあつた。モンテエグ氏の勸めて、私はその箱といふよりもその小包を彼の荷物と一緒に差し立てさせた。俸給を受け取る時になつて、彼は甚い懸値を算入した書出しを手づから書いて、其の小包——彼の書いた文句には大相一個としてあつた——の目方は十一クインタアル quintale (約計百四十三貫)もあるから、法外に高い運賃が費つたといふ事であつた。ロガン氏の紹介で、その甥に當るポアロ氏が親切に調べてくれた結果、モンテエグ氏の謂ふ大相の目方は、實際四十五リブラ libbra (約計五貫六百匁) しかなかつたといふこ

とが、里昂や馬耳塞の税關で證明されたのみならず、其に相當するだけの運賃しか拂つてゐないといふことも知れて來た。斯うして證據の擧がつてゐる事件は勿論、その外にもこれと似た種々な覺え書を製へて、巴里へ出て行く道道も、どうか是等の證據書類を十分益に立たせたいものと、心の内は煮え返るやうであつた。

今度長い旅をする間に、コモやブレエや、その外でも、多少珍談の種を蒔かぬてもなかつた。いろいろ異つた見物もした。殊にボルロメオ諸島 Isola Borromee の見聞記などは、書く値が十分あるのだが、今は時間が許さない上に探偵どもが私を喚ぎ廻はつてゐるために、不完全でも大急ぎにこれだけ書き上げて了はなければならぬ。嗚呼落ちついた時間が欲しい！ が、若し他日神護に由つて、穩かな日が私に來たときには、なるべく此の本を書き改めたい。それが出來なければ、少くとも補遺の部でも書き足して、重要な記事を收めたいと思つてゐる(原注)。到頭私は、この計畫を中止した。譯者云。ボルロメオ諸島は、亞爾伯の南麓なるマジオレ Lago Maggiore 湖の西岸近くに位する島羣。得ならぬ風致を具へたイソラ・ペルラ Isola Bella や、イソラ・マドレ Isola Madre などが、その内で最も名高い。探偵云云のことは、後

第七卷
文て明かになる。

1743(32)-1744(33)

私の辭職一件は夙くから巴里で噂されてゐたものと見えて、今來て見ると方々の役所では素より世間までが誰一人大使の大癡呆を罵らぬ者はないくらゐであつた。巴里でも其の位聒しい上に、ヴェネチアの方では絶叫して大使の非を鳴らしてゐるのであり、私は私て否を言はせぬ數多の證據を提供してゐるのに、それでも私は正當な判決を當局から受けることが出来なかつた。満足も賠償も得られないのみならず、俸給の件は依然大使の意思に委せるより爲方がないと言つて刻ね附けられた。私はもと佛蘭西人でないから、國家の保護を要求する權能がないといふ事と、此の事件は元來大使と私と二個人間の私事に過ぎぬといふことと、唯それだけの理由からであつた。一般の人は皆侮辱だ、損害だ、不幸だと言つて私に同情し、大使の強暴と酷薄と、不正とは、彼の名譽を永遠に塗り潰すものであるとした。それでも大使は依然大使である。私はもとより一書記官に過ぎぬ。社會の秩序

1743(32)-1744(33)

といふものがあつて、公平なる宣告を私に與ふことを吝むのである。いくら足掻いても徒勞に歸するのは、是が爲に外ならぬ。一件を聒しく言ひ立てて、彼に相應しい評判を試みて居る間には、必と私に口を喋ませようとする者が出て來るだらう。それこそ這箇の望む所て、然うなれば有利な判決が得られるだらう。それは決してその命に服しないと然う決心した。然しそれは未だ專任の外務大臣の無い時であつた。て、私の旬旬いふ聲ばかり大きく、傍から嗽をかけたなり、一緒に難つて吠え出す者さへあつたけれど、訴訟は其なり居坐りになつた。理は此方に十分ありながらも、是認される見込のないに萎頓して、何時となく最初の意氣込みも失せ、到頭その儘泣き寝入りになつて了つた。

這箇の豫期とは反對に、酷い取扱ひを爲向けた唯一の婦人は、ブッザンヴァル夫人であつた。階級や門地の特權といふことと練り固めた頭腦で、苟くも大使ともあらう人が部下の書記官風情に不埒をしたといふことは、彼女には考へ得ぬことであつた。私を待遇する上に、此の偏見が這入つて來たのである。私は非常に癢に觸つて、其の邸を出るとすぐ、思ひ切つた激しい荒つぽい手紙を出して、その後は

1743(32)-1744(33)

二度と其の邸に足ぶみもしなかつた。それから見ると、神父カステルは尙だしも深切な方であつたが、これとてもジエシイチャクな腹の底の測られない仕打をする間から、彼等の社會の金科玉條とも謂ふべき、弱者は強者の犠牲、といふことを、飽くまでも墨守してゐるらしい様子をちら／＼見せてゐた。私は何處までも自分が正しいと信じてゐる上に、天性の負けぬ氣で、彼の僻した考を長く堪へ忍ぶことが出来なかつた。私はカステルとは疎くなり、同時に、彼の外には知つた人もなかつたから、エスイタ僧の處へも行くことがなくなつた。同じエスイタ僧でも、神父エメエなどはすぐれて純朴な質であつたが、然ういふのはまづ稀だ。大抵エスイタ僧と言へば、專制的な、そして策士風の處があるのが面白くなく、蟲が好かぬやうに思つたから、其の後は話をすることも、顔を合はすこともなくなつたが、唯ヂ、パン氏の家で二三度遇つた神父ベルチエ Borthier だけは例外にして置いた。此の人は、ヂ、パン氏と全力を協せて、モンテスキュー Montaigne の駁論を書いてゐた。

書きをさめに、モンテエグ氏の事で残つてゐるだけの事は、みな此處で書いて了はう。彼と喧嘩の最中に、私は、こんな所には本當の書記官など要つたものでない、

1743(32)-1744(33)

代證人の書記ぐらゐる澤山だ、と言つて罵つたことがあつた。それが果して事實となつて、私の後任には眞正の代證人が据ゑることになつた。が一年も経たぬ内に、この男は、大使から二三萬リイヴルの金を盗み取つて禁錮を喰つた。それから引き續き彼は散散な悪評や、醜聞を藉口にして、側人たちを逐ひ出すやら、到る處に喧嘩を買つて廻るやら、人足の様な者でも、忍びない程の侮辱を浴せられるやら、あらゆる限りの癡愚をし盡した後、到頭佛蘭西の方へ召返されて、田舎へ引つ込んで了ふやうになつた。言ふ迄もなく、此の懲戒の理由には、私との一件も這入つてゐた事は明かだ。それかあらぬか、巴里へ歸つて少時経つと、其の家の執事を寄越して、私へ仕拂の決算を濟し、幾許の金を置かせた。私も金には困つてゐた。ヴェネチアの方の借金、言はば名譽の負債といふものが、始終心に重荷となつてゐた。私は那樣負債や、又かのツァネットオ・ナニの手形に對する負擔をも、機會さへあれば、濟したいと望んでゐた。遣らうといふ金だから私は受け取つた。一切の債務を果たした後は、復舊の一文無しになつて了つたけれど、今迄の堪へ難かつた重荷が、是ですつかり下りた氣がした。さて其からは、モンテエグ氏の事に就いて、全く噂も聞か

なかつたが、何時であつたか、死んだといふ事が何かに出てゐた。主よ、願はくばこの哀れなる者に永遠の安息を與へ給へ！ 彼を大使になぞといふ事は初から間違つた話だ。謂はば子供の時に、私を法律家にしようとしたやうなものであつた。然うは言ふもの、とも斯く私の後見て位置を保つことが出来ただけは豪い。昔私がグウッオン伯に身の成行を預言された、その道へ速く私を押し進めたのも彼の力であつた。但しその位置を辱しめぬだけの資格は、後年になつて、私が自分で磨き上げたのであつた。

正義の辯明が悉く無効に終はつたのを見て、民権の蹂躪に對する激昂の種が、私の心に播かれた。民衆の安寧とまことの正義とは、いつも眞の秩序の仇敵たる、虚偽の秩序の犠牲に成り、弱者の威壓と、強者の跳梁とが、當然の事のやうに公認されるやうになつたのは、皆その愚劣な制度から來ることではないか。がこの時だけは、或る二つの原因から、種の生長が妨げられた。一つは私自身が當の事件と關係してゐて、言はば自己の利害といふものが、手傳つてゐるから、到底偉大な、高貴な計畫にすることは出来ず、随つて神聖な心の發動を促すに足らなかつたからである。

1743(32)-1744(33)

然うした心の發動は、實に一點の私意をも交へないで、純一に正義を愛し、純一に美德を愛する所から起つて來べきものであるからだ。今一つの原因は交遊を樂んだ事だ。それが爲に平和な友情が湧き出して、激昂は一方ならず鎮められた。

ヴェネチアに居た時、親友カリオの友人であつた一人のピスカヤ *Discalza* (*Vizcaya*)

人と知己になつた次の節に出るアルツナを指す。それは誠實な人でさへあれば、誰の親友にもなられる人であつた。齡も未だ若く、瀟洒な風采を備へて、あらゆる藝術に身を委ね、あらゆる美德に心を磨いた。この人が美術研究のために伊太利亞旅行をして、一通り觀てまはつた後は、眞直に郷里を指して歸つて了はうとした。君のやうな諸科學の奧秘を聞くべき天才に取つては、美術品などは苟且の娛樂に過ぎぬものだ。斯う私が言つて、その方の趣味を起させるために、巴里へ廻つて其處で半年も滞在して見れば、奈何かと勧めた。彼は私の言つた通りになつて、巴里へ行つた。その滞在中に、私も丁度巴里へ行くことになつて、其處で二人は落ち合つた。彼の宿は一人には勿體な過ぎるほど廣かつたので、半分貸さうかといふから、私もそれに従つた。行つて見ると、熱心に高い程度の科學を研究してゐた。

1743(32)-1744(33)

1743(32)-1744(33)

彼に對しては困難な學問といふものがない。非常な速力で片端から何でも掴み喰ひした。それでよく消化して行つた。無意識に、心の糧の飢ゑに迫つてゐたところであつたのに、それが得られるやうになつたのは、私のお庇だと言つて、氣の毒なほど感謝した。強い彼の精神には、光輝と力とが充滿した。我が望む親友はこれだ。然う思つて隔てなくした。二人の趣味は固より同じでない。論争も絶えなかつた。互ひに頑固を張り通して、一步も譲ることをしなかつた。それでゐて二人とも分離しようといふ氣にもなれなかつた。乃至は説を異にしてゐるにも關らず、やはり對手が従前の態度を改めて來ることを望まなかつた。

イグナアシオ・エムマヌエル・デア・アルツナ Ignacio Emmanuel de Alzuna は、西班牙では容易に見られない人物の一人であつた。否、このやうな人は、西班牙の名譽にも似ず、然う澤山は出なかつた。彼は西班牙人によく見る熱狂し易き國民性を有たなかつた。些々たる角逐の念慮は、その頭にも胸にも這入つて來なかつた。彼のプライドは、復讐などいふことを冷笑した。現に彼は、極めて冷靜に自分の心靈は決して何人も冒す事は出來ぬといふことを、幾度も言つた。婦人に慇懃を見せるこ

1743(32)-1744(33)

とはあつても、性根を失すやうなことはなかつた。女と戯れるのは、子供と戯れるやうなものであつた。友人の戀女などに、近づいて喜んでゐても、自分で戀女を拵へたといふやうな事は聞かない。どころでなく、那樣ものを持ちたいといふ氣すらなかつたらしい。胸中に充ち漲る道德の靈火は、感覺の慾火の燃え立つ隙間を塞げて了つた。

方々を旅行して歸つて來てから彼は結婚したが、未だ年若の身で、子供を残したまま死んで行つた。彼の妻なる人は、此の男に愛情を味はせた最初の、そして最後の女であつたといふことを、私は自分の身に引き較べて見て、頷いた。表面上彼は一個の西班牙人として熱心な信者であつたけれど、裏心には天使の敬虔を持つてゐた。私は別として、此の人程自由な心を持つた人を見た事がない。彼は他人が宗教に就いて甚だ意見を抱いてゐるかを訊いた事はなかつた。その友が猶太人であらうと、新教徒であらうと、土耳其人であらうと、妄信者であらうと、無神論者であらうと、その人間が誠實でさへあるなら、那樣事は一向貪著しなかつた。外の事にはあれほど頑固に自説を曲げぬ人が、宗教や道德の話になると、急に取り片附け

て黙つて了ふか、然もなければ、唯、

「私は何よりもまづ、自分のことを考へなければならぬ。」

と言ふのみであつた。不思議なことは、高い心の状態に在りながら、一方では些事をも決して疎かにしなかつた。一日の爲事をするのに、細かい時間割を極めて置いて、若しその時間が来れば、縦令文章の一句を読みかけた處でも、すぐ其の場を本を閉ぢて了つた。それほど正確に豫定を履んだ。斯うして分割した時間中に、種々な研究もする、反省もする、談話もする、祭式もする、ロクも讀む、ロザリオ Rosarium 訪問、音楽、繪畫、皆きちんと時間が極まつてゐた。歡樂も誘惑も、此の順序を狂はせることが出来ない。それが出来るのは、たゞ定められた課程ばかりであつた。私もその摹倣をするか知らぬと思つて、時間表を見せてくれたときは、思はず噴飯したけれど、終には感嘆を禁じ得なくなつた。彼は決して他を束縛しなかつた。その代り、自分も束縛を受けることを肯かになかつた。好意の束縛を加へようとする者があつても、膠もなく斥けて顧みなかつた。激昂することはあつたが、癩癪持てはなかつた。脆然とする時はあつても、腹へ溜めて置く風ではなかつた。彼ほど

快活な氣質の人はあるまい。他の皮肉も受け流す代りに、自分も好んで皮肉を言つた。それがなかなか巧い。言はば一種の諷刺家だ。調子に乗り出すと少し騒騒しくて遙か遠くまで聲が聞こえるくらゐであつた。が、嗚呼つてゐるのかと思ふ内に、突然微笑が顔へあらはれることがあり、激昂してゐるかと思ふと、不意に駄洒落を言つて、皆を大笑ひさせることもある。容貌、氣質に、西班牙人らしいところがない。肌膚が白く、顔は淡紅色で、頭髮は黒褐色をしてゐた。體格は立派で、恰好が良かった。彼の心靈の住家としては、實に申し分のない身體であつた。

感情、理性ともに修練を経た此の優美な紳士は、よく人間といふものを知つてゐた。それが私の親友になつたのである。と言へば、私の親友になり得ない人たちは、皆私の傾向を察することが出来るだらう。二人が一緒に居るといふことで、外に何の希望もなかつたくらゐ、極親密であつた。二三年の中に、私はアスコイシヤ Ascotia へ行つて、彼の所有地内で、一緒に暮らす筈であつた。旅行一切の準備が手落なく出来上がつて、出發の日限まで極まつて了つた。然うまでにした計畫も、人の力に能はぬ所は、何とも爲方がない。私自身の災禍、彼の結婚、引きつづいて彼の

死亡然うした意外な事件が降つて涌いたために、二人は永遠に引き離された。

世の中は悪人の酷い企畫ばかりで充ち満ちて、善人の無邪氣な思ひ立は、一つとして成功した例がない。人に依ると随分斯ういふ事を言ひ兼ねないものだ。

他人に許り縋つて行くのは面白くないことと、熟熟私は感じた。その様な危殆しいことは以後はすまいと覺悟した。機會が促すままに、色色と野心も起し、事業も企てては見たけれど、未だ目鼻も附かぬ間に、片端から破落破落壊れて行つたり準備は巧く出来てゐて、直ぐ身の禍となつたりするのを見ては、二度と繰り返す元氣も消えた。この後は一切他力は恃まぬ。唯我が腕一本を頼りに、獨立自營の人とならうと決心した。と程なく存外自分の腕の恃むに足ることを知つて、今まで餘り自ら輕んじ過ぎたことを悔いるやうになつた。そこでヴェネチア行きのため、一時中止して置いたオペラの製作に取り掛つた。心靜かに此の爲事に浸る氣で、アルツナと別れた後は、舊の旅館サン・カンタンへ舞ひ戻つた。其處は閑靜な區の中で、リックサンブウルへも程近く、サン・トノレ *Saint-Honoré* の騒騒しい町に住んでゐるよりは、甚麽にか爲事に便宜が多かつた。語憺たる私の境涯の中へ、天が降

した唯一の慰藉——この慰藉あるがためにこそ、我が境涯の悲慘を忍ぶことも出来た——その唯一の慰藉が此の宿で私を待ち受けて居た。而もそれは淺い一時の馴染でない。私はその成立の端緒から説き出さねばならぬ。

宿の主婦は新たにオルレアンから来た人であつた。針線女には、やはり自分の郷里から、二十二三ばかりの、一人の女を伴れて来た。食事などでも私達と一緒にさせた。女はテレエズル・ヴスウル *Thérèse Le Vasseur* と言つた。父はオルレアン造幣局の吏員で、母は商賣をしてゐたが、家柄は良かった。夫婦の間に子供が多かつた。オルレアン造幣局が廢局になつたので、父は手を拱ねて途方に暮れてゐると、母の方の商賣も大損失で、資本を耗つて了つた。で、店を畳んで家内づれて巴里へ移して来た。その後の一家三人の口は、この小娘の手一つで糊らしてゐた。

私が食卓で此の娘を始めて視た時から、婉淑な舉止はもとより、生々とした情深さうな目の色に打たれて自分に取つては又とあるまじいものを感じた。食卓に

集る人々はボンヌフォン氏の外に、愛蘭士の僧侶たち、ガスコニ、Gasconne 人などといふ種類であつた。そこへもつて来て、主婦が第一検査のない人と来てゐるから、眞面目な話をし、行儀をも崩さぬ者といへば、私一人しかなかつた。皆が其の小娘を馴ら物にすると、私が何時も女の味方をしてやつた。だから、直ぐ私が目敵にされた。若し私が此の哀れな少女に對して、おのづからの愛情は少しも無かつたにしても、同情や保護をする内には、やはり其が起るのは當り前であつた。私は始終舉動や對話の上に、嗜みを重んずる風で、異性に向つては殊にそれを努めた。今はもう立派にこの娘の代闘者と名乗つて出た。娘も私の配慮は知らないことはなかつた。口には得言はぬ感謝の心が、自然と眼の輝きに顯れて、ますます私の心を惱亂させた。

それは、ごく内氣な娘であつた。私の臆病は言ふまでもない。慙うした二人の氣質は、互ひの接近を邪魔する道理であるのが、反つて驚くほど速かに二人を結び附けた。主婦はそれと氣取つて、怒りの餘り辛く當るやうになつたために、いよいよ二人の間を親密にさせた。娘に取つては、此の家では私の外に誰一人頼りにす

る人もない。て、若し私が家を出ると、切なさうに其を見送つて、此の保護者の歸つて来る迄は獨りてしくしく泣いてゐた。二人の感情の投合、または氣質の類似は、程なくお定まりの結果を生み出した。彼女は私を誠實な人間と見て取つた。それは間違ひでなかつた。私はまた彼女を感じの鋭い、質實な媚びを賣らぬ人間だと信じた。この見方も亦確かであつた。私は決してお前は見棄てない、その代り結婚しようともすまい、といふやうなことを口へ出して言つた。愛と尊敬と、眞率な心、それらが私の勝利を導びいた。一步進んで彼女を手の中の者にしないでも、十分幸福であり得たのは、全く彼女の心が柔順で誠實であつたからである。彼女が自分で資格がないと懸念したことは、他の事情よりも、一層私の幸福を遅くさせた。彼女が誰と言ふまでには、心の中に狼狽と混亂が起つた。わが口からは説明出来ないけれど、克く私に其の點を呑み込んで貰ひたいといふ色が見えた。私は彼女の然うした煩悶が、何處から來たかといふことは探つて見ないで、非常に見當の違つた、しかも女を侮辱するにも似た臆測をして見た。大方悪い病でもあつて、私の健康を損ねることを氣遣つてゐるのであらう、といふ風に考へた。その

爲に打撃は受けなかつたけれど、急に心細く思はれて来て、四五日はまるで自分の幸福に毒藥を注入されたやうな気がした。

互ひの心が疎通しなかつたから、この事に就いての二人の談話は滑稽を極めた。寧ろ謎語か譚話に近いものであつた。彼女は私を正眞の狂人と思つて了ひ、私はまた彼女を捉まへ所のない人間と思ふやうになつて来た。到頭二人は互ひの意中を打ち明けて了つた。彼女は涙ながらに物心の附きかけた頃、自分の無智から後先に一度の失策を爲出来たといふことを自白した。對手の男の名前まで私に聴かせた。女の心が解ると同時に、私は歡喜の叫び聲を揚げて、斯う言つた。

「巴里で、しかも二十歳過ぎて、お前のやうな貞操な女は稀しい！　なあテレエズ。心の美しい、身體の丈夫なお前を持つことは、私には勿體なさ過ぎる。私も無理な事は望まない。お前が何にも知らない女だからつて、些とも私に取つて差支はない。」

最初は唯一時の氣晴らしにする積りてゐたのが、段段と深入りして、今では既う一個の伴侶にして了つたといふことに氣が附いた。此のすぐれた少女と少しば

かり昵懇になり、又私自身の位置を少しばかり願つて見ただけで、——唯一時の快を求めることのみを考へてゐた間に、餘程幸福に近づいて来たといふ事を感じた。野心の火も消えた後の私は、胸一杯に強く鋭い刺撃を受けて見たかつた。具體的に言へば母の代りになる人が欲しかつたのだ。最早私は母と一緒に住む事もならない。「母の教へ子と偕に住むべき人、殊に私に見出したやうな純潔順良な心を持つてゐる人が、私に必要になつて来た。光明に満ちた前途を見限つたかばかりに、平穩な家庭の私生活で其を補ひたい心がやまやまであつた。孤獨の時の私の心には、大きな空隙がある。それを填めるには他人の心を持つて来る必要がある。天が必要物と見て、私に作り與へたものの全體若しくは一部をば、運命が来て奪つて行つて了つた。其の時から私は孤獨の裡に在つた。何爲なれば、全と無との中間に介まるやうな物は、いつも私には持てなかつたからだ(譯者云。自分は極端から極端に移る人間で、中庸が守れない、といふ意)。テレエズを得て、始めて私の要求した資料を見出した。種種な遭遇の間にも、彼女あるがために、私としては是以上望まれぬほどの幸福な生活を味ふことが出来た。

1743(32)-1744(33)

第一に私はテレエズの教育に骨を折つた。がそれは無効に終はつた。彼女の心意は自然が作つたままである。修養も教育も何の影響をも與へぬ。遠慮なくいへば、何うか斯うか筆持つことは知つてゐたけれど、讀むことはまるで駄目であつた。ヌウヴ・デ・プチ・イ・シヤン Neuve-des-Petits-Champs 町の家に住んでゐた時、窓の真前に、ボンシヤルトラン Pontchartrain 館の時計が見えてゐるので、時間の計へ方を教へようと思つて、一月の餘もかかつた。今でも未だ本當に解つてゐないらしい。一年十二月の名を順に言ふことも出来ない。甚廢に呑み込ませようと思つて見ても、數字一つ記えられぬ。金錢の計算物の相場、どれも知らぬ。談話の用語が、時時自分の言はうとするのと反對になつてゐることもある。何時か私は、リクサンブル夫人の慰みに、テレエズの日常用語を集めた辭書をこしらへたことがあつた。そして彼女の左言は、私の出入りした社會でも名高いものになつた譯者云。テレエズがルソオに與へた手紙の見本がここにある。上が誤謬だらけの原文で、下のは正誤である。

1743(32)-1744(33)

“*Mesieurs ancor mieu re miss quan jeu ceures o pres deu vous, e deu vous tennos tous la goies e Mais il sera encore mieux remis quand je sera auprès de vous, et de vous témoigner toute la joie et latandres deu mon querque vous conez ces que gdon gour e rus pour vous, e qui neu finivres quolobes la tendresse de mon cœur que vous connaissez que j'ai toujours ene pour vous, et qui ne finira qu'au tombeau: ces mon quere qui vous pdeu ces paes mes le vre.....je sui avestous lamities e la veu conez cacen cest mon cœur qui vous parle, cest pas mes lèvres.....Je suis avec toute l'amitié et la reconnaissance possible e la tachment, mon oher bon ami, votre humble et bonne amie, Thérèse Le Vasseur.*”

自稱代名詞の「わたくし」も、我が名の「テレエズ」すらも書けないぐらゐの文字の知識の度合にあつた。これに他は推測しがたくない。然しながら、この知見に缺けた極端に言へば、頑冥不靈の女も、事に當れば有力な援助を與へる事がある。一度ならず、或は瑞西で、或は英吉利で、若しくは佛蘭西で、私がカタストロフの中の人になりかけた度ごとに、自分では見得なかつた事情を、彼女は夙く洞察してゐた。彼女の勸告は、決して侮れなかつた。私が盲目的に危険に向つて突過しようとする時に、彼女は克く私を控制めることが出来た。

上流の婦人達の前でも、貴顯大官の前でも、彼女の感情機轉、應答行爲は、いづれも一般からの尊敬を拂はせ、私には心からの感謝を捧げさせた。

戀人を持つてゐると、その愛の力で、渾べての心意作用が自然と豊潤になる。随つて他の考想を追求する必要もなくなる。テレエズと一緒に住んでゐる私は、世界の大天才と膝を交へてゐる様に思はれて、何とも知れぬ愉快な氣がした。母親は舊モンビポオ Mompipéan 侯爵夫人の下で人と爲つたといふところから、自分の聰明を鼻に掛けて、娘の處置を自分でつけようとした。その奸策は、私達の淡泊な交情を破壊した。このお肩介に惱まされた爲に、今まで世間を憚つて、テレエズを連れて出歩くことすら得しなかつた私も、幾分か大膽になつて来て、二人で野遊びに出掛けたり、楽しい飲食をも借にするまでになつた。奈何見ても彼女の愛し方は、誠實一遍とより思はれぬので、私の愛撫も嵩じて来る一方であつた。斯う打ち解けて來ると、他に何の望みもなくなつた。未來の事などは些とも氣に縈らぬ。縈るとすれば、其は唯この現在の延長したものだと思ふだけのことである。出來得るかぎり、この現在の瞬間を永續させたい。そればかりが私の願望であつた。

此の交情から眼を轉じて見ると、他のすべての慰安は、皆な興味の淡とした、無用のものに思はれた。テレエズの傍へ行く外には、何處へも私は出なくなつた。彼女の室は私の室になつた。この隱遁生活は、自分の爲事には又なく好都合であつた。僅か三月經つか經たぬ中に、かのオペラの詞章も曲譜も、全く脱稿して了つた。剰す所は若干の伴奏と、少しの修正だけとなつた。此の勞作は、恐ろしく自分を疲らした。私は、フリドルに頼んで手傳つて貰つて、利益の幾分を渡すことにした。彼は二回ばかり来て、オヴィヂウスの幕の中へ、幾らか手入れをしたけれど、骨ばかり折れて、利益が何時得られるとも分らぬ爲事に、頭を埋める氣はなかつた。其きり來なくなつたので、あとは自分の手一つで完成して了つた。

オペラは出來上つたが、今度はこれを益に立てなければならぬ。この算段が作劇以上の苦心である。巴里で事を起さうといふには、獨力ではなかなか行かぬ。て私は我が爲に荆棘を開く人として、ラ・ポプリニエール La Popelinrière 氏を頼まう

1743(32)-1744(33)

かと考へて見た譯者云。有名な理財家。多くの文藝家を聚めて響應することを楽しみとした。そのサロンはバッシイ Pary にあつて繁昌した。私がジ、ネエツへ歸つた時、ゴオフクウルにその邸へ伴れて行かれたことがある。彼はラモオのメエケナス Mécenas で、その夫人はラモオを恩師の君として崇拜してゐた譯者云。メエケナスは羅馬のアウグスツス Augustus の宰相。ウエルギリウス、ホラチウス、プロペルチウス Propertius オヴィヂウス等が、羅馬文藝の黄金時代を現出するに至つたは、多く彼が保護獎勵の結果に歸する。彼の名は、文藝擁護者の別名となつた。其の邸では、ラモオといふと、神のやうに尊まれて、素晴らしい羽振ださうだ。私は、彼の使徒の一人が作つた物なら、喜んで保護するだらうと思つて、今度の作を見せたいと言つた。ところが彼は、その下檢閲を拒んだ。その言ひ種には、自分はバルチシオン partitions が讀めないし、煩くてたまらぬと言ふのであつた譯者云。バルチシオン英語にスコア score といふ。聲樂器樂の樂譜を、各種の樂器に配して製り上げた大譜表。ラ、ポブリニエエルが幹旋して、聴くだけなら自分にも出来るから、演奏者を呼んで來て、或る部分だけ演らせてみては、奈何かと言つた。其以上は私

1743(32)-1744(33)

も依頼の爲様がなかつた。ラモオも濫濫同意はしたものの、傳統も知れず、師授にも由らずに學んだ音樂家の作なら、嘸立派だらうと、口も休めず皮肉つてゐた。私は大急ぎにその中から佳ささうな部分を五六箇所抄き出した。合奏者は彼は十人許りも集まつた。唱歌者にはアルメエル、ラルアル Albert Bernard と、ブルボンノア Bourbonnois 嬢とがゐた。序樂が始まるや否や、ラモオは態と大袈裟に褒め言葉を濫發した。私の自作ではよもあるまい、といふ意を微見かしたのであつた。一段が關る毎に彼は極つて焦燥しさうな容子を見せた。其の中に、次中音部の嘆調に移つて、歌は雄壯豊麗、伴奏は燦爛を極める段になると、もう彼は自制の力を失つて、傍で聞くのも聞きづらいやうな暴言を吐いて、他の度膽を抜いた。そして曰ふには、この曲の一局部には非凡な音樂家の手に成つた處が這入つてゐるが、その外の部分は、悉く音樂といふものに就いて、何の知識も無い者が捏ち上げたとか思へぬ、と慙うてあつた。實に彼の言ふごとく、この作は、不均整な、等差のあるもので、高遠な點もあるかはりに、平板な處も少からずあつた。が、これは誰ても自然の才にまかせて、正則の教育を受けなかつた人には、有り勝ちのことだ。ラモオは、

1743(32)-1744(33)

私を技能もなく鑑識もない、一個の剽竊者に過ぎぬ者であると誣ひた。けれども此の邸の主人を始めとして、其の外の人達は、必ずしもラモオと同じ考ではなかつた。リッウ氏は、當時ラ・ボブリニエール氏又は人の話に據ると、その夫人を、しばしば訪問してゐたから、私の作物のことが耳に這入つて、若しそれが自分の氣に入るやうな曲なら、宮中で演奏させてもよいから、一度全部を聴いて見たいといふ望みてあつた(譯者云)。リッウ氏と名乗つた名高い政事家が、第十七世紀の佛蘭西に三人あつた。第一の頭僧官リッウ氏は、誰も知る第十七世紀最大の政事家で、一六四二年に歿した。第二は、其の頭僧官の甥の子で、元帥リッウといふ名で通つた。一六九六年生、一七八八年歿。第三はこの元帥の孫で、一七六六年に生れ、路易十八世の朝に内閣議長となつた。三人とも等しく公爵であつた。本書に謂はゆるリッウ氏は、右の第二の元帥であつた人である。彼は當代の頹廢的空氣の中に浮遊した歡樂鬼の随一人で、放縱な所業の絶え間もなく、若い時分には三度バヌチエに禁獄され、三度妻を娶つたといふほどの人であつた。而も同時に、一方では外交家並びに將軍として非凡の才を振ひ、後に出るフ

1743(32)-1744(33)

ントノア Fontenoy の戦捷にも與つて大功があつた。嘗て將軍である中に、自分は固より部下の將卒に至るまで、盛んに分捕をして、鉅萬の富を爲つたことがある。それから彼は Petit père de la Marande (分捕の親方) の綽號を獲つた。軍職を退いて後は、また華奢公子の昔に復つて、巴里の宮廷に翱翔した。ルッソオの外には、ヴェルテエルが殊愛を蒙つた人であつた。場所は、ボンヌグアル Bonneval といふ宮内官の邸費用は全部王室から支給されることになつて、四部合唱の、大管絃合奏といふ大仕掛で試演された。指揮者はフランスクウル Francoeur であつた(譯者云)。Francoeur. 一六九八—一七八七。オペラの作若干を残した。當時はオペラ座の監督であつたが、後に宮廷樂師長となる。其の成績は驚くべきものであつた。公爵は頌嘆の聲を放つて叫んだ。タソオの幕中の、或る合唱部が濟むと、突如起つて私の傍へ來た。そして私の手を執つて、

「ルッソオ君、どうも此の旋律には恍惚させられるね。這麼善いのを聴くのは始めてだよ。どうか此曲をヴェルサイエで演らせたいものだ。」

ラ・ボブリニエール夫人はその場所にゐながら、一語も口を利かなかつた。ラモ

1743(32)-1744(33)

等も請待は受けてゐながら、態と出て來なかつた。其の翌日、ラ・ボブリニエール夫人は化粧室で面白からぬ素振を見せた。かのオペラを貶すやうな風をした。ちよいと悪光りのするやうな曲だから、リシワウ氏も一時乗せられ氣味に見えたけれど、もう那の人も本氣に復つたから、餘り自分のオペラに己惚れて、増長せぬが可からう。そんなことを私に言つた。霎時すると、公爵も其處へ見えだが、その言葉と夫人の言つたことは、全き筋褻が合はなかつた。盛んに私の手腕を褒め立てたのみか、國王の前であれを演奏させて見たいといふ考が、絶えず胸にあつたらしく見えた。

「外に何處も缺點はないが、タッソの幕だけは、宮中で演ずるにしちや、些と不都合かも知れないから、那だけは書き改へた方が可いだらう。」

斯う言ふから、それから私は早速自分の室に閉ぢ籠もつて、三週間ほどで、タッソオのかはりの一幕を書き上げた。その題目は「ミウズに魅せられたるヘシオドス Hésiode inspiré par une muse.」私は人知れず此の幕の中へ、自身の才藝と、御勅勞にも、その才藝の修飾にする積りて、ラモオの猜忌心とに關する物語を綴り込んだ。こ

1745(34)-1747(36)

の新幕の高調は、前の「タッソ」のやうに、仰仰しくはなかつたけれど、強味のある點では、此の方が優つてゐた。樂想の卓越してゐることは固より、曲譜は那より一段上であつた。若し外の二幕も、是と同じ價值のあるものだつたら、此の全曲の試演は、まさしく大好成績を收め得たのである。ところが、最後の加筆をしてゐる間に、又一つ外の爲事が出來て、あの方の實演は、一時見合せになつた。

一七四五—一七四七。——フォントノアの役のあつた年の冬、ヴェルサイユでは毎日毎日、祝賀會が始まつて、中にもブチャット・ゼッキ・リイ Petites-Femmes 座では種々なオペラが開演された(譯者云。フォントノアは白耳義の村落。一七四五年十一月、佛蘭西の名將サクスが、英蘭等の聯合軍を此處で撃破した。アアヘン Aachen 和約前の事に係る)。ヴェルテエルの「ナヴルラの王女 La Princesse de Navarre」は、曲はラモオの手に成つたものだが、此の時演ぜられたものの一つであつた。ところがこの題目が變更して「ラミールの饗宴 Fêtes de Ramire」となつたので、原作の間曲のうちへ、澤山

1745(34)-1747(36)

の修正を加へなければならぬことになつた。詞章も曲譜も無論兩方共である譯者云。間曲はオペラの幕間に演ぜられるパレエ、又はその他の軽い出し物で、歌調と舞踏とが伴ふ。であるから、誰か知らずとも出来る人が、この任に當らねばならぬ。ところが、ヴォルテエルも、ラモオも、二人ともこの時はロオトリンゲン Lohengrin に行つてゐて、榮光の殿堂 Le Temple de la Gloire、といふオペラに取りかかつて、手が放されなから、這箇の方へ注意を向けることが出来なかつた。リシッリッ氏は私のことを憶ひ出して、その修正を依頼する旨を言つて寄越した。十分筆を入れるに都合のよいやうに言つて、詞章と曲譜とを別別に送つて来た。まづ何よりも、此の加筆をするに先立つて、原作者の認諾を経なくてはならない。て私は、作者に對する尊敬を失はぬ、誠意を籠めた手紙をヴォルテエルへ出した。彼の返事は次の如くである。原文は書翰束の第一號に在る。

「從來別才として、分離すべきものに思ひ做されたる二種の技能は、貴下に於いて始めて兼具せられたる儀に候。敬と愛とを貴下に獻げざらむとするも得ざるは

1745(34)-1747(36)

この所以に候。唯殆んど價値なき愚作に對して、然る貴下の手を煩さむこと、恐懼之に過ぎたるは無く候。數月前、リシッリッウ公より間曲として、實は彼の曲中に挿入すべき筋のものならぬ、無味且不具なる幾場を、疎漏と拙劣とを厭はず起稿するやうと、眉に火のつく嚴命、黙止難く、委細領承致し候ふもの、忽劇の筆なれば大不出来は申さずとも、事の候。われ乍ら淺問しき作と知りつつ、取りあへずその儘御前には差し出し候へども、到底物の役には立つまじく、然なくとも再度の修正は免れざる處と覺悟致し居り候ひぬ。幸ひにも其の作、貴下的手中に歸し候ふ上は、取捨一に貴意に存すべく候。愚生には其の筋立など、今大方はうち忘れ申し候。匆卒に出でたる假初の略稿なれば、錯誤缺漏は多多これ有るべきを、切に貴下の周匝なる補正を希望致し候。

今にして憶へば、慙愧に堪へたる過失數あるが中にも、彼のグラナダ Granada の王女が牢獄を出でて、禁苑若しは宮闕に入るに至る次第は、間曲を結ぶ孰れの場合にも、一言も説き及ばざりしと記憶し申候。王女を饗宴に請ずる者、巫覡の徒にてもあらばいさ知らず、西班牙の貴族ともあらむ程のものにして、妖魔に似たる所業ある